# 樂譜の讀み方

特201
857

興音會出版

始

特 201
857

# 樂譜の讀み方

新興音樂出版社發行

# 樂譜の讀み方

## 目次


第一章　樂譜とはどんなものか……三
第二章　音の長さを表はすもの……四
一、音符とは何か
二、單純音符
三、附點音符
四、休止符
五、單純休止符
六、附點休止符其他
第三章　音の高さを表はすもの……九
一、譜表
二、大譜表と連合譜表
三、音の定め方
四、變化記號
第四章　音の强さを表はすもの……二〇
一、音の强さ
二、拍子と音の强弱
三、拍子の種類
四、變拍子、連音符、切分法
五、强弱を示す文字
第五章　音程……三〇
一、音程とは何か
二、音程の種類
三、指揮棒の振り方
第六章　音階……三五
一、音階とその種類
二、長音階
三、短音階
四、短音階の形
五、短音階の調の名
六、長階音と短音階との關係
七、音階と長音階の見分け方
第七章　略譜から本譜へ……四三
第八章　各種の記號……四七
一、速度の記號
二、樂曲全體を支配する速度記號
三、樂曲の一部だけの速度記號
四、表情の記號
五、其の他の記號
第九章　樂譜の省略法……五八
一、反復記號
二、8va……の記號
三、音符の略記法
四、裝飾音記號
第十章　各國の音名と調名……六五
一、音の名稱
二、各國の調名
第十一章　實際に應用された樂譜……六八
一、樂曲と樂譜
二、ピアノ樂譜
三、オルガン樂譜
四、ヴアイオリン樂譜
五、マンドリン樂譜
六、聲樂樂譜
七、各種樂譜共通の記號
第十二章　音樂用語の解說……八六
結尾　樂譜の習ひ方……九八

第十三章　和聲法……一〇〇
一、三和音
二、並進行及反進行
三、並行八度及並行五度
四、隱伏八度及び隱伏五度
五、密集位置と開離位置
六、六の和音
七、六の和音の連續
八、四六の和音
第十四章　七の和音の話……一〇五
一、七の和音
二、屬七の轉回
三、七の和音の解決
四、副七の和音
五、減七の和音
六、增六の和音
七、增四六の和音
八、九の和音
九、十一の和音
十、十三の和音



# 第一章　樂譜とはどんなものか

私達が思想を文章で現はす時には文字を使用しますが、それと同じ樣に、音樂を紙の上に現はしますには其を現はす爲めの獨特の記號や符號を使用します。それを樂譜と云ひます。文字と云ふものがある爲めにどんな美しい、或は力強い文章でも書く事が出來ます樣に、樂譜と云ふものがある爲めに音樂を形にして止めて置く事が出來ます。文字が讀めるとどんな文章でも讀むる事が出來る樣に、樂譜が理解され、讀む事が出來れば、その書かれた音樂を理解する事が出來ます。ですから音樂を理解する爲めには先ず樂譜が讀めなければなりません。

樂譜はどうしたら讀む事が出來るか、それは決して難かしい事ではありません。チョット見ると樂譜は文章と違つて日頃見馴れない色々の樣々な記號が符號が使つてありますので理解しにくい樣に思はれますが、決してさうでは無く、極く僅かな記號が一定した方法、手段で變化され、組合されて出來てゐるものですから誰にでも容易に覺えられる事なのです。此の点ではエスペラント語よりも、ずつと國際的で、ずつと容易に覺えられるのだと云ふ事が出來ます。

樂譜は何を現はすか。勿論これは音樂を現はすのです。然し樂譜は前にも云つたやうに音樂を符號で現はしたものですから、音樂の藝術的內容までは現はす事は出來ません。否、その中には藝術的內容を含ん

でゐるわけなのですが、それは樂譜を讀む人の音樂藝術への理解の程度如何に依る事で、換言すれば「眼光紙背に徹する」人にして始めて樂譜から音樂藝術を見透す事が出來るのです。此れは修練の結果到達する事が出來る事でありますが、誰が見ても樂譜によつて理解し得る事は大體大きく分けますと、

一、音の長さ
二、音の高さ
三、音の強さ

であります。此の三つの要素によつて樂譜はその音樂の旋律（メロディー）と節奏（リズム）と和聲（ハーモニー）とを現はす事が出來るのであります。此處に擧げた旋律と節奏とは本書で申上げますが、和聲は難かしい音樂理論になりますから本書では申述べません。本書を讀んだ後に、その專門書によつて研究されん事を望みます。

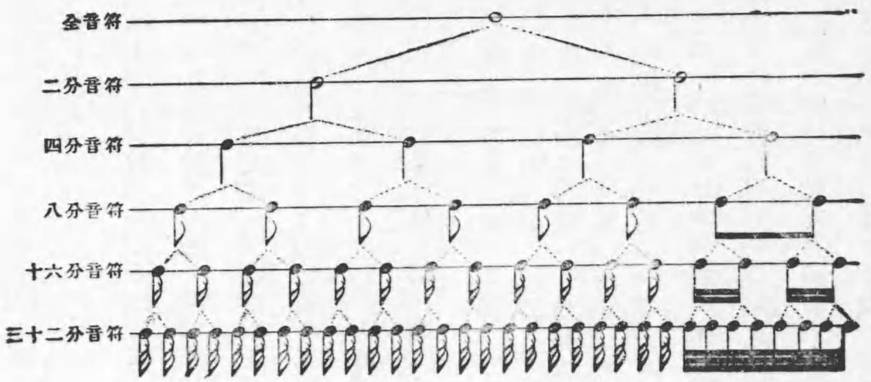
## 第二章　音の長さを表はすもの

### 一、音符とは何か

音の長さは音符と云ふものが受持ちます。云ひかへれば音符は音の長さを表はす記號なのであります。音符は皆さんの御承知の通りお玉じやくしのやうな形をして居ります、それに尾がついたりして音の長さを變化させます。その音符には色々の種類があります、これを大きく分けますと、單純音符（たんじゅんおんぷ）と附點音符（ふてんおんぷ）に分ける事が出來ます。



音譜長短比較の圖




| | |
|---|---|
| 全音符 | 全音符の半分 |
| 二分音符 | 全音符の四分ノ一 |
| 四分音符 | 全音符の八分ノ一 |
| 八分音符 | 全音符の十六分ノ一 |
| 十六分音符 | 全音符の三十二分ノ一 |
| 三十二分音符 | |

### 二、單純音符

單純音符とは普通の音符、何にも添物がつかないで、そのまゝで獨立した値うちを持つてゐる音符を云ふのです。そして普通の聲樂曲やヴアイオリン曲に使はれてゐるものは、大抵上記の六通りであります。このやうに音符は全音符を標準にして段々に半分、半分と其の長さを割つて居つたもので、三十二分音符の次はその半分の六十四分音符で符の形は鈎をもう一つ增した　であります。

音符の名前は、卵形をしたものを、符頭と云ひ棒　を符尾、それに付いて居る旗のやうなものを鈎と云ひます。樂譜によつて此の棒即ち符尾が上になつた

頭　尾　符　符　鈎

り下になつたりしてゐますが、これはどちらでも差支へないものでたゞ譜を書く時の都合だけのものなのであります。

各音符がどれだけの時間を表はすものであるか、その關係は右の表を御覽下さい。

このやうに全音符が一個で占領すべき時間を二分音符では二個なければなりませんし、四分音符では四個、八分音符では八個と云ふ割合でなければ全音符と同じ時間を滿すことは出來ないのです。此の表で見るやうに八分音符より下の音符が二個以上續いた時には、一個宛鈎を附けないで、その鈎の數だけ線をつなげる事もあります。そうしても時間の長さには何の變りもありません。

## 三、附點音符

| | | | |
|---|---|---|---|
| 附點全音符 | 六拍 | 附點音符とは單純音符に點の附いた音符を云ひます。 | |
| 附點二分音符 | 三拍 | 附點と云ふのは、單純音符の符頭の右側に點の付いた音符の事を云ふのであります。此の點が一つだけの時もあり二つついた時もあります。一つの時には單附點音符と云ひ、二つの時には複符點音符（或は二重附點音符）と云ひます。 | |
| 附點四分音符 | 一拍と二分の一 | | |
| 附點八分音符 | 一拍の四分の三 | | |
| 附點十六分音符 | 一拍の八分の三 | | |

このやうに音符に附點がつくと單純音符が附點の長さだけ長くなります。どの位長くなるかと云ひますとその附點の附いて居る音符の半分の長さだけ長くなります。ですから附點音符と云ひますと單純音符にその單純音符の半分の長さを加へたものを云ふのであります。全音符に附點をつけますと、全音符に全音



符の半分、即ち二分音符を加へた事になりますし、時間の方から云ひますとそれだけの時間を表はすことになるのです。これを表にしますと上圖の通りです

單附點音符は以上の通りのものでありますが、複附點音符には通常次のやうなものが使はれて居ります。この二個ついてゐる附點は同じ値打のあるものではなくて、符頭に近い方の附點は、前の、單純附點音符の時の點と同じものであります。二番目の附點はその附點のその附點であります。

| | | |
|---|---|---|
| 複附點全音符 | 七拍 | |
| 複附點二分音符 | 三拍と二分の一 | |
| 複附點四分音符 | 一拍と四分の三 | |
| 複附點八分音符 | 一拍の八分の七 | |

點でありまして、即ち最初の附點の半分の長さを表はしてゐるものであります

ですから複附點音符の長さは單純音符に其の半分の長さを加へ、更にその半分の長さの半分の長さの半分を加へたものであります。（次頁複附點音符の表を御覽下さい。）

尙、附點音符と單純音符が一しよになつて  のやうな形になることがありますが、其時でも、附點音符や單純音符には何の變りもありません。

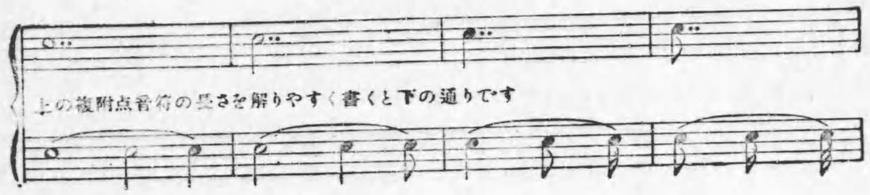
## 四、休止符

音符には音を發させる音符があると同時に、音を休止させる音符もあります。

附点音符

上の附点音符の長さを解りやすく書くと下の通りです

### 複附点音符




今迄述べた音符は音を發させるものでしたが、これから音を休止させる音符の事を申上ませう。此の休止した音を表はす音符を休止符と稱します。休止符が續いてゐる間、音は休止して居りますが、音樂は決して休止してゐるのではありません。音の出てゐない音樂が續いてゐるわけです。ですから休止符も普通の音符とその價値には少しの違ひもありません。たゞ普通の音符を陽の音符と云ふならば、休止符は陰の音符と云ふだけのものです。

休止符を區別しますと、音符と同じ樣に單純休止符と附點休止符の二つがあります。

## 五、單純休止符

單純休止符は單純音符の反對のものだと思へばよいのです。即ち單純音符が音を出して居る間だけ單純休止符は音を休んで居ればよいのです。

普通使はれて居る單純休止符は上圖の樣なものです。

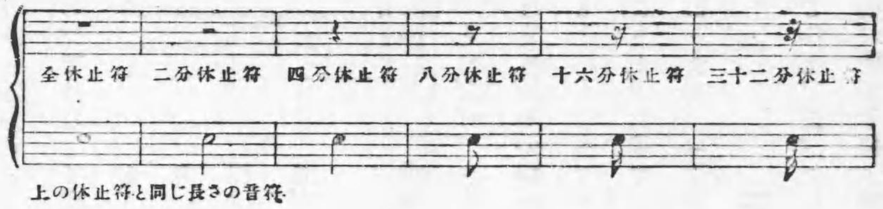
## 六、附點休止符其他

附點休止符も附點音符と同じ理屈です。

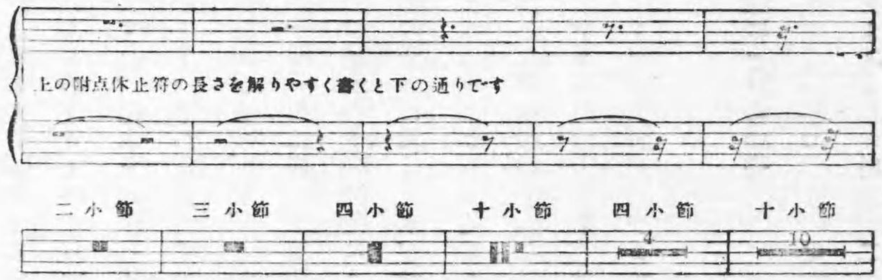
この附點休止符のほかに複附點休止符もありますがそれは複附點音符と同じわけですから說明は省きませう。



### 單純休止符




### 附点休止符




尙、この休止符は小きざみ　休む事を示して居るのですが、このほかに二小節以上の休みを表はす記號もありますから、休止符の事を述べたついでに申上げませう。前頁下圖のやうな記號が書いてある時にはその長さだけ休むのであります。十小節以上休む時でも十小節の休みと同じ形の上に、その休む小節の數を書けば宜しいのであります。

# 第三章　音の高さを表はすもの

## 一、譜　表

今まで音の長さの事は一通り述べましたが、その次ぎには「音の高さ」と云ふ事を知らなければなりません。音の長さを表はす爲めには音符の形によつて其の長短を表はしましたが、音の高さと云ふものを表はす爲には、譜表上の音符の位置によつて、それを表はすのであります。

樂譜を見ますと、音符は五本の平行線の上に書かれて居ります。此の五本の平行線は出鱈目に五本引いたわけではなくて譜表と云ふものは五本の平行線から成立して居るものであります。ですから譜表を五線とも云ひますし、譜表を印刷してある紙を五線紙と云ひます。その五線にはそれ〴〵名がついて居ります。下から數へて最初の線が、第一線、次が第二線、それから第三線、第四線、第五線と呼びます。又、この線と線との間もそれ〴〵呼び方があります。矢張り下から數へて第一間、第二間、第三間、第四間と云ふのであります。

音符は此の譜表の上の位置にあつて、その音の高さを表はそうとするのですが、何しろ譜表は上圖のやうに線は五本、間は四間で音符の位置する場所は九ヶ所しかありませんから、それだけで音符の位置する場所が足りない場合には臨時に線を追加して其の位置を定めてやる必要があります。その臨時に追加した線を加線と云ひます。それですから加線がある以上下にも上にも何本でも引いてやる事が出來ます。加線にも一々名がついて居まして、五線より上の加線を上何線、下を下何線と云ひます。その間も上何間、下何間と呼ぶのであります。（下圖參照）

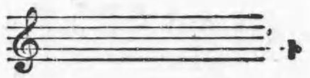
## 二、大譜表と連合譜表

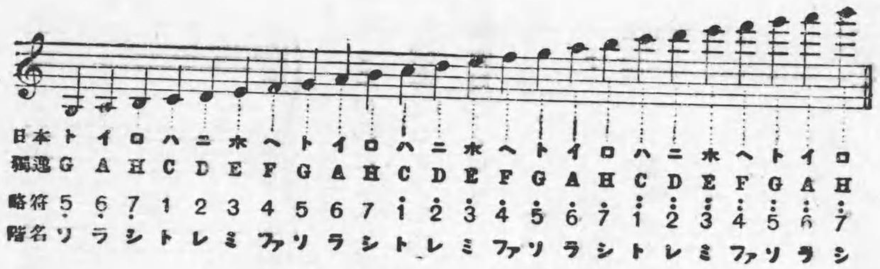
これまで述べました譜表が二つ集つたものを大譜表と云ひます。ピアノやオルガンの樣に兩手を使ふ樂譜を見ますと必ず譜表が二つ重つて居ます。それが大譜表であります。譜表が二つ集つたと云ひましてもそれ〴〵獨立した仕事もしますので加線の必要な時には大いに加線を用ひるのであります。この大譜表よりも、もつと澤山譜表の集つたもの、換言しますと、つまり譜表が三つ以上集つたものを連合譜表と云ふのであります。現在の所で連合譜表の一番大掛りなものは管絃樂の總譜でありまして一頁に、少いので十五から多いのになりますと廿幾つと云ふ譜表が集つて居ます。こんな大きなものでなくても、ヴァイオリンの獨奏でピアノ伴奏の三つ譜表の集つたのも連合譜表であります。このやうに譜表が幾つも集つた時には譜表幾つとは數へないで上から第一段、第二段と數へるのであります。

## 三、音の定め方

此の譜表の上に音符が縱横に書かれるわけでありますが、その書〻れる音符の數だけ音の數があるわけではありません。音樂に使ふ音の數は七つの全音と五つの半音、都合十二の音だけしかないのです。普通の音階（後に説明します）ですと、ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シの七つの音しか使ひません。それなら譜表の上に音符をどう載せるとド、レ、ミと表はす事が出來るのでせうか。

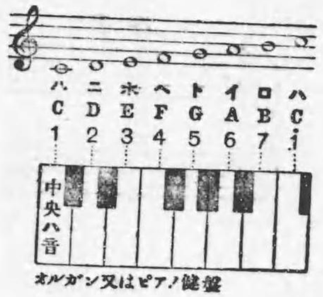
先づ樂譜を御覽なさい。音符の並べてある一番先きに𝄞と云ふ形をしたものがある






でせう。そしてピアノの譜などになりますと下の譜表には 𝄢 と云ふ形のものが書かれてゐるのに氣がつかれるでせう。これ等の形をしたものが始に書かれて居て始めて **ド レ ミ ファ** と歌ふ事が出來るのであります。即ちこのやうなものがついて居て始めて **ド** と云ふ音が定められるのであります。ですから 𝄞 と 𝄢 とは音樂上では音部記號と云ひます。つまり音を定めるからであります。

**ト字記號**、樂譜を見ますと 𝄞 の記號は前圖のやうに書いてあります。此れはよい加減にグル〳〵と書いて一まふのではありません。第二線を中心として、第一線と第三線との間をクルリと廻つてそれから後は自由なのです。何故かうしなければならないかと云ひますと、此の第二線が **ト** と云ふ音を表はす位置だと云ふ事を示すためなのです。で此の第二線の上に位置をした音符は **ト** と云ふ音を表はすことになるのです。**ト**の音と云ふ新しい音が出て來ましたから音の名前について述べませう。音樂に使ふ音は前に申した樣に七つだけでありますが、此の七つの音にはそれ〴〵名

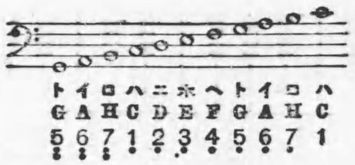


オルガン又はピアノ鍵盤



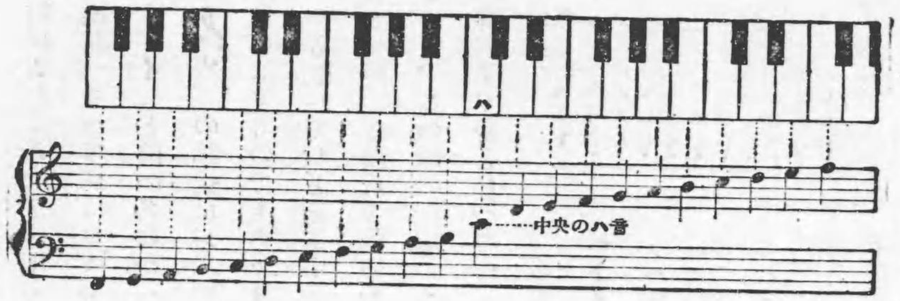
が附けられてゐます。即ちイ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、トの七つで、此れを音名と申します。此の七つの音が繰返へされて使はれるわけでありまして、例へば **ト** と最後の名を云つてまだ其の上に音符がある時には **イ** と前の名にかへつて繰返して呼んで行くのであります。

𝄞 の記號は以上の樣に **ト** と云ふ音の位置を示す記號でありますから**ト字記號**と云ひます。又高音を示すものでもありますので高音部記號とも申します。元來が 𝄞 は英語の**ト**に當る字即ちABCから數へてGと云ふ字から變つて來たものであります。そして高音部記號を付けた時 **イロハニホヘト**の七つの音は前頁上圖のやうに乘ります。略譜と比べますと分りが早いでせう。それからピアノかオルガンかで、この圖の點線のつながつて居る所即ち白い鍵を順次に上の方へと押して行きますとこの譜表上の音符がすぐ音となつて聞へて來るでせう。(前頁下圖參照)




高音部記號で譜が書かれて居ますと **ハ**の音が **ド**の音になります。そして**ハニホヘトイロ**の音が**ドレミファソラシ**となります。

**ヘ字記號（低音部記號）** 𝄢 の事を說明しませう。これも矢張りよい加減に書くのではなくて、曲玉の頭みたいな黑い丸が第四線の上にのつて居なければなりません。これを低音部記號と呼んで居ます。矢張り英語のFと云ふ字が變つたので下即ち日本語だと **へ** になります。第四線が「**へ**の音」だと云ふ事をこの低音部記號は物語つて居ます。で低音部記號を**ヘ字記號**とも云ひます。此の **へ** の音は高音部記號の時の



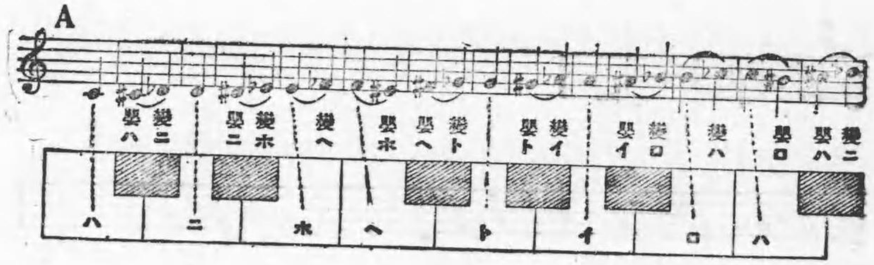

「ヘ」の音とは、音の感じの點から云ひますと同じであります。只低音部記號の時の「ヘ」は高音部記號の時よりも、八度（一オクターヴ）だけ低いのであります。此の「ヘ」から上へ讀んで行きますと　ヘ　ト　イ　ロと行つて次に　ハ　と來ます。此のハは高音部記號の時のハと同じ音であります。此のハによつて此の兩者が連絡してゐるわけであります。でこの　ハ　を中央の　ハ　と、呼んで居ます。これで、高音部と低音部とは赤の他人ではなくなつて、高音部がずつと下つて行けば、低音部に行き低音部が高くなれば高音部に入ると云ふ事が分ります。例へればニ階建の家のやうなもので、高音部は二階で低音部は下で、丁度このハの音が階段の役目をしてゐるわけであります。

この關係は上圖を御覽下さい。ピアノ鍵盤に對照させてみました。

## 四、變化記號

ピアノを彈いてみますと、白鍵ばかりですとドレミと忠實に音を出して行きますが、チョッと黑い鍵を押して見ますと、今迄述べた音では解決する事の出來ない音が出て來ます。どうしてそう云ふ事になるのでせうか、樂譜を見ますと ♯ とか ♭ だとか云ふ形のものが音符の前につ





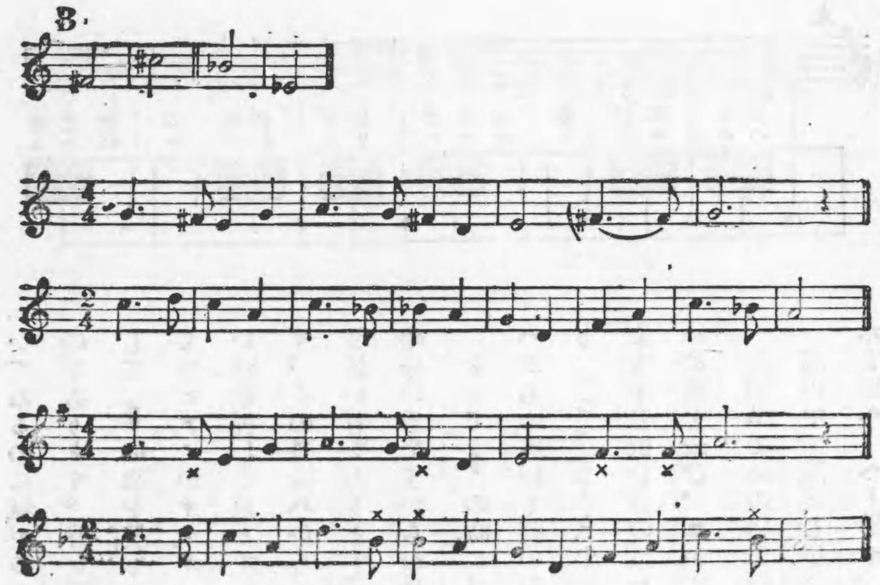

いてゐるのに氣がつかれたでせう。音が變化するのは、これらのものゝ仕業なのであります。音を變化させるものですからこれらのものを變化記號と云ひまして ♯ の事を嬰（シャープ）記號、♭ の事を變（フラット）記號と呼んで居ます。こゝでピアノかオルガンの鍵盤を押して御覽なさい。ハからニに移る間にある黑い鍵を押して見ますとハの音よりも少し高いがニの音よりは少し低い音が出ます。その音はハから云ひますと半音高い音でありますし、ニから云ひますと半音低い音であります。即ちハからニへ行く音を全音と云つてゐますので、その半分の音ですからお互ひにその半音と云ふのであります。

そして ♯ の時には半音高い音を出すのですから、ハに ♯ がつきますと、ハからニへ行く間の半音、即ちハの音より半音高い音の事でありますし、ニに ♭ がつきますと、半音低く出すものですから　ニからハへ下る間の半音即ちニより半音低い音の事を云ふのであります。このときはハから半音上げた音を嬰ハの音と云ひ、ニから半音下つた音を變ニの音と云ひます。

上圖Aで此の嬰と變との音とピアノの鍵盤とを對照させて見ませう。

圖の中で黑鍵もないのに嬰がついたり變がついたりしてゐるのがあります。ホと變ヘ　ヘと嬰ホ、ロと變ハ　ハと嬰ロ、との關係など、以上の說明から行

B.



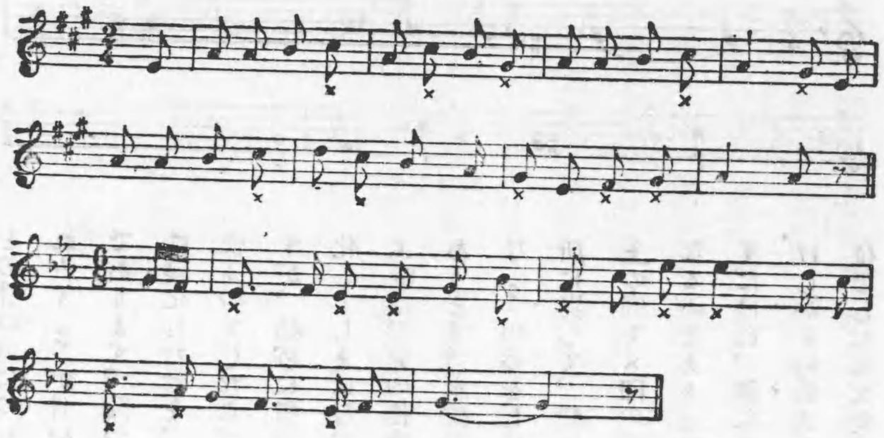
きますと不思議な事でありますがこれは後で、ピアノ樂譜の說明をする時にこの事の說明を致ませう。

嬰や變の記號はその必要が起つた時に、その半音上げたい音だとか下げたい音だとかの前に付けるのであります。（上圖B參照）

然し、此の嬰や變の記號は、その必要に應じて臨時に附く記號（臨時記號）でありますから例へばへの音に嬰がついたとしましても、其の次の小節に又への音が出て來ても、もう前の嬰記號は役にたちません。更に嬰記號を書かなければならないのであります。

上圖の例ですとへの音には皆嬰がついて居ますしロの音には全部變記號がついて居ますが、此の樣に初から終りまで嬰や變の記號を書き添へる事は面倒至極な事ですし見る眼も混雜して仕舞ます。それでこの面倒を避ける爲めに譜の初めの音部記號の次に此變化記號を書きます。例へば　への音をずつと半音だけ上げに

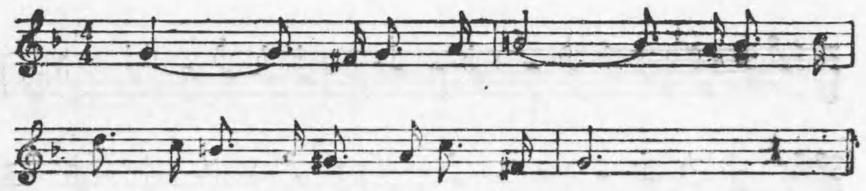




いのでしたらへの音の所に嬰記號を書くのであります。かうしますと、あと幾らへの音が出て來ましても必ず半音だけ上げなければならない事になります。此の方法は變記號の時も同じでありますから上圖の例をこの方法で書きますと下圖の樣になります。このやうに♯やbを初めに書いて置きますと、その後はずつと×印の所は變化記號の効力を生じます此の嬰記號や變記號は、その半音上げるべき音に當てはまつた線か間でしたら、上に書いても下に書いてもよさそうなものですが上の線から書く樣に習慣となつて居ます。變化記號を此の樣に用ふると、此れは調記號となります。此の調記號が附される事によつて音の調、云ひかへますと　ド　の音の位置が移轉します。此の事は後で音階の所で申上ます。

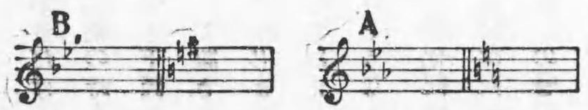
これが一つだけでなく、二つも、三つも附く時があります

その時は一つの時が、三つ重つたと同じ理屈でそれだけが全部半音上つたり下つたりするのであります。嬰記號が三つ附いてゐますと、上の圖表でも見られる樣に　へと　ヘと　ト



との音の所についてゐるのですが、此の樂曲の終りまで ヘ ハ ト の三音にはそれ〴〵 ♯ が付いてゐると同じわけで半音宛上るのであります。變記號の場合も同じであります。此の樣に變化記號を附けますと、音は思ふ樣に變化して來ますが、時には變化した音を、元通りに直したくなる時があります。臨時記號として、變化記號を使ふのでしたらば一區切りついて仕舞へば自然と音は元通りになるのですが、始めに指定して仕舞ますと終りまでイヤでもそれに當つた音は變化してしまはなければなりません。それで其の音を元通りにしたいと思ふ時は、元の位置に歸へす記號、卽ち本位記號 と云ふものを使ふのであります。本位記號の形は、嬰記號の横に出た所を取つて仕舞つたやうな ♮ の姿をして居ます。♮ を變化した音の前につけますと効力は立所に奏して、變化記號の付いて居ない時と同じ音となるのであります。

上の例で×印の付いて居ます變♮の音は、本位記號の爲めに ♮ の音になるのであります。然し此の本位記號は途中から飛込んだものでありますだけに、調記號に比べますと、ずつと勢力は弱いもので一小節の間だけしかその効力を持つてゐないのであります。それが一ヶ所か、二ヶ所位でしたら文句はありませんが、幾個所も本位記號をつけるとなります



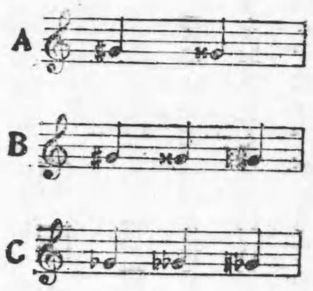



と前に述べた變化記號の時と同じやうに面倒なことになりますので、變化記號をまとめて調記號としたやうに、本位記號もまとめて、調記號と同じ効力を發揚させる事が出來ます。その時は前頁下圖Aのやうに書くのです。又途中から今までの調記號では不便で、他の調記號に變へたいと思ふ時には下圖Bの樣に本位記號で前の調記號を全部消して仕舞つてその上に希望する調記號を書くのです。その時の區切りは前と同じやうに縱の線を二本引けばいゝのであります。

本位記號で帳消にされたものを、更に又元通りにかへしたい時には、改めて元の調記號を書けばいゝのです。又半音上げたり下げたりした所を更に半音上げ、又は下げようとする時があります。これがピアノですと、半音上げた所を、又半音上げると一音になつてしまつて、特別の記號などはいらないのですが、ヴァイリンだとか、歌などになりますと、半音上げた上に更に半音上げても一音にはならないものであります。これは音響學の方の問題ですから、ここでは只、半音加へても正確な一音にはならないものだ、と承知して下されば宜しい。で更に半音上げたいのでしたら、その音符の前に×の印をつけるのであります。嬰記號が二つ重つた譯ですから重嬰記號と呼んで居ます。(圖例A)

これを元の嬰記號一つにしたい時には、重嬰記號の一つだけを本位記號で消して、嬰記號を一つ殘せばよいのであります。(圖例B)

今度は變記號の方で更に半音下げたい時には前と同じ理屈で重變記號 ♭♭ を



使へばよいのであります。その他の事は重嬰記號の時と同じわけであります。（圖例C）

# 第四章　音の強さを表すもの

## 一、音の強さ

音には今迄述べた長さと高さの他に、強さ、即ち強い音、弱い音と云ふ事があります。音樂を聞いて拍子を取りたくなるのは音に強さと云ふものがあるためであります。音樂を聞いて踊れる、と云ふ事も音に強さ、弱さ、があるためであります。此の樣に音には強さと云ふものがありますから音が動いて行く事が出來るのであります。即ち此の音の強さと云ふものは音に歩調を與へるものなのであります。

それならば音の歩調と云ふものは何によつて定めるのでせうか。

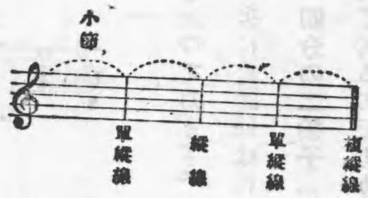
それは拍子と云ふものが自然にそなわつてゐるからです。然し拍子が自然と音樂には附きものだと云ひましても指圖をしませんと一體どう云ふ拍子で進んだらよいか見當がつきません。で、拍子記號と云ふものとその區切りをつける爲に縱の線を使ふのであります。

## 二、拍子と音の強弱

音に強いのと弱いのとがあります。それを音樂上では強聲部、弱聲部と云つて居ます。カン、カン、カン、カン、物を打つてゐるのを聞いてゐますと強弱強弱、となつてゐます。よく聞いて居ますと最初の強弱で一區切りがつき、改めて「強弱」となつてそれが繰り返へされて居ます。で　強、弱、で一組で、そ



れが一組宛繰り返して行く譯であります。これを譜の上に持つて來た時には一組　一組と分る樣にしなければその拍子が取れません。で一組　一組　の間に縱に線を引いて、これが一組だと示すのであります



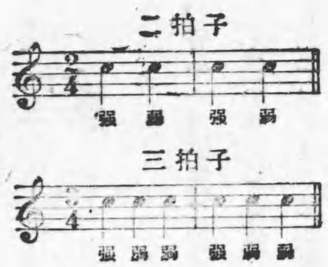

その線を縱線と呼んで居ます。

此の一組〳〵が占める領分即ち縱線と縱線との間を小節と云ひます。縱線が引かれゝばそこに一個の小節が出來、それらの小節は皆同じ値打を持つて居ます。一本〳〵の縱線だけではどこまで行つても際限がないので終りに仕樣と思ふ時には、二本の縱線を引きます。これを複縱線と云ひます。そうするとその複縱線で樂曲は終りになります。複縱線はいはば「終」と云ふ言葉と同じであります。

音の一組即ち一小節の中の音の強さを見ますと、きつと、最初の音が強くて其の次のが弱くなつて居ります。音の一組が二つの音から出來て居ますと、強　弱　強　弱、音の一組が三ッの音から出來てゐますと、強　弱　弱、強　弱　弱　となつて居ります。この音の一組を小節の中におさめて見ますと、小節の始めが強くて小節の終る頃には弱くなつて來るわけです。こゝから拍子が生れて來るのであります。一組の音が二ッの音から出來て居るのを二拍子と云ひ、三ッから出來て居るのを三拍子と云つて居ます。此の二拍子と三拍子とが拍子の土臺の形となつて居まして、幾種類かある拍子は皆この二拍子か三拍子を先祖として居るものであります。（次頁例參照）

## 三、拍子の種類

樂譜を見ますと、音部記號と調記號を書いた後にC又は $\frac{4}{4}$ だとか $\frac{2}{4}$ 或は ☵ だとか書いてあります。これが拍子記號なのです。この記號があるので、その曲がどう云ふように歩いてよいか、云ひかへれば、どのやうに強くしたり弱くしたりしてよいかと云ふ事が分るのであります。$\frac{2}{4}$ と書いてありますと此の曲は四分の二拍子だと云ひますが、この云ひ方は決して割算をしてゐるのではありません。四分と云ふのは四分音符の事で、四分の二拍子と云ひますと、四分音符がその小節の中に二ツあると云ふ意味なのであります。ですから四分の三拍子 $(\frac{3}{4})$ の場合には四分音符が三個、八分の三拍子 $(\frac{3}{8})$ の場合は八分音符が三個あると云ふ意味です。

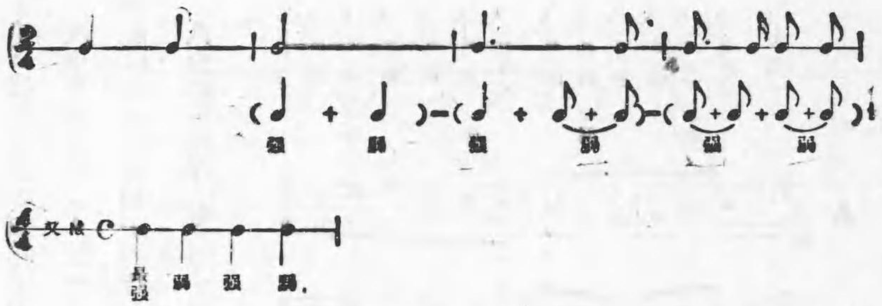



前項で、二拍子と三拍子とが拍子の根本の形だと云ひました。それですから二拍子から出發した拍子を普通拍子と云ひ、三拍子から出たのを三進拍子と云つてゐます。

次に普通使はれて居る拍子の説明をしませう。

**四分の二拍子** $(\frac{2}{4})$ は前にも云ひましたやうに一つの小節の中に四分音符が二個入つてゐる事を表はして居るのであります。此の時必ずしも四分音符が二個と限つては居りません。その小節の中の音の長さを加へて、四分音符二個の長さと同じでありますならば四分の二拍子として、取扱ふのであります。（次頁上圖參照）



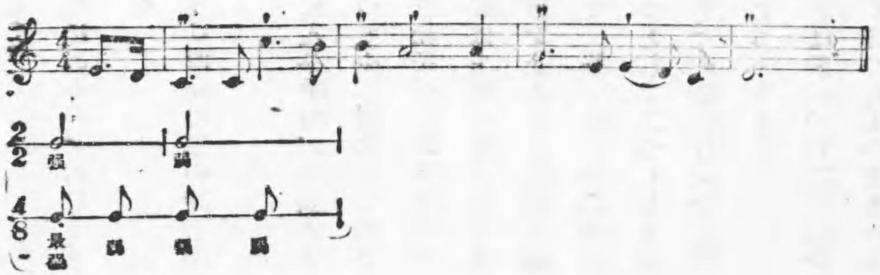



**四分の四拍子** $(\frac{4}{4})$ は四分音符が一小節の中に四ツある時の拍子であります。$\frac{4}{4}$ と書く代りに英語のCと云ふ字に似た記號も使ひます。でCでも $\frac{4}{4}$ でも同じ事であります。その強弱は上圖參照。

四分の四拍子は矢張り二拍子から出てゐますから音符が四個あつても強弱弱弱弱とはならないで、強弱 強 弱 の形になつて居ります。けれど最初の強は三ツ目の強よりはずつと強いのですから四分の二拍子を二小節加へたものとは別なものであります。四分の四拍子は最強、弱 強 弱 で、一組になつて居るのであります。

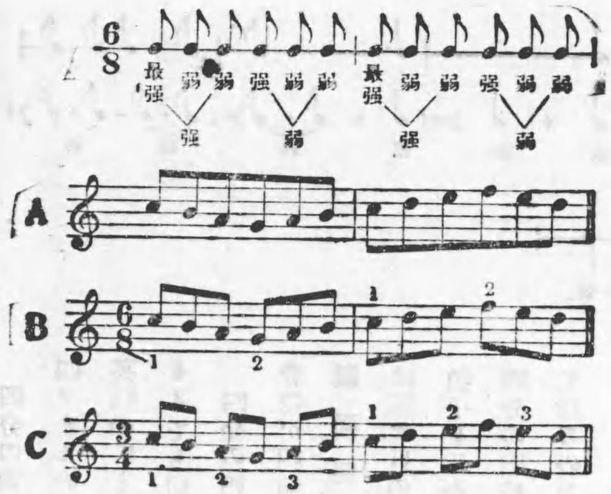
下圖は四分の四拍子の例でありますが、〃の所が最強で！の所が強であります。

**二分の二拍子** $(\frac{2}{2})$ は二分音符が一小節の中に二個又はそれと同じだけの長さがある時の拍子であります。$\frac{2}{2}$ と書く代りに ☵ と書く場合があり



ます。即ち四分の四拍子の記號Cを、二分の二拍子ですから二ッに割つた形であります。

八分の四拍子（4/8）は八分音符が四個、又はそれと同じだけの長さが一小節の中にあるのを云ひます強弱は四分の四拍子の時と同じであります。

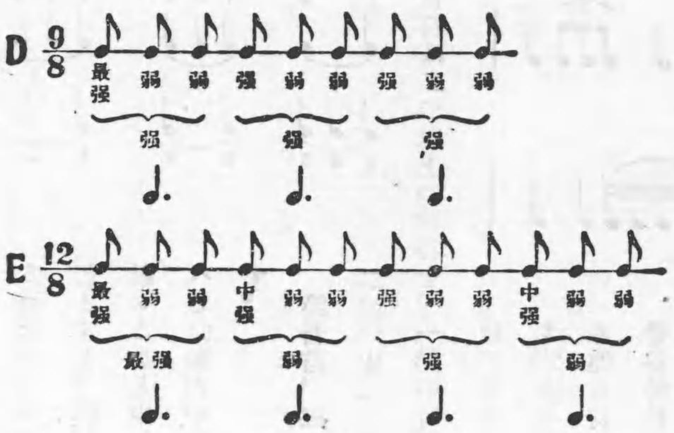



八分の三拍子（3/8）は八分音符が三個一小節の中にあるのを云ひます。その強弱は四分の三の時と同じであります。

八分の六拍子（6/8）は一小節の中に八分音符が六個ある時の事であります。四分の二拍子が集つて少し變化して四分の四拍子が出來たと同じ譯で、八分の三拍子が二個集つて一小節を造つたものであります。その強弱は上圖のやうになりますが、八分の三拍子が二小節集つた形を止めて　最強　弱　弱　強　弱　弱　の六つには數へないで　強　弱　の二つに數へます。即ち括弧で圍んだものを一つとして二つになるのでして、二拍子と似寄つたものであります。八分音符六個は實際には、附點四分音符が二個の時と同じであります。

八分の六拍子は三拍子から出たものとは云へ、實際にはかう云ふ有樣なので普通の三拍子とは全く違つたものであります。






す。例へば前頁Aの樣な場合にこれを八分の六拍子として取扱ふ場合と四分の三拍子として取扱ふ場合とは全く違つたものとなつて仕舞ひます。これを八分の六拍子としますと　強　弱　となりますし（圖例B）四分の三拍子としますと　強　弱　弱　となります。（圖例C）

四分の六拍子（6/4）は四分音符であると云ふだけで八分の六拍子と同じであまります。

八分の九拍子（9/8）は八分音符が一小節の中に九ッある時の事であります。八分の六拍子は八分の三拍子が二小節集合した形でありますが、これは三小節集まつて一組となつた形であります。ですから九ッには數へないで三ッに數へます（圖例D）

八分の十二拍子（12/8）は各小節に八分音符が十二あります。前例と同じやうに十二を割る三で、四ッ即ち、附點四分音符四ッに數へます。（圖例E）

## 四、變拍子、連音符、切分法

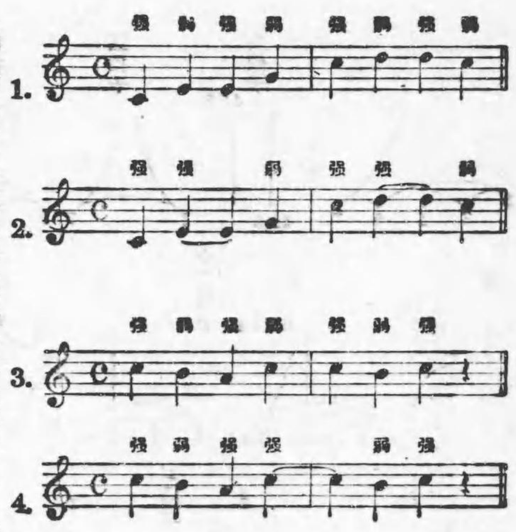
變拍子、今迄述べた拍子は二拍或は三拍を基礎にしたもので、二或は三で割切る事の出來たものでありますが、二拍の

所へ三拍をおいたり、三拍の所へ二拍をおいたり、又四拍の所へ三拍をおいたりする場合があります。此れを變拍子と云ひます。何のためにかふ云ふ事をするかと申しますと、此れは樂曲に變化をつける爲めであります。此の變拍子をどふ云ふ風に數へるかと申しますと、上圖の樣に二つ數へるだけの時間に二つ數へたり、三つ數へる時間の中で二つ數へたり、四つ數へる時間の中で三つ數へたりするのであります。

**連音符**、連音符は變拍子と似てゐる樣でゐて異つたものであります。變拍子は、二拍の中で三拍を拍つたり、三拍の中で四拍を拍つたりするものでありますが、連音符は二つ以上の音符を、一拍の時間内に數へ樣とするものを云ふのであります。例へば第一圖の樣な形は三連音符と云ひまして、 の長さが♩一ヶと同じなのであります。即ち四分音符一個の時間内に八分音符を三つ數へるのであります。此の樣に用ふる連音符には以上の三連音符の他に、五連音符、七連音符、九連音符、十一連音符等色々あります。五連音符と云ふのは、一拍の間に五つ音を數へるものでありまして、上圖 2 の形をして居ります。その他、七連音符、九連音符等も同じであります。連音符の書き方は と云ふ樣に括弧の中に音符の數を書き入れて、何連音符であるかを示すのであります。

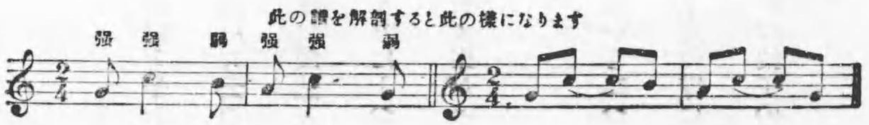
**切分法** 變拍子が、連音符と申しましても、小節内の強聲部と弱聲部の位置と云ふものには變りはありませんが、こゝに切分法（シンコペーション）と云ふ方法がありまして、此れを用ひますと、強聲部と弱聲部との位置を轉移することが出來るのであります。例へば上圖1、3の音符は正則な強、弱の位置を持つたものでありますが、此れに切分法を用ひますと、2、4の樣に強聲部が移轉して、弱聲部が強聲化します。

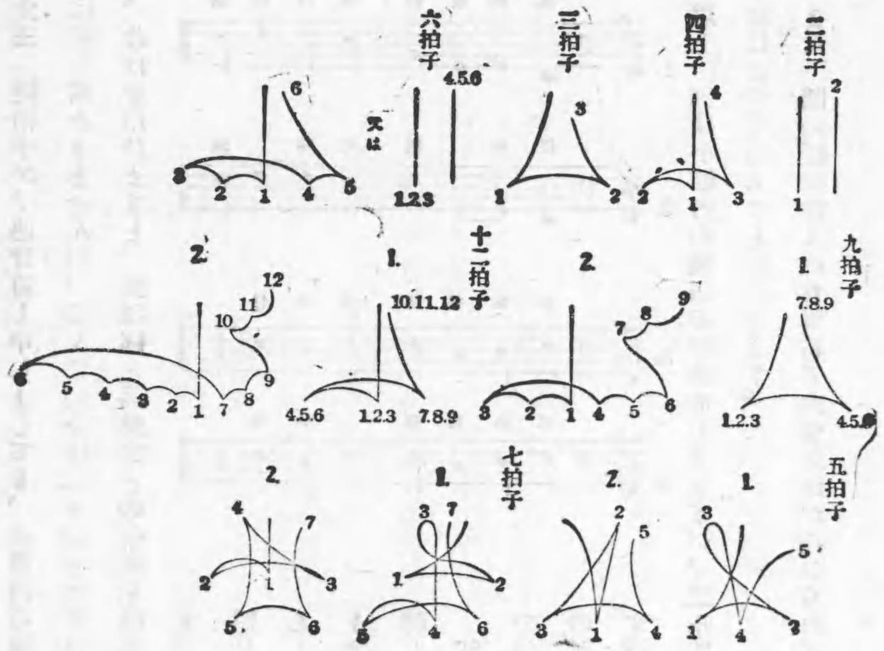
即ち弱聲部と強聲部とを結音帶で連絡しますと、後の強聲部が前の弱聲部に移つてくるのであります。




以上の例は小節内の強弱の移動でありますが、二小節にわたつて強、弱の移動も切分法によつて行ふことが出來ます。

また下圖の樣に書いれた音符も此切分法が用ひられてゐるのであります。






### 指揮棒の振り方

自分で拍子をとりながら音樂を學ぶことはタイムをキチンとする事から云つて必要な事であります。その時に漫然と拍子をとるよりも指揮棒の振り方によつて拍子をとつた方が何拍子と云ふ事がハッキリして正確になります。

六拍子はその强、弱の關係から二つに切ることが出來ますから、上圖の樣に振ります。此の二つにとるのが六拍子の普通のとり方となつてゐます。



### 五、强弱を示す文字

音の强弱と云ふものは拍子によつて定められてゐます。が此の拍子記號の他に、文字によつて强弱をつける事を示します。その言葉は大抵伊太利語で獨逸語も時々使はれて居ります。詳しい事は樂譜を見て氣附かれた時に、音樂辭書でも繰つて見ればいゝでせう。

次によく使はれる强弱記號だけを少しかゝげる事に致しませう。

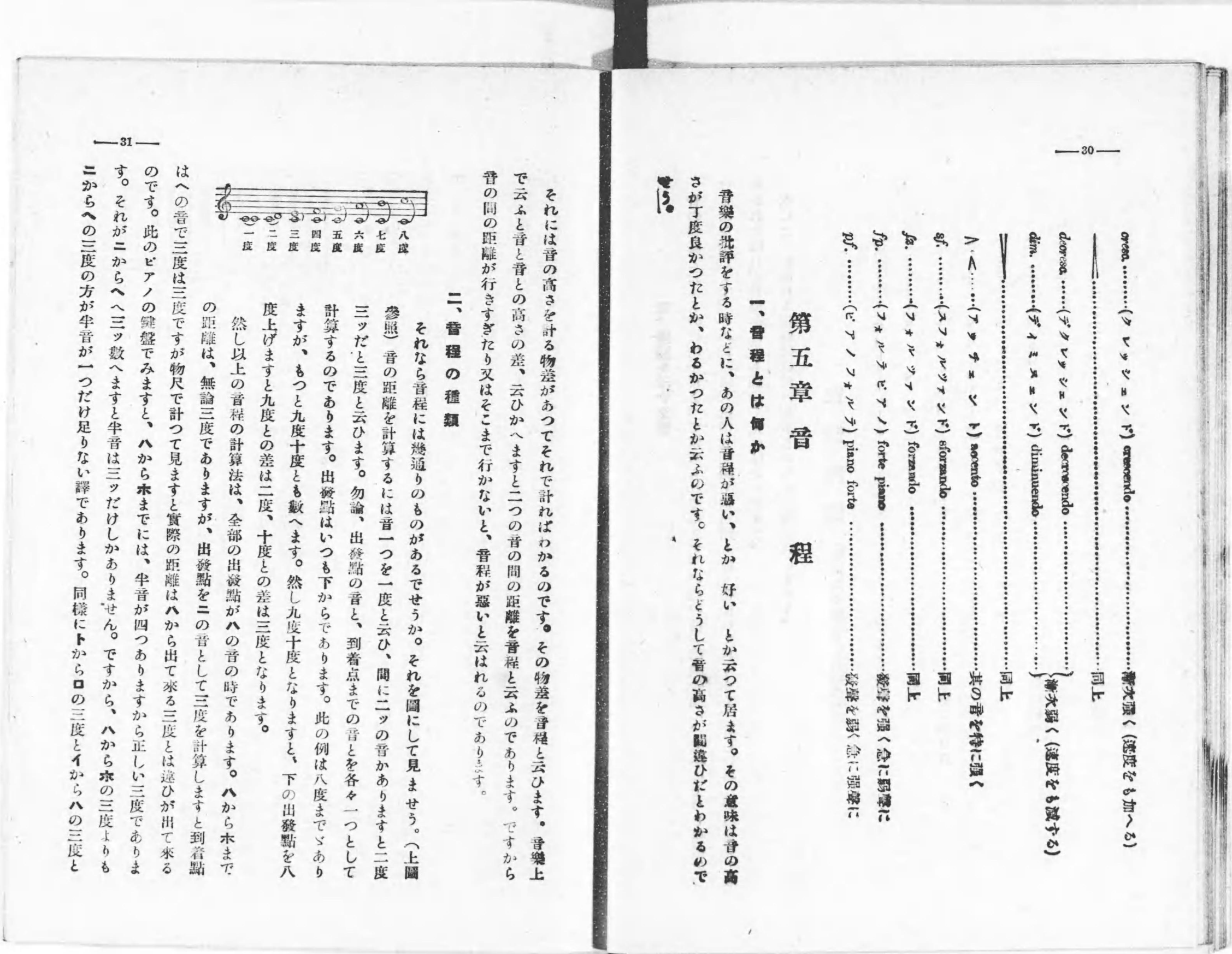
#### 强弱記號（數文は全部伊太利語です）

*pp*.……（ピアニッスィーモ）pianissimo ……最も弱く
*p*. ……（ピアノ）piano ……弱く
*mp*. ……（メッゾ ピアノ）mezzo piano……中等の弱さに
*mf*. ……（メッゾ フォルテ）mezzo forte ……普通の强さに
*f*. ……（フォルテ）forte ……强く
*ff*. ……（フォルティッスィーモ）fortissimo ……最も强く

以上は順次弱より强への配列を示す

*ppp*. ……（ピアニッスィモアッサイ）pianissimo assai ……甚だ强く
*fff*.. ……（フォルテッスィモアッサイ）fortissimo assai ……甚だ强く

cresc. ……(クレッシェンド) crescendo ……漸次强く(速度をも加へる)



……同上

decresc. ……(デクレッシェンド) decrescendo ……
dim. ……(ディミヌエンド) diminuendo ……} 漸次弱く(速度をも減ずる)

……同上

……其の音を特に强く

sf. ……(スフォルツァンド) sforzando ……同上

fz. ……(フォルツァンド) forzando ……同上

fp. ……(フォルテピアノ) forte piano ……發聲を强く急に弱聲に

pf. ……(ピアノフォルテ) piano forte ……發聲を弱く急に强聲に

# 第五章　音　程

## 一、音程とは何か

音樂の批評をする時などに、あの人は音程が惡い、とか　好い　とか云つて居ます。その意味は音の高さが丁度良かつたとか、わるかつたとか云ふのです。それならどうして音の高さが間違ひだとわかるのでせう。



それには音の高さを計る物差があつてそれで計ればわかるのです。その物差を音程と云ひます。音樂上で云ふと音と音との高さの差、云ひかへますと二つの音の間の距離を音程と云ふのであります。ですから音の間の距離が行きすぎたり又はそこまで行かないと、音程が惡いと云はれるのであります。

## 二、音程の種類

それなら音程には幾通りのものがあるでせうか。それを圖にして見ませう。(上圖參照)音の距離を計算するには音一つを一度と云ひ、間に二ッの音かありますと二度三ッだと三度と云ひます。勿論、出發點の音と、到着点までの音とを各々一つとして計算するのであります。出發點はいつも下からであります。此の例は八度までゞありますが、もつと九度十度とも數へます。然し九度十度となりますと、下の出發點を八度上げますと九度との差は二度、十度との差は三度となります。



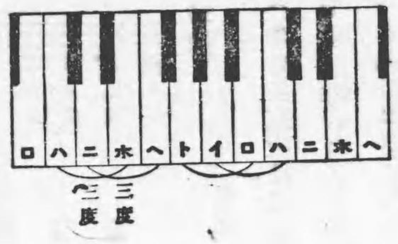

然し以上の音程の計算法は、全部の出發點がハの音の時であります。ハからホまでの距離は、無論三度でありますが、出發點をニの音として三度を計算しますと到着點はへの音で三度は三度ですが物尺で計つて見ますと實際の距離はハから出て來る三度とは違ひが出て來るのです。此のピアノの鍵盤でみますと、ハからホまでには、半音が四つありますから正しい三度であります。それがニからへへ三ッ數へますと半音は三ッだけしかありません。ですから、ハからホの三度よりもニからへの三度の方が半音が一つだけ足りない譯であります。同樣にトからロの三度とイからハの三度と

を比べますとイからハの三度の方が半音少いのであります。で三度と云ひましても長い三度と短い三度とがある事になります。で長い三度を長三度、短かい三度を短三度と云ひます。

この長短は三度だけに限らない事でして　二度　六度　七度等にもあります。

此の距離のうちで　一度　四度　五度　八度はどこからどこへ數へても半音の數は、一度ならば〇、四度ならば五ッ、五度ならば七ッ、八度ならば十二だけあるもので長短の區別はありません。ですから「完全」と呼んでゐます。

この樣に距離の定まつてゐる所へ ♯ だとか、♭ だとか半音上げたり、下げたり、上げたりする臨時記號が附きますと、またその距離が違つて來ます。

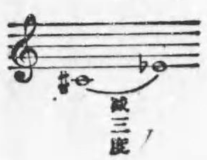



下圖 a の例で申しますと嬰記號が附かなければ、ヘとトとの間には半音が七ッあつて完全五度と呼ばれるのですが嬰が附きますと半音はもう一つ增へて八つとなる勘定であります。でこの樣に正規の音程よりも半音だけ增へたものを、增何度と呼ばれる樣になります。

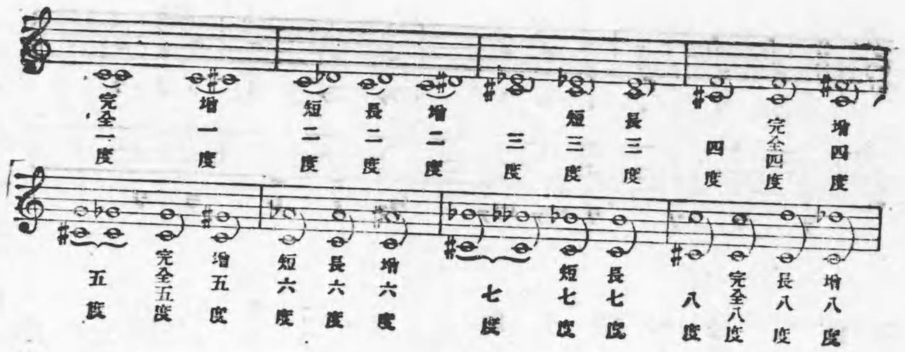
下圖 b の例ですとヘが半音上り、ホが半音下りますと、半音を四つ持つて居た三度が半音が二つとなつて仕舞ます。かう云ふ時は半音の數が減つたわけですから、減三度と呼ぶのであります。この增だとか減だとかは、何を標準にして云ふのかと云ふと、完

a

b






全音程の時に半音の數が多い時には「增」少い時には「減」であります。

二度、三度、六度、七度の時ですと半音が、短音程の時よりも少いと減長音程よりも半音多いと增音程になります。

上圖にこの事を一纏めにしてみませう。

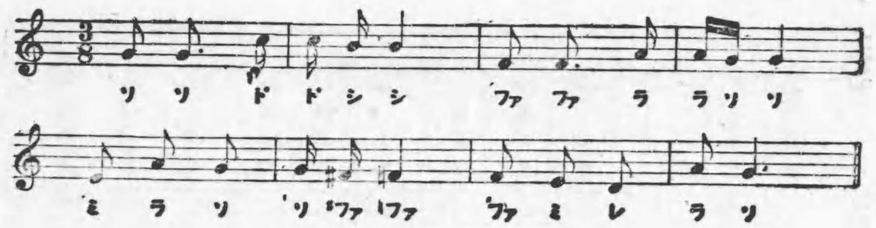
音程は面倒のように見えますがこの例をよく見ればよくわかると思ひます。

# 第六章　音階

## 一、音階と其の種類

ド　レ　ミ　ファ　ソ　ラ　シ　ド　と云ふ事は御ぞんじの事と思ひます。ドから段々と聲を高くして行つて、遂に上のドまで行きます。これは出鱈目にならんで居るのではありませんで階段のように段々と上の方へ行つて居ます。音が階段の樣に並んでゐますからこれを音階と呼びます。

この音の階段を上つたり下つたり、立止まつたりしますとそこに節、即ち旋律（メロディー）と云ふものが出來て來ます。例として次のサンタルチヤの譜を見ませう。




此の曲を、この樣にドレミファをつけて見ますと矢張りドレミファソラシの七ツが色々に取扱はれてゐるに過ぎないものなのですから、どんな樂曲でも皆せんじ詰めますと此の七つの音が階段の樣に並んで居る、音階と云ふものになつて仕まふのであります。此の音階と云ふものは、何千　何百の樂曲がありましても、その曲だけに附いてゐるものではありません。何千と云ふ曲を音階と云ふ釜の中につめて見ますとたつた二つの長音階、短音階となつて仕まふのであります。

## 二、長　音　階

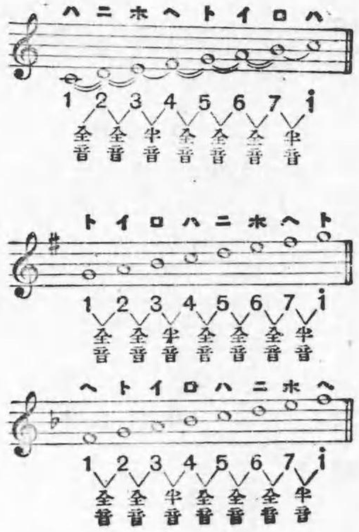
ドレミファソラシドと普通云つて居ますのは、長音階なのであります。そして此のドは音の名から云ひますとハでありますから長音階はハ　ニ　ホ　ヘ　ト　イ　ロ　ハ　と云ふ音から出來てゐます。それを音符で表はしますと次頁上圖の樣になります。この樣に並べて見ますと、ハからハまでに半音が二つ、即ちホとヘとの間　ロとハの間に半音があります。この樣な音の並び方をして居るものが長音階と云ふのであります。長音階の中に、色々の名の附いた長音階があります。その名の附け方はドレミと歌ふ時のドの音の名で呼ぶのであります。ですから次圖で見ますとドと云ふのはハの音でありますのでハから出發する音階をハ調長音階と呼ぶのであります。此のドの音は音階の基礎となる音でありますから此れを

基音と呼びます。

長音階はハ調だけではありません。嬰(レヤーク)や變(フラット)の調記號がつきますと　ドの位置がそれにつれて變つて來ます。例へば嬰が一つだけつきますと。上圖の樣にトが即ち基音になります。此の時にトから出發しませんと全音、半音、全音、全音、半音と約束通りにはなりません。ですからどうしても、トの音がドになります。トの音から出發しますから、これをト調長音階と云ふのであります。

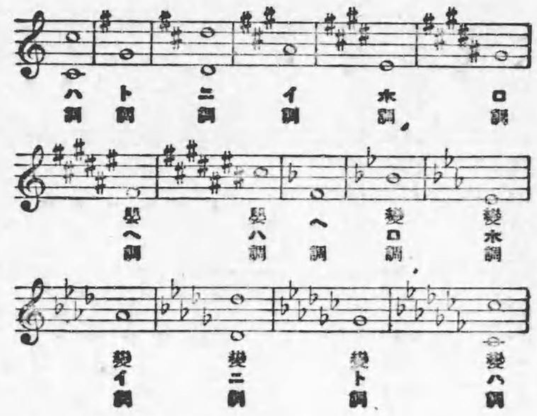
變記號が調記號として一つ附きますと、上圖の樣にヘが基音となつてヘ調音階と云ふ事になります。

次に調記號と其時の土臺となる音とを圖にしてみませう。（次頁參照）




一寸見ますと隨分複雜してゐる樣ですが、調記號が嬰か變か、調記號は幾つあるかと云ふ事をよく憶へて仕舞へばわけはない事であります。例へば嬰記號が三つある時はイ調だとか、ニ調の時には嬰記號がヘとハとの二ッある、と云ふ樣に憶へ込んでしまふのであります。

こゝに調の名の早見法があります。それは嬰記號でしたら、嬰記號の載つてゐる線か、間の所が必ずド




可憐なニイナの死を悼んだ此の歌を聞いたり、或は口ずさんだりした事があるでせう。

「目覺めよや　ニイナ　目覺めよや　ニイナ」

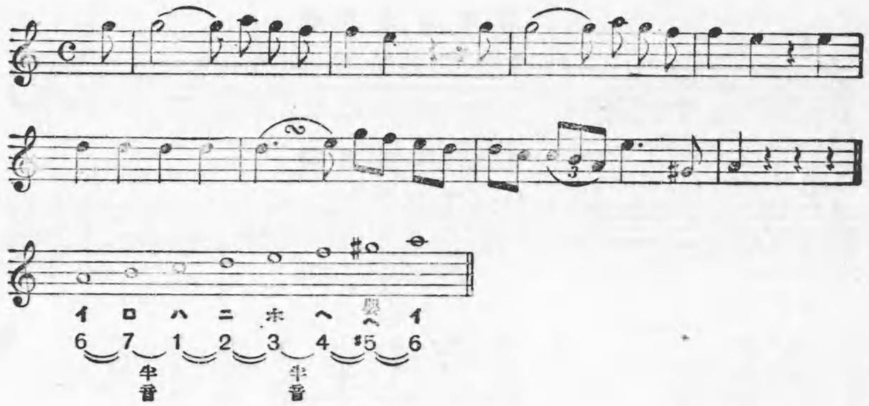
と呼ぶ聲を先づきゝたまへ（次頁上圖例參照）そしてもう一度長音階の所で例として擧げた、サンタ　ルチヤの一節を口ずさんで御覽なさい。するとサンタ　ルチヤの方はトテモ晴れやかでありますが、ニイナの方は何だか天井の低い、薄暗い家へでも入つた樣で、伸び切らない感じがするでせう。同じ樣な譜でどうして感じが違ふのだろう　と考へて御覽なさい。違ふのも道理、此のニイナの方はハ調長音階ではなレミのシ（第七音）であるのですから、その上がドになる譯であります。嬰記號が澤山ある時には一番最後の嬰記號を目當てにすれば好いのであります。

變記號の時は變記號のある所が　ファ（第四音）でありますからファから三度下がドになる勘定であります。變が澤山あつても嬰の場合と同じであります。そしてドの音がわかれば、ドの音のある所がその音階の調子の名となるのであります。

## 三、短音階

「三日ふれども　ニイナは、眼覺めず」

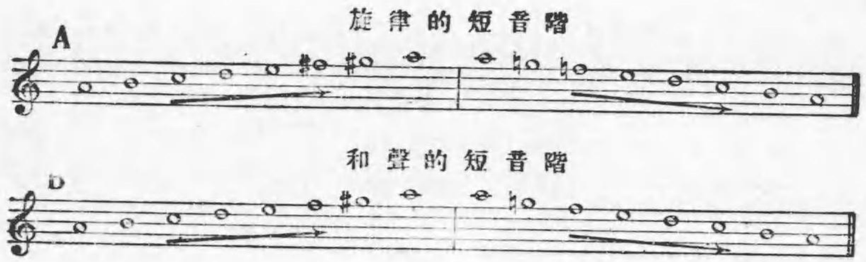





いのです。嬰記號も變記號もついて居ないのに、不思議な話だと思ふでせう。先づ此の譜から音を拔き出して音階をこしらへて見ますと、音階の最初の音はハ調長音階の時のやうにハの音ではありません。イの音が出發點となつて仕舞ふのであります。即ち音を順次に並べて見ますと圖の樣になります。これと、長音階の音階と比べてみませう。長音階は、全音、全音、半音と初まつてゐます。けれどこの音階をみますと　先づ全音　その次にはもう半音となります。二番目でもう半音だけ少いことになります。即ち長音階は第一音から第三音までに半音が四つありますが、此の音階では半音が三つしかありません。音程から云ひますと、長音階は長三度で短音階は短三度であります。此の音階を短音階と云ふのです。で前に例に擧げたニイナの死の譜は調記號がついてゐないでイから始つて居ますからイ調短音階と云ふのであります。

## 四、短音階の形

長音階は至極明瞭なものであります。それに反して、短音階は幾通りもあつて混雜し易いものであります。普通に使はれて居るのは

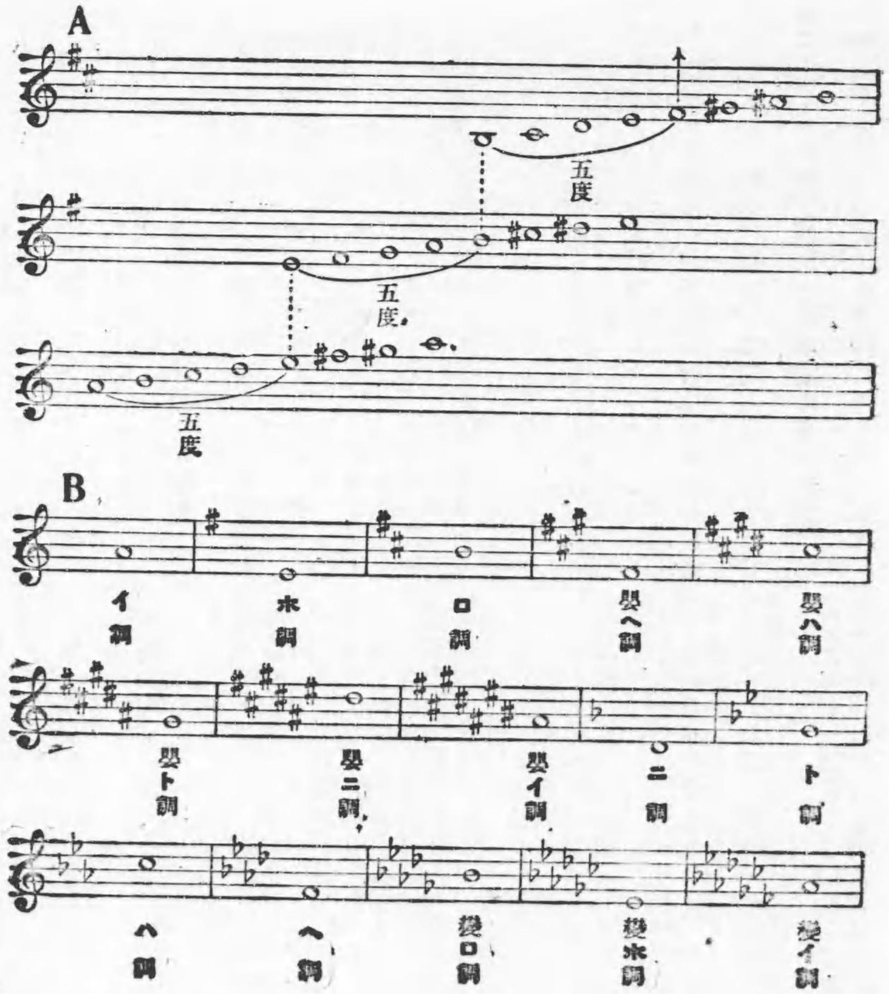



旋律的短音階と云ふものと、和聲的短音階と云ふのと二通りあります。どうして幾通りもあるのかと云ふ事は本書では避けますが、旋律的短音階は主に樂曲の旋律に使はれ、和聲的短音階と云ふのは主として、和聲に使はれてゐるものであります。此の二つがどの樣に違ふかと云ひますと旋律的短音階と(圖例A)和聲的短音階は(圖例B)で第二音と第三音との間が半音である事は同じでありますが、和聲的短音階の方は第五音と第六音との間、第七音と第八音との間も半音であります。そして第六音と第七音との間は一全音半の長さを持つて居ます。それに對して旋律的短音階は、上つて行く時と下りる時と違つて居まして、上る時には第六音と第七音とが臨時に半音多くなり、下りる時にはこの臨時記號が無くなつて仕まふのであります。この說明は本書の目的とする所ではありませんが圖例によつてかう云ふものだと思つて下さい。

## 五、短音階の調の名

短音階も長音階と同じように、その始めの音ラと云ふ所の音の名稱によつて何調短音階と云ふのであります。今迄擧げた例ですと イ の音から出發して居ますから、イ調短音階と云ひます。これは旋律的でも、和聲的でも同じであります。





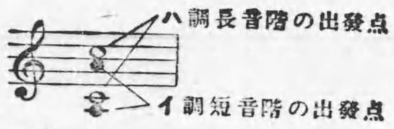

短音階の成り立ちは、長音階の場合も同じでありますが、出發點の音の完全五度上から次ぎの短音階が出發するものであります。(圖例A參照)

此の樣にして(圖例B)のやうに短音階の調が出來上つて來ます。

此の調の名を忘れた時は、長音階の時と同じように

嬰記號ならば、その最後に附けられた嬰記號の所が、その音階の二番目の音、卽はち、シ でありますからその二度下が、出發點となります。變記號でしたら、最後の變記號の所が ファ でありますから、その三度上が、出發點の音であると云ふ事になります。

## 六、長音階と短音階との關係



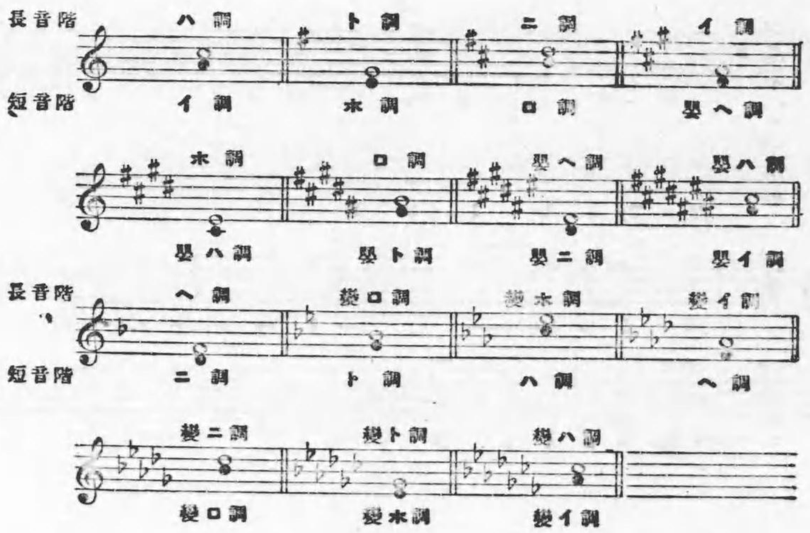

ハ調長音階と イ調音階とを比べて見ますと、隨分よく似て居ます。兩方共、調記號を使つて居ませんし、音も殆んど同じであります。たゞ違ふのはその出發點の問題であります。一方はハの音で始り、一方はイの音で始つてゐます。此のハの音とイの音を考へて見ますと、ハはイの短三度上の所にあります。出發する時に、短三度の差が、其の行手の線路を異にして、一方は長音階、一方は短音階となつて仕舞ふのであります。此の樣に、短三度の差を以て其の音階が出發するものを關係音階と云つて居ます。ですから、イ調短音階はハ調長音階でありますしハ調音階はイ調長音階の關係音階であると云ふのであります。

これ許りではなく、どの音階にも關係ある他の音階があるのであります。云ひかへればどの長音階にもその短三度下から、出發する短音階があるのであります。次頁上圖にその關係音階を並べて見ませう。

## 七、音階と長音階の見分け方

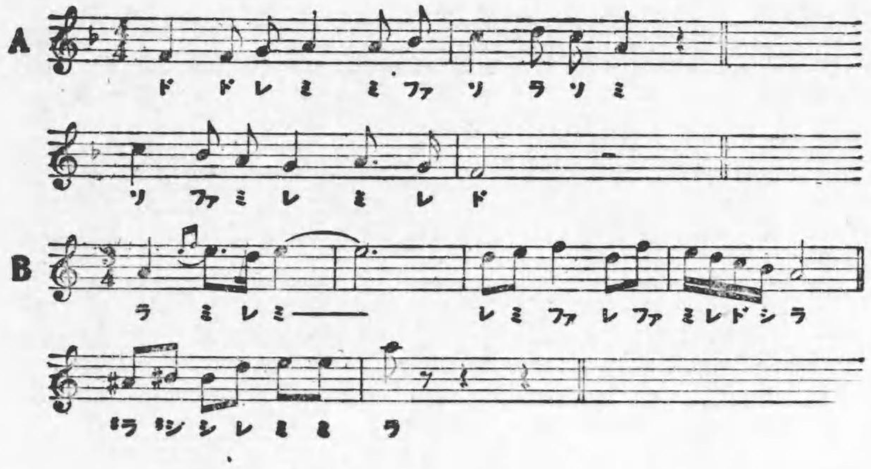
樂曲を見て、これは長音階だろうか、それとも短音階なのだろうかと、見わける事は、チョットむづかし






い事のやうに思はれて居ます。調記號を見た所で、同じ調記號が長調にも短調にも使はれてゐます。樂曲の始めに音階が載つて居るわけでもありません。どうしてそれを見分けるかと云ひますとそれには二つの方法があります。一つは、音樂を聞いて直觀する事で、一つは樂譜を見てその中から見分ける法とであります。聞き分ける方は長音階から出來て居る曲は大抵、愉快で、勇壯で、壯大で、美麗な、カラリと晴れた碧空のやうな感じでありますが、短音階から出來たものは、長音階とは別で、悲哀、寂莫、憂愁、と云ふ言葉が適當なやうなものであります。長音階は樂しい感じ、短音階は悲しい感じ、大體この感じから推しはかつて行つて間違ひは少いものですが、ハッキリとは云へません。それにこれは聞かなければ通用しないものです。樂譜から見分ける法は

一　樂曲の始まりの音と終りの音とに注意する事であります。長調のものでも、短調のものでも、大抵樂曲と




云ふものは、長調ならばドに始りドの音に終つて居ます。短調ならばラに始りラの音に終るのを普通として居ます。

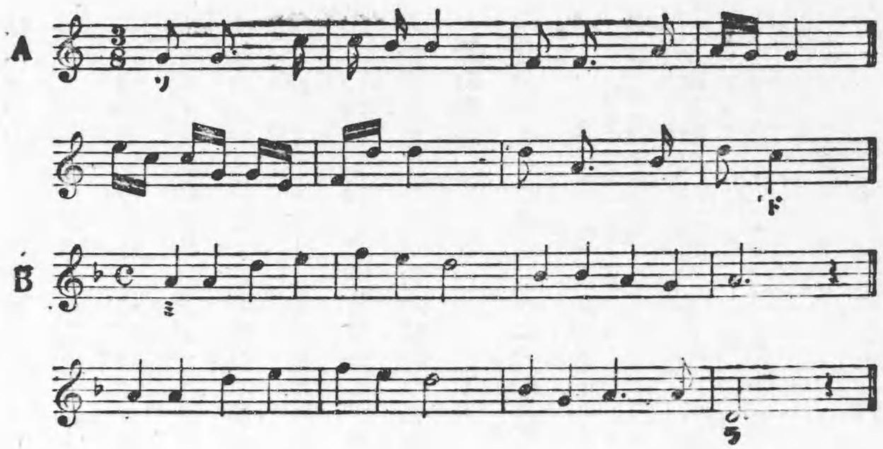
圖例のAは「ロング、ロング、アゴー」の始めと終りであります。ヘの音は、ドに當り、卽はちドから始まり、ドの音で終つてゐます。ですから此れはヘ調長音階であります。

圖例Bは「スパニッシュ・セレナーデ」の一部であります。ラから始まつてラに終つてゐます。長調音階はラから始まつてゐるものですから此れはヘ調短音階であります。

二　ドやラのように、その音階の出發點から始まつてゐないものがあります。その時は長音階でしたら、ド、ミ、ソ（第一音、第三音、第五音）短音階でしたら、ラ、ド、ミ（第一音、第三音、第五音）のうち、どれかで、始まつて何れかで終るものであります。出發は違つてゐましても、大部分はその終りの音はド、か、ラ、で終りまして、旋律の方に無い時には伴奏の方は、きつと　ド、か、ラで終つてゐるものであります。

次頁圖例Aは「サンタ・ルチア」であります。ドの第五音目






ソで始まつてゐますが、終りは、ドで終つてゐます。ですからヘ調長音階であります。

圖例Bは「荒城の月」であります。最初の音は長、短にかゝわらず、ミ、であります。ミ、ですから長調でも此處から始まることがあります。然し、終りの音を見ましよう。ラの音で終つてゐます。長調では此の樣な事はなく、ドで終つてゐる筈であります。で、此れは二調短音階であります。

例外として、以上擧げた音より外の音で終ることもありますが、それは極く少いことですし、以上の識別法をよくのみ込んで置けば、大抵解決がつく筈であります。

## 第七章　略譜から本譜へ

略譜ならわかるが、本譜ではわからない、と云ふ人があります。略譜は譜表と云ふものもいりませんし、色々の形をした音符も要りませんし、唯、1、2、3、の數字で表はすだけでありますから、簡單なことは非常に簡單であります。然し、一度

略譜を習つてしまひますと、中々本譜へ近寄れぬらしい樣子であります。何んにも知らないで、本譜を覺へるよりも覺へにくいらしい有樣をよく見受けて居ります。

略譜はホンの一時の間に合せものに過ぎません。入いり易いと云ひますが、入いつた所で、何んにもなりません。名曲と云ふ名曲、今日ある何千、何萬と云ふ樂譜は全部本譜で書かれてゐます。此れは略譜では讀めません。篤志家があつて、其れを略符になほしてくれるのを待つより他は方法がありません。西洋音樂の一曲でも知らうとする爲には、何を置いても本譜を學ばなければなりません。で、今まで、本譜の根本の問題は說いたのですから、今迄略符だけを知つてる人の爲めに、略譜と本譜との關係を說いて、頭の整理をして今迄略譜のはいつた場所へ、本譜をしまふようにしましよう。

### 音の長さ

音の長さを表はす爲めに、本譜では、音符と休止符とを使つてゐます。それが略譜では、1、2、3、4、5、6、7、の七文字をそのまゝにして置いて、それの横に點を打つたり、細かい線を引いたりして表はしてゐました。

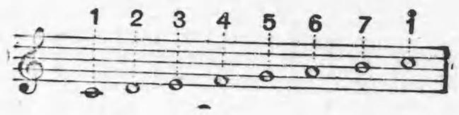
それを圖にして見ますと次ぎの樣になります。



### 較比の音符

| | 本譜 | 略符 |
|---|---|---|
| 全音符 | ○ | 1—1— |
| 二分音符 | 𝅗𝅥 | 1— |
| 四分音符 | ♩ | 1 |
| 八分音符 | ♪ | 1̲ |
| 十六分音符 | 𝅘𝅥𝅯 | 1̲̲ |
| 附点二分音符 | 𝅗𝅥. | 1—· |
| 附点四分音符 | ♩. | 1· |
| 附点八分音符 | ♪. | 1̲· |
| 全休止符 | 𝄻 | 0—0— |
| 二分休止符 | 𝄼 | 0— |
| 四分休止符 | 𝄽 | 0 |
| 八分休止符 | 𝄾 | 0̲ |
| 十六分休止符 | 𝄿 | 0̲̲ |
| 附点二分休止符 | 𝄻. | 0—· |
| 附点四分休止符 | 𝄽. | 0· |
| 附点八分休止符 | 𝄾. | 0̲· |

### 較比の音符と略符




略譜では、樂曲の調子を示す時には、必ず何調と書いてゐますが、本譜ではそれは書かないで唯調記號を示すだけでありまして、それだけで調子の事は明らかになるのであります。

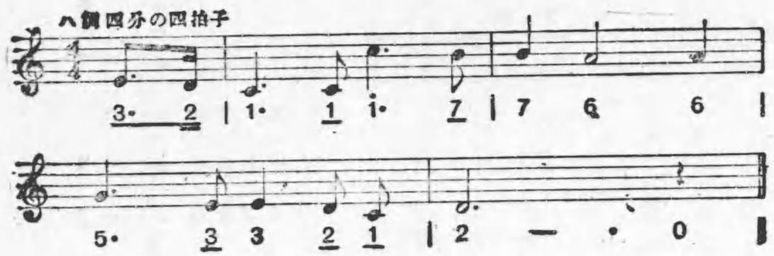
次の例によつて、本譜と略譜とを比較して御覽んなさい。そして、本譜から略符に直してハーモニカ用の樂譜に編曲して見るも面白い事でせう。但し本符を其まゝ略符に直した計りでは直ちに完全なハーモニカ樂譜として用ふる事が出來ない場合があります。ハーモニカには樂器其のものが固定的の音で音階が少ないし、無い音もありますから一たん略符に直してから再びハーモニカ用になる樣に直す必要があります。又

### 音の高さ

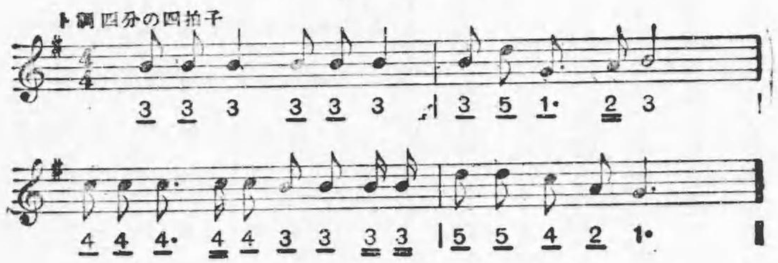
略譜で音の高さを表はす時は、1、2、3、の數字でしてゐますが、本符では譜表の上に音符を並べて、その位置を定めるのであります。

### 各種の調子

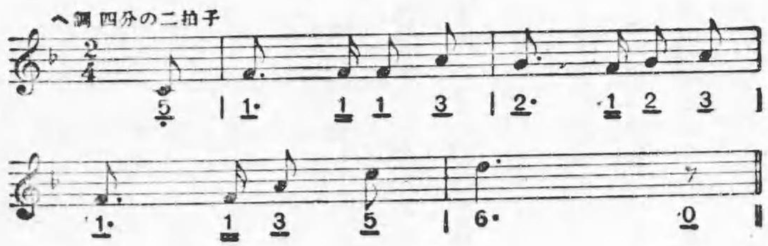
アンニイ・ローリイ




ジングル・ベルス

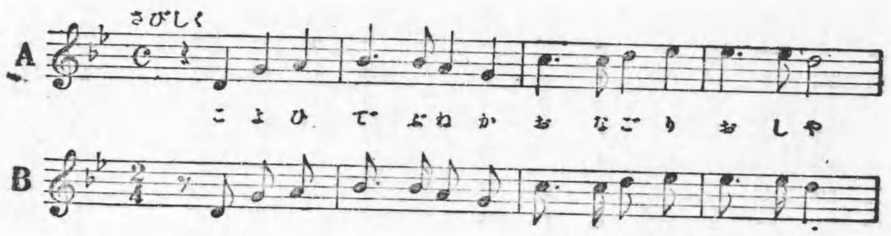



螢の光




ハーモニカは樂器に依つて調子が定めてありますから、曲に應じて多少編曲が違つて來ますが、それはハーモニカとしての專門的の事になりますから略しますが本符を略符に直した物は直ちにハーモニカの樂譜ではなく、略符其のものとハーモニカの鍵は必ずしも同じでないと云ふ事を注意して居きます。






# 第八章　各種の記號

今迄に述べた、音符、音程、音階、だけではまだ樂曲の骨組だけであります。それだけでは、充分に、樂曲に肉をつけ、血を通はせることは出來ません。樂曲に更に美しい表情をつけさせ樣とする爲めにはまたそれ〴〵の表情をつけるための記號があります。

## 一、速度の記號

速度の記號とは、音の速さを定める記號の事であります。或る曲を歌はうとしましても、曲には夫々一定した速さがありますから、速く歌ふべきものを遲く歌ふと間が拔けますし、遲く歌ふべきものを早く歌ひますと、セカ〳〵して落つかなくなります。例へば、杉山長谷夫氏の「出船」について見ますが、圖例Aの如き原曲を、もつ早くBの樣に歌つたらどんなものでせう。

此のように歌つてしまつたら作曲者の考へてゐた氣持は臺無しになつてしまひます。「お名殘惜しや」と云ふ哀戀の氣持が何處かへフッ飛んでしまひます。で、作曲者は樂曲の爲めに『どの位の速さ』でと指定する必要があります。速度の記號が必要な譯であります。

速度の記號には、曲全體を此の速度で奏せ、と云ひますのと、曲の中の此所だけ、此の速さでと云ひますのと二つあります。

## 二、樂曲全體を支配する速度記號

樂曲全體を支配する速度の記號は、その曲の初めに書かれてゐます。樂譜を手に執つて御覽なさい。初めの方に M. M. 「♩ =72 とか、Andante, Allegro など、書かれてゐるでせう。此れが速度の記號なのであります。此の記號によつて、その曲全體をどの位の速さで奏するのか、と云ふことが定まるのであります。此の曲全體の速度を示す記號に、數字で表はすものと、言葉で表はすものと、二通りあります。

數字で表はすもの——「M. M. 」 =72、此のように書かれてゐるものが、數字による速度の記號なのであります。此れを言葉に直しますと、メルツエルのメトロノームに依つて、四分音符=七十二と云ふことになります。此れだけでは意味がわかりません。

メトロノームと云ふものを御存知ですか。ピラミッドのような形をしたもので、時計の振子を逆さまに立てたような器械。その振子には目盛りがしてあつて、カッチン・カッチンと左右 動いてゐます。振子に附いてゐる錘を上げ下げすることによつて、いくらでも速くなつたり遲くなつたりします。此の器械で拍子をとるのであります。M. M. と云ふのはメルツエルのメトロノームと云ふこと。「♩ =72 と云ひますと、四分音符が一分間に七十二動く割合、と云ふ事であります。云ひかへますと、メトロノームの振子を一分間に七十二動くように調節します。すると、その一つのカッチンが四符音符一つと相當するのであります。



振子の動きで、その速さを見ますと、四分音符ですと

四〇——六十九……極めて緩りと
一〇〇——一二六……ゆつくりと
一二六——一六〇……並足の速さで
一六〇——一八四……快速に

の割合であります。

文字で表はすもの。——(Andante, Allegro) と云ひますのは、文字で、その曲全體の速度を定める記號であります。大抵伊太利語を使用してゐます。詳はしい事は、音樂辭典の方へ讓りたいのですが、よく使はれるものだけを此所に擧げませう。

Largo (ラーゴ)……最も遲く
Adagio (アダーヂョ)……遲く
Lavghetto (ラルゲット)……遲く
Lento (レント)……遲く
Grave (グラーヴェ)……遲く、且つ壯重に
Adagietto (アダーヂエット)……稍遲く

Andante (アンダンテ)……少し緩りと

Andantino (アンダテイーノ)……Andante より少し速く

Moderato (モデラート)……中位の速さで(早くも遅くも無く)

Allegretto (アレグレツト)……快速に

Allegro (アレグロ)……快速に(Allegrettoよりは少し早く)

Vivace (ヴイヴアーチエ)……快速に

Presto (プレスト)……非常に速く

Prestissimo (プレステイシモ)……最も速く

此の他に言葉を組合せたものがあります。

Andante Moderato (アンダンテ・モデラート)……中位に緩りと

Andante ma non troppo (アンダンテ・マ・ノン・トロツポ)……余り遅くない程度で緩りと

Allegro moderato (アレグロ・モデラート)……中位の速さで

Allegro ma non troppo (アレグロ・マ・ノン・トロツポ)……余り速くない程度で快速に

Allegro Assai (アレグロ・アッサイ)……非常に速く

Tempo comodo (テムポ・コモード)……任意の速さで

Tempo giusto (テンポ・ジユウスト)……正確な速さで

Tempo originario (テンポ・オリヂナリオ)……普通の速さで

Schnell (シユネル) (獨)……快速に

Langsam (ラングザーム) (獨)……緩りと

Mässig (メーシヒ) (獨)……中位に



## 三、樂曲の一部だけの速度記號

樂曲の一部、即ち、樂曲の中途だとか、終りだとかに速度記號をつけますと、其個所だけ速度が變はるのであります。括弧の中のは略字であります。

Ritardando (Rit.) (リタルダンド)……
Rallentado (Rall.) (ラレンタンド)……
Calando (Cal) (カーランド)……
} 漸次緩りと

Accelerando (Accel.) (アツチエレランド)……速度を加へて

Strigendo (ストリヂエンド)……急いで

piu Allegro (ピイユー・アレグロ)……もつと速く

Meno Adagio (メノ・アダーヂオ)……少し加減して緩りと

Andante con primo (アンダンテ・コン・プリモ)……始のように少し緩りと

Tempo primo（テムポ・プリモ）……
Tempo I ……　}始めの速度で

（此れは、始めに指定された速度に歸へるのであります。ですから、始めの速度が一度變はつてその後又中途の變化速度を訂正するのであります。

A tempo（ア・テムポ）……本來の速度で

（此れは云はゞ速度に於ける本位記號と云ふべきものであるでしよう。）

Listesso tempo（リステッソ・テンポ）……同じ速さで

Ad Libitum（アド・リビトウム）……
A Piacere（ア・ピアツエーレ）……　}任意の速さで

## 四、表情の記號

戲曲などの卜書の所に「激して」とか「喜ばしさうに」などと云ふ樣に演出上の表情を說明した言葉がついてゐます。此の樣に樂譜でも、その音が旋律に表情をつけたい時には激した調子で、とか、晴れやかに、とか、指定するのであります。云はゞ、その氣分、情調を示す爲めに、色々の記號をつけるのであります。けれど「激して」と書いても、どの程度まで、激して好いのか、本當の事は作曲者以外にはわかりません。ですから、此の時はよく樂曲を味はひ、前後の關係から押して自分で定めるより仕方がありません。此所に、音樂を演奏することは藝術だ、と云ふ意味があるわけであります。

次ぎに普通使はれてゐる表情記號を說明しましよう。

Agitato（アヂタート）……昂奮して
Animato（アニマート）……活氣づいて、生氣を以て
Alla Marcia（アラ・マルチア）……行進曲風に
A capella（ア・カペラ）……敎會音樂風に、無伴奏で
Alla Turca（アラ・トウルカ）……土耳古風に
Amoroso（アモローゾ）……愛情を以つて
Aengstlich（エングストリヒ）（獨）……心配そうに
Bewegt（ベウエーグト）（獨）……感動して
Brillante（ブリランテ）……目ざましく
Cantabile（カンタービレ）……謠ふように
Capriccioso（カプリチヨーゾ）……奔放に、自由に
Celeste（セレスト）（佛）……高雅に
Con amore（コン・アモーレ）……愛を以つて
Con brio（コン・ブリヲ）……熱情を以つて
Con fuoco（コン・フオーコ）……熱火を以つて

Con maestoso（コン・マエストーゾ）……壯重に
Con spirito（コン・スピリト）……精神的に
Delicato（デリカアト）……情味を以つて
Devoto（デヴオート）……敬虔に
Dolce（ドルチエ）……美しく
Doloroso（ドロローソ）……悲しんで
Düster（デユステル）（獨）……陰鬱に
Eilig（アイリヒ）（獨）……急いで
Elegante（エレガンテ）……優美に
Energico（エネルヂイコ）……勢を强めて
Eroica（エロイカ）……悲壯的に
Espressivo（エスプレツシイヴオ）……表情を込めて
Fantastico（ファンタスティーコ）……空想的に
Fermato（フエルマアト）……しつかりと
Feurig（フオイリヒ）（獨）……熱烈に
Fröhlich（フレエーリヒ）（獨）……樂しげに



Funebre（フネーブレ）……追悼の
Garante（ガランテ）……艶麗に
Geistvoll（ガイストフオル）（獨）……精神に滿ちて
Giocoso（ヂオコーソ）……喜に滿ちて
Grazioso（グラチオーソ）……壯麗に
Herzlich（ヘルツリヒ）（獨）……情を以つて
Innig（インニヒ）（獨）……感動して
Klagend（クラーゲンド）（獨）……哀願するように
Lamentando（ラメンタンド）……悲歎して
Lebhaft（レーブハフト）（獨）……活々と
Legato（レガート）……滑らかに
Maestoso（マエストーゾ）……堂々と壯嚴に
Malinconia（マリンコニア）……憂鬱に
Marcato（マルカート）……ハツキリと
Misterioso（ミステリオーソ）……神秘的に
Morendo（モレンド）……次第に消へるように

Nobile（ノービレ）……上品に
Passionato（パッショナート）……熱情を以つて
Pastorale（パストラーレ）……田園風の
Patetticamente（パテティカメンテ）……哀傷的に
Poco a poco（ポコ・ア・ポコ）……少しづつ
Rapido（ラピード）……急いで
Religioso（レリヂオーソ）……崇高に
Scherzando（スケルツアンド）……滑稽味を以て
Serioso（セリオーソ）……眞劍に
Sostenuto（ソステヌート）……音を保つて
Stridente（ストリデンテ）……烈しく
Tempestoso（テムペストーソ）……嵐のように
Tranquillo（トランクイーロ）……靜かに

## 五、其の他の記號

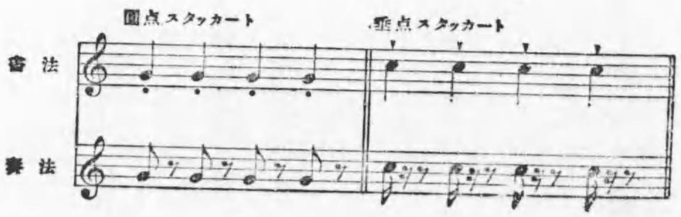
此の外にも色々の記號があります。

**連結線（スラー）**

高さの違ふ音を二つ、或はそれ以上の音符に、時々は數小節にもまたがつて、その音が切れ〳〵にならないように、弓形の線を引く事とがあります。それを連結線と云ひます。（上圖）

**頓音（スタッカート）**

連結線の反對のものでありまして、各音、もしくは或る音をハッキリと切り離して奏する時に、スタッカートの記號を用ふるのであります。垂點の方が、圓點よりも、一層短かく切るのであります。頓音を附けた音符は短かく切られる爲めに、其處には休止符が出來たと同じ事になります（下圖）




此の頓音の上に連結線を引きますと、音を切るか、切らないかの間位に奏するのであります。

**延長記號（フェルマート）**

（𝄐）の記號がついてゐる所では、音符でも休止符でも適宜に延ばすのであります。例へば四分休止符の上に（𝄐）がついてゐましたら、その時の休みは四分休止符より、もつと長く休んで良いのであります。此の場合、どの位延ばしたら好いか、ハッキリ定められない事でありまして、要するに其の樂曲の性質に依るものなのですが、大體から云ひますと、二分休止符のように割合と長いものは

その二倍位、十六分休止符のように短かいものは、その數倍位と云ふのが適當な所でありましよう。此の延長記號は、反復記號の場合の曲の終りの記號 (𝄐) と混同しないように注意すべきであります。

# 第九章　樂譜の省略法

樂譜の中で、同じことを繰返へしたりすることがありますが、此れは正直に書きますと面倒だつたり、混雜したりしますので、色々の省略法があります。

一、反復記號——樂曲か同じ事を繰かへす時に、同じ事を二度書く手數を省くために、此の反復記號と云ふのを使ふのであります。それには、その記號が附いた所から、初めへ戻るもの、或ひは記號の所から記號の所へ戻るもの等があります。

今次ぎに圖例を以て示しますと、

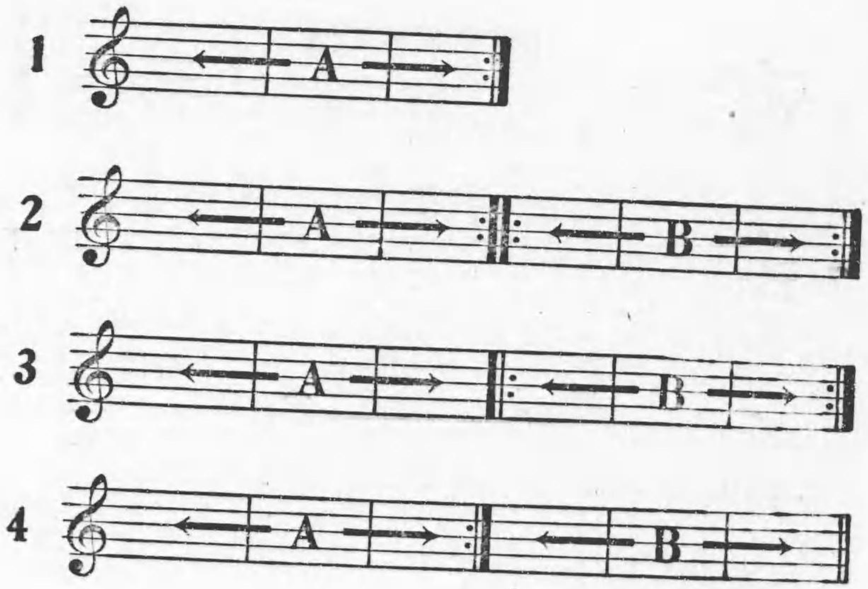
1　はAの所を繰返へし、2　はAを繰返へし更にBの所に進んで、Bを繰返へすのであります。

3　はAを過ぎたら、直ぐBに入いつてBを繰返へします。

4　は此の反對で、Aを繰返へしてBに入いつて、そのまゝ終ります。

5　の場合は、最初の時には繰返へしの記號のある所まで奏し、繰返へしてからは、1と書いてある所は飛ばして、直ぐと、AからBへ移つてしまふのであります。

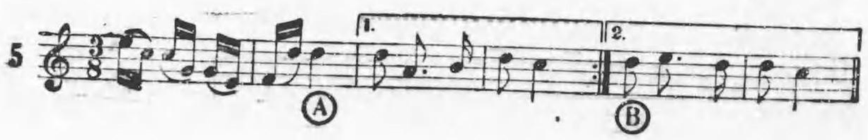


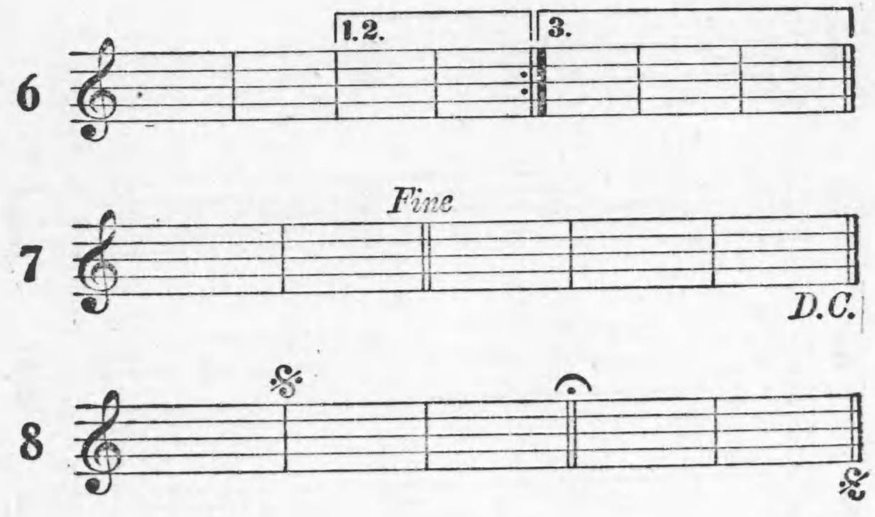



6　の場合は、4と同じであります。第二回までは反復記號の所まで、第三回目は |1.2| の所を飛ばして |3| の所へ移るのであります。

7の場合で、D.Cと書いてあるのは Da capo（ダ・カポ）の略字でありまして「初めに歸へる」と云ふ意味であります。此の場合ですとD.Cの所まで行きましたら、初めに歸へつてFineと書いてある所で終ります。Fineは終りと云ふ事でありましてフイネ又はフイナーレと云ひます。

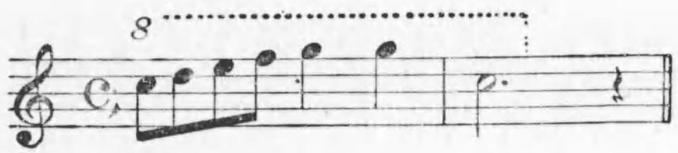
圖例8の場合は、𝄋 の記號のある所から、同じ 𝄋 の記號のあ






る所へ戻つて、(・の記號のある所で終ります。𝄋は必ず二つあつて連續してゐるものであります。又縱の線が二本並んでゐる上に(・の如き記號がある時は、終りの意味であります。

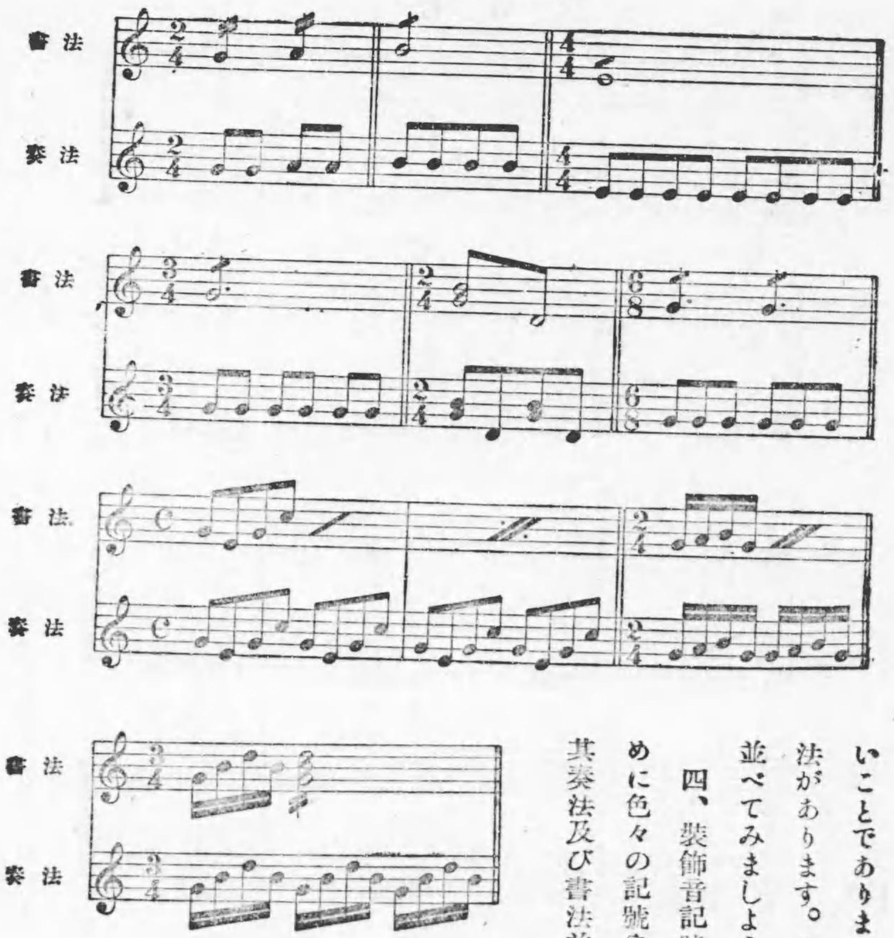
二、8va……の記號——音符を本當の位置に書きたいけれど、そうすると加線が多くなつて混雜すると云ふ時に、オクターヴ（第八音）低い所に音符を書いて、それに、オクターヴ上に、と云ふ記號をつけて置きます。例へば下圖のように記號をつけますと、8と云ふ字の所から波狀線の終る所までの音はオクターヴ卽ち八音宛高く奏するのであります。




三、音符の略記法——樂譜など出來るだけ簡單に書く方がお互に都合の好



## 省略記號

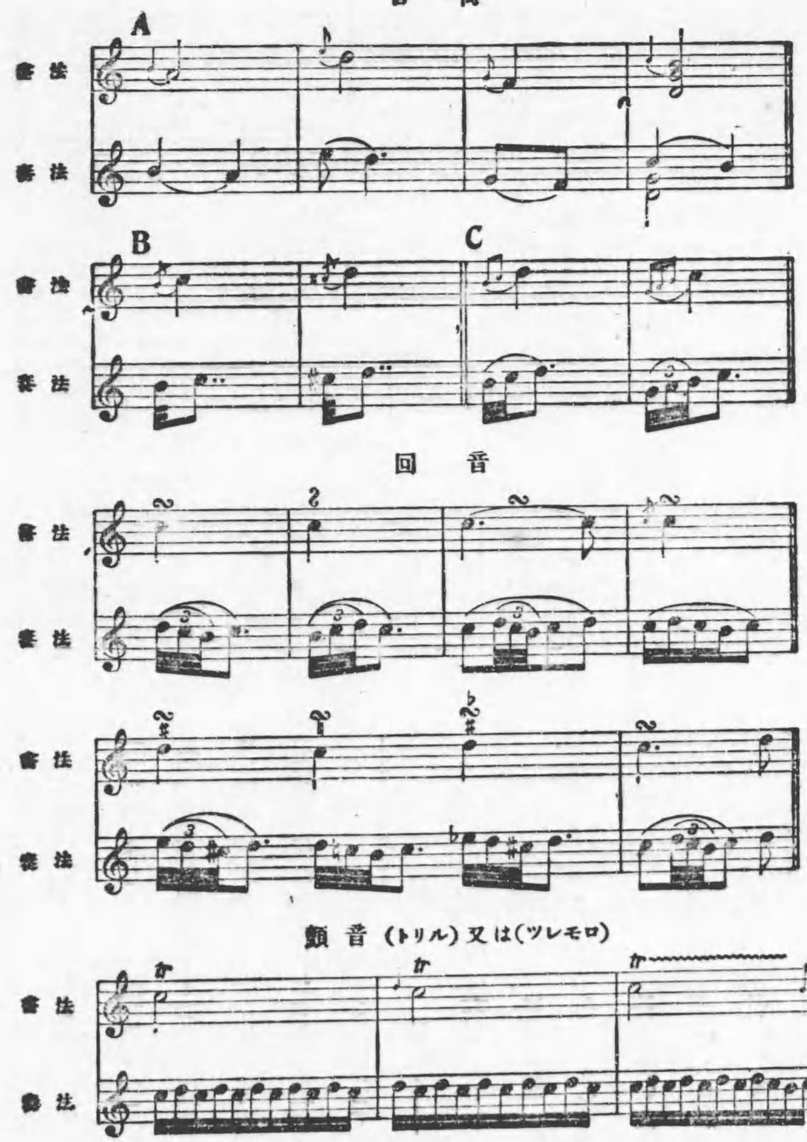



いことであります。で、色々簡單に書く方法があります。その書き方と、奏し方とを並べてみましよう。（圖例參照）

四、裝飾音記號——樂曲の旋律を飾る爲めに色々の記號や音符を使つて居ります。其奏法及び書法並びに名稱を表によつてよく會得して下さい。

倚音——は音符の前に小さい形をした音符を置いたものでありまして、只小音符を置いたものと、小音符に斜めに線を引いたものと、二つ以上の小音符を置いたものと、三通りあ

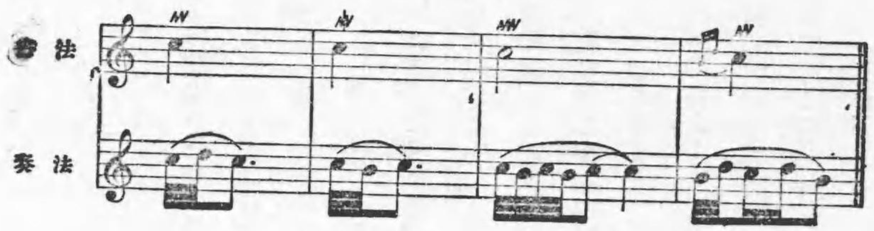
### 音倚



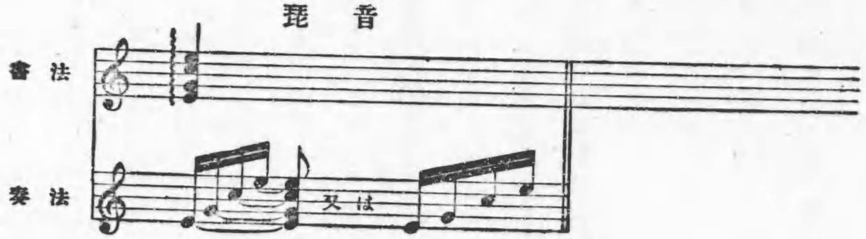

ります。（圖例參照）



### 漣音




### 琵音




以上、一般に裝飾記號として用ひてゐますが、初めのうちは兎角、裝飾音を使ひますと、その拍子を間違へ易いものでありますから、注意しなければなりません。

## 第十章　各國の音名と調名

### 一、音の名稱

日本の音の名は既に説明しましたように、

**イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ　ト**

であります。此れが英語や、獨乙語などでは、どのように呼ぶのでしょうか。

英語の音名――英語のイロハはＡＢＣであります。日本で音名をイロハで呼ぶように、英語でもＡＢＣで呼んでまゐす。卽はち

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ヒイ | ビー | ベイ | デイー | ヘー | エフ | ジイー |
| A | B | C | D | E | F | G |
| イ | ロ | ハ | ニ | ホ | ヘ | ト |

此のようになります。

半音上げたり、下げたりする變記號は

嬰 ♯……sharp　　シャープ

變 ♭……flat　　フラット

であります。ですから、變ロと云ふのはBフラット、嬰ヘと云ひますとFシャープと云ひます。書く時にはB flatだとか、F sharpだとかは書かないで、B♭、F♯と云ふように書きます。

本位記號♮はナチュラル Natural と云ひます。

嬰か變かゞ二個になつた時、日本では重嬰、重變と云つてゐますが、英語では Double sharp（ダブル・シャープ）Double flat（ダブル・フラット）と云つてゐます。

獨逸語の音名――獨逸語でも、音の名をABC（アー・ベー・ツェー）で表はしてゐます。然し、英語でBはロの音の事でありますが、獨逸語では變ロの事であります。で獨逸語ではロを表はすのにH（ハー）を使つてゐます。即はち、音の名を並べてみますと次ぎの樣になります。

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | A | H | C | D | E | F | G | | 獨逸語 |
| | (アー) | (ハー) | (ツェー) | (デー) | (エー) | (エフ) | (ゲー) | | |
| | A | B | C | D | E | F | G | | 英語 |
| | イ | ロ | ハ | ニ | ホ | ヘ | ト | | 邦語 |

變化記號は、嬰は Kreuz（クロイツ）變は Be（ベー）と呼んでゐます。けれど、嬰へのことをFクロイツとは云ひません。獨逸では、嬰や變の附いてゐる音を呼ぶのに、特別に、ABCに語尾をつけて奏はしてゐるのです。

嬰の時は is と云ふ語尾を、變の時には es と云ふ語尾を附けるのであります。ですから、嬰へならば、嬰は is でありますから、Fis（フイス）と呼びます。嬰ハは Cis 變ハは C+es=Ces と此のように呼んでゐます。然し、變ホや變イは Es とか、As とかは云ひませんで、Es As と呼んでゐます。又變ロは Hes ではなく、B（ベー）と云ふのであります。

重嬰、重變の時は、更に同じ語尾、即はち嬰ならば更にも一つ is を、變ならばも一つ es を附けます。で、重嬰のハを呼ぶ時には Cis+is=Cisis で、重變ハは Ceses であります。此の時にも例外がありまして變變イ（重變イ）は As+es=Ases ではなく、Asas であります。變ロは Hes ではなくて B でありますが、重變ロの時は Bes ではなく Heses であります。左に獨逸の音名を表にして掲げて見ましよう。

フランス語の音名——は今迄述べたのとはすつかり違つてゐまして、ABCのアルファベットには依らないで、左の言葉で示してゐます。

| 本位音 | | 嬰 | 重嬰 | 變 | 重變 |
|---|---|---|---|---|---|
| ハ | C | Cis ツィス | Cisis ツィジス | Ces ツェス | Ceses ツェゼス |
| ニ | D | Dis ディス | Disis ディジス | Des デス | Deses デゼス |
| ホ | E | Eis エィス | Eisis エィジス | Es エス | Eses エゼス |
| ヘ | F | Fis フィス | Fisis フィジス | Fes フェス | Feses フェゼス |
| ト | G | Gis ギス | Gisis ギジス | Ges ゲス | Geses ゲゼス |
| イ | A | Ais アィス | Aisis アイジス | As アス | Asas アザス |
| ロ | H | His ヒス | Hisis ヒジス | B ベー | Heses ヘゼス |



嬰は diese（ディエズ）變は bemol（ベルモル）ルと云つてゐますから嬰ハはウイト・ディエズ、變ロはシ・ベモール、と、此のように呼んでゐます。

イタリーの音名——はフランスのによく似てゐまして、その音の名は

do（ド） re（レ） mi（ミ） fa（ファ） sol（ソル） la（ラ） si（シ）

ド…ハ　レ…ニ　ミ…ホ　ファ…ヘ　ソル…ト　ラ…イ　シ…ロ

と呼んでゐます。

變化記號もフランスのとよく似てゐまして、嬰は diesis（ディエシス）、變は bemolle（ベモレ）と云ひます。ですから、嬰ハは Do diesis（ド・ディエシス）、變イは La bemolle（ラ・ベモレ）ととよぶのであります。

## 二、各國の調名

日本で、ハ長調とか、ロ短調と呼ぶのを外國ではどんなに呼んでゐるでしょうか。

英國——では、長音階の事を Major メージャー、短音階の事を Minor マイナー、と云つてゐます。ですから、イ調長音階ですとエイ・メージャーと云ふのであります。

獨逸――では、長音階は Dur ドゥール、短音階は Moll モルと呼んでゐます。
佛國――では、長音階は Majeur マヂユール、短音階は Mineur ミヌール と呼んでゐます。
伊國――では、長音階は Maggiore マッヂオーレ、短音階は Minore ミノーレと呼んでゐます。
左に各國の音名、及び調名の二三を比較してみましよう。

| 日本 | ロ調長音階 | 變イ長音階 | ハ調短音階 |
|---|---|---|---|
| 英國 | B major | Ab major | F minor |
| 獨逸 | H dur | As dur | F moll |
| 佛國 | Si majeur | La bemol majeur | Fa mineur |
| 伊國 | Si maggiore | La bemolle maggiore | Fa minore |

# 第十一章　實際に應用された樂譜

## 一、樂曲と樂譜

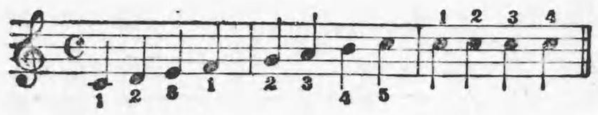


云ふまでもなく樂曲と云ふものは樂譜で書かれてゐます。その樂譜の事は今まで述べました事で大抵おわかりになつた事でしよう。此れまでの事を充分覺へ込んでしまひさへしますれば、普通の樂譜は充分讀める筈であります。然し音樂と云ふものは、唯一つの方法で表はされるものではありません。音樂には聲で表はすもの、即ち聲樂があります。又、ピアノやヴアイオリン等で奏するもの、即ち器樂があります。聲樂や器樂と云ひましても、その樂譜は皆同じものでありますが、その奏する道具が色々であれば、その樂譜を書き表はす爲めにも色々の約束がつく事は當然の事でありまして、したがつて樂譜も聲樂樂譜、ピアノ樂譜、ヴアイオリン樂譜と色々のものが出來てくるのであります。で、それ〴〵その樂器に特有な樂譜の書き方の事をお話しましよう。

### 二、ピアノ樂譜

樂譜に書かれた音符を正しい音として聞こうとする時にはピアノに依るのが一番容易でありますし、又正確であります。ピアノは上手でも下手でも、鍵を叩きさへしますれば、誰にだつて音を出す事が出來ます。ハ調長音階ですとドと云ふ音を知つて、それから順々に上の方へ白い鍵だけ押して行けば、赤ん坊でも正しいド・レ・ミ・ファの音階を彈く事が出來ます。

ピアノは平均律に調律してあります。ですからピアノの音は世界中何處へ行つても同じでありますし、又ピアノを中心とした合奏の時などはピアノの音に皆合せるやうにします。平均率にしてありますから半音と半音とを寄せますと一度になります。ですから前に變化記號の所で申し上げました重嬰や重變の記號



はピアノ樂譜で書きました所で實際には一度上るとか、下るとかになつてしまひます。

ピアノの鍵盤と音符との關係は第三章の音の定め方の所で述べてありますから、も一度御覽なさい。

それからピアノ樂譜で特別な樂譜の書き方を述べましょう。

ピアノの初歩の樂譜はよく上圖のように音符に數字が附けてあるのがあります。

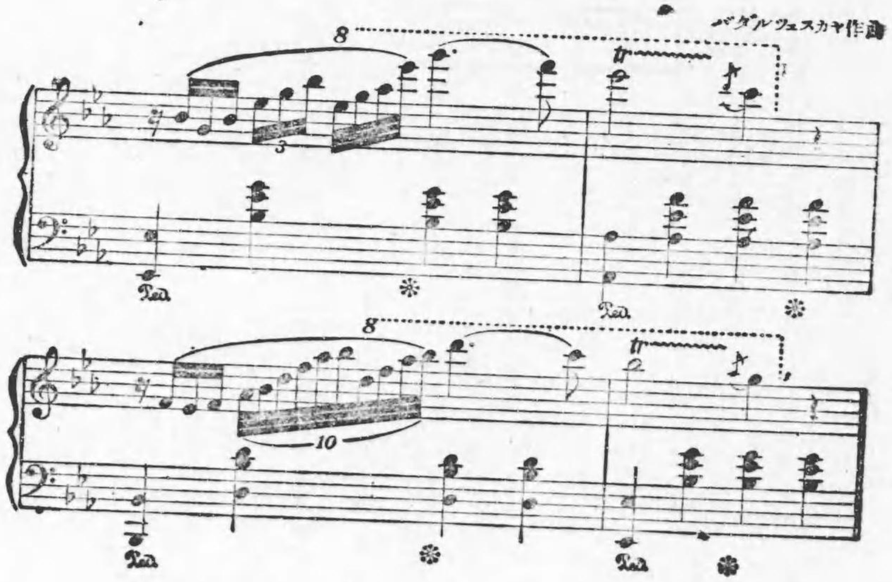
此れは指使ひを示したものであります。私達の指に番號をつけたのでありまして、親指を1、人差指を2、中指を3、無名指を4、小指を5、と云つてゐます。ですから、此の音符を彈く時には、そこに示してある番號の指で彈けと云ふ事であります。何故此のように何の指で彈けと云ふのかと云ひますと、此のように指を使つた方が結局彈き易いからでありまして、僅か五本の指を使つて立派な音樂を奏するのですから、經濟的に指を使ふ事が一番賢い方法であります。

ピアノ樂譜はみんな二段の大譜表で書かれてゐます。そして上の段は右手で、下の段は左手で彈くのであります。音部記號は大抵上の段は高音部記號で、下の段は低音部記號でありますが、下の方が高音部記號の事もあります。よくピアノの練習本を見ますと、R. H. L. H. と書いてありますが、R. H. は Right hand（ライト・ハンド）で右手と云ふ事、L. H. は Left hand（レフト・ハンド）で左手と云ふ事で R. H. の時は其處を右手で彈け、L. H. の時は左手で彈けと云ふ事であります。



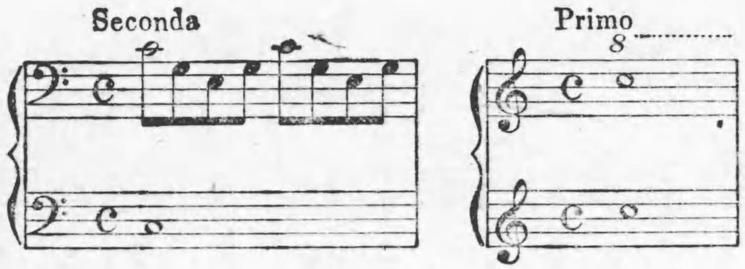
## 祈の女處

バダルヱスカヤ作曲



上圖の樂譜はバダルッエウスカ作曲の有名な「少女の祈り」と云ふピアノ樂譜の一部であります。此の樂譜で、∞……とか、〰〰〰〰などの記號はもう御存知ですね。所で、下の方を御覽なさい。𝄐とか ✻ などの記號があるでせう。𝄐と云ふのはペダルと云ふ字の略語でして、此の記號が附いてゐますとピアノの右のペダルを踏むのです。そうするとピアノの音は長く響くようになります。そして ✻ の記號が來て始めてペダルを踏むのをやめるのであります。

ピアノにはペダルが普通二個ついてゐます右のペダルは音を持續させる用をし、左のペダルは音を弱くします。で、左のペダルを踏めと云ふ時には Una Corda（ウナ・コルダ）とか U.C. とか記されてあります。此のウナ




コルダを止める時には Tre Corda（トレ・コルダ）と書かれてあります。

ピアノ樂譜には上圖の樣に大譜表が二個、二頁にわたつて並べて書いてあることがあります。此れはピアノ連彈曲の譜でありまして一個のピアノに向つて二人で奏するのであります。ですから四手曲とも申します。Primo（プリモ）と云ふのは第一と云ふ事でありまして、主に旋律を彈きます。Seconda（セコンダ）と云ふのは第二と云ふ事でありまして伴奏になります

## 三、オルガン樂譜

オルガンの樂譜は大體ピアノの樂譜と同じであります。音符と鍵盤との關係もピアノと同じであります。唯オルガンにはピアノにはない栓（ストップ）があります。鍵盤の上の方に並んでゐますね。その栓に夫々名前が書いてあります。樂譜にはどの栓を引けと栓の名が書いてありますから其の時栓を引出し、栓の名に斜めに線が引いてありますと栓を押し込めます

## 四、ヴアイオリン樂譜

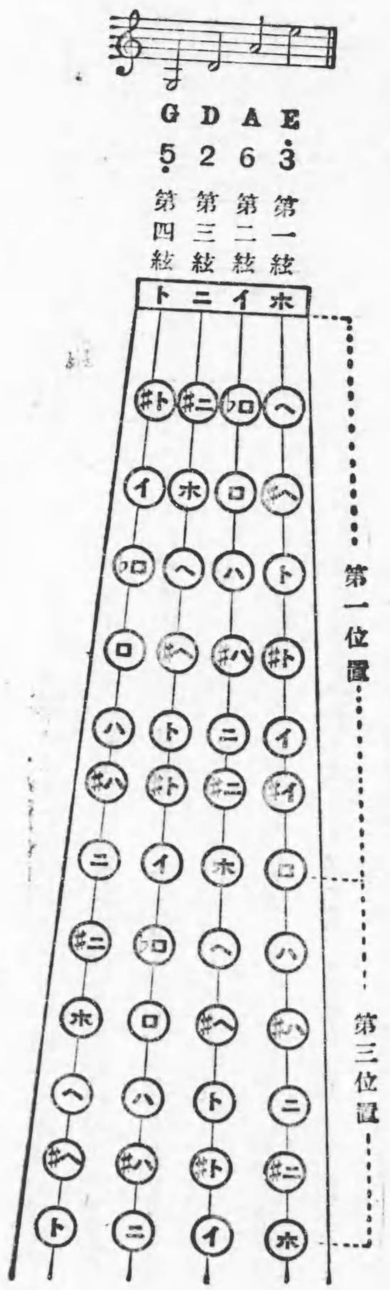
ヴアイオリンはピアノのように誰が奏いても正しい音が出ると云ふものではありません。正しい樂譜通りの音を出す爲めには練習しなければなりません。

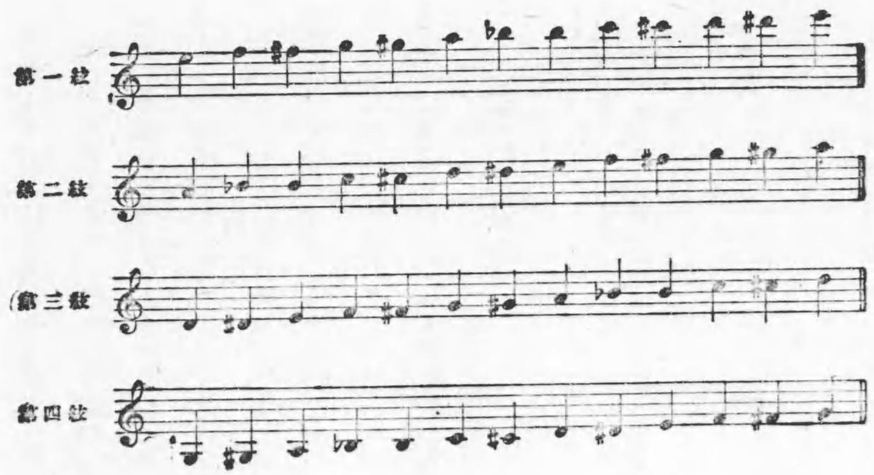


ヴアイオリンには四本の絃が張つてあつて、その絃の音は皆定まつて居ります。そしてヴアイオリンの四本の絃の上には次ぎのように各音が配列されてあります。然しピアノのように鍵盤があるわけではありませんから音を押さへるのは「感」によります。で之を感所と云つて居ります。そして其感所を指で押へて音を出すのです。

四本の絃は指で押さへなくとも、ハ、ニ、イ、ホ、の音が出ます。此れを開放絃と云つて居ります。此の四絃は互ひに完全三度の音程を持つて居ります。即ち、ハ——ニ、ニ——イ、イ——ホ、ですから此れを二本宛彈いて御覽なさい。氣持ちの宜い程合さつた音がしますから。若し合はさつた音が不愉快でしたら其れは完全三度ではなく調絃が狂つて居るのであります。

感所圖

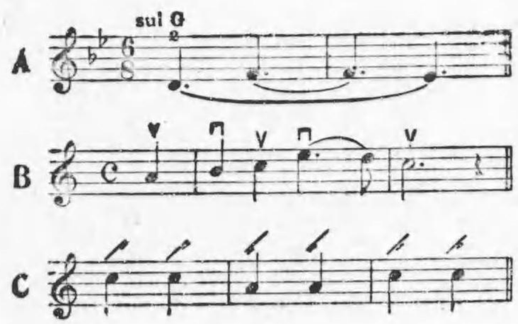





ピアノの譜のようにヴァイオリンの譜にも數字が書いてあります。その數字は矢張り指使ひを示すものでありますが、ヴァイオリンは親指を使ひませんから、人さし指が1、中指が2、無名指が3、小指が4、となります。

此の處所を音符で表はしますと上圖の如くになります。

下圖Aのようによく sul G とか sul D とか書いてあります。此れはG線即はちトの絃で奏けとか、D線二の絃で奏けとか云ふのであります。此の譜ですと二の絃即ち第三絃で奏くと都合が好いのでありますが、作曲者か、指使ひを定めた教師がトの絃即ち第四絃の第三位置を使つて奏かせた方が曲の氣分が出ると云ふのでワザ〳〵此のように指定したのであります。






圖例Bの ∨ だとか ⊓ の記號は弓使ひの記號であります。∨ は弓の上部から下部の方へ奏き上げて行けと云ふので、⊓ は弓の下部のから上部の方へ奏き下げて行けと云ふ記號であります。

圖例Cも弓使ひの記號であります。

—は弓の上部の方で奏け

‖は弓の下部で奏け

‖は弓の中央で奏け、と云ふ事であります。

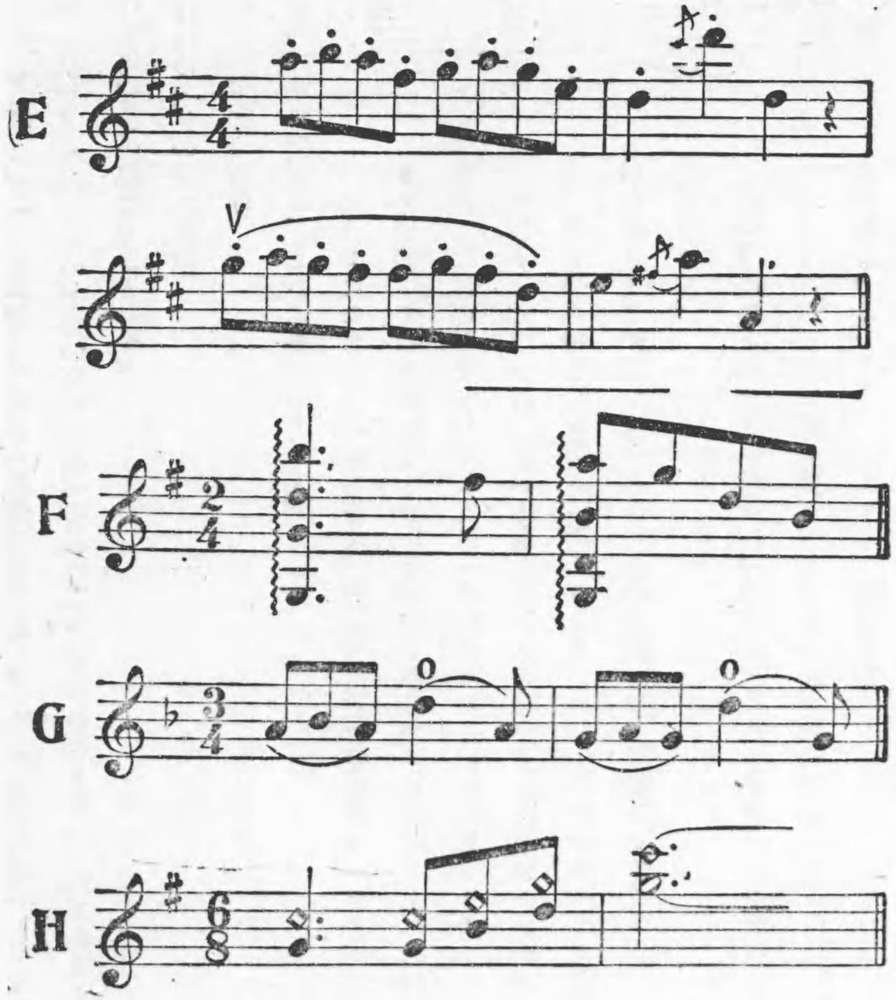
圖例Dにある如き弓形の線は、前にも述べた連結線（スラア）であります。此のスラアが懸つてゐる間は弓の方向を變へる事は出來ません。上へ向けて奏く一と弓だけで此だけの音を奏いてしまはなければならないのであります。

圖例Eガボットは、此れも前にチョット述べました頓音（スタッカート）であります。音を強く押し切る奏き方であります。此の例の前の部分は普通のスタッカートで後半はスラアが懸つてゐますから弓を變へないで奏きます。スタッカートは少し弱目になります。

圖例Fはアルペヂオ（琶音）の奏き方であります。此の四個の音を皆指で押へて弓で一番下の音から順次に當てゝ行く奏法で、此の事は「音符の略記法」中の琶音の所を御覽なさい。

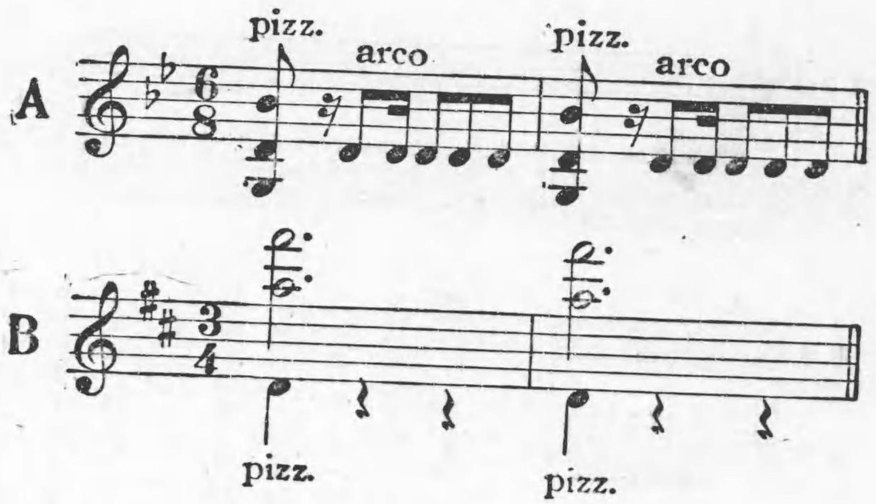
## ガボット

ゴセック作曲




圖例G、H、二つともフヲヂオレット、（ハーモニックス）の書き方であります音符の上にOの附いたのは自然的ハーモニックスと云ひます。◇の方は技巧的ハーモニックスと云ひまして菱形の下の音符の二オクタヴ






ヴ上の音が出ます。Oの方は小指で輕く絃の方を押さへます。◇の方は人さし指で下の音符を押さへ、小指で輕く上の菱形の音の所へ觸れて出します。尙ほ此のOは開放絃で奏け、と云ふ時にも使ひますから御注意なさい。

圖例Aの如き Pizz と云ふのは Pizzi ato ピチカートの略字で絃を指で彈ぢけ、と云ふ事であります。卽ち弓で奏かないで右手の人差指でポンと彈じくのです。次に Arco（アルコ）とあります。此れはピチカートだつたのを再び弓で奏けと云ふ事であります。

圖例B此れは一方弓で奏きながら、左手の使つてゐない指で二の絃をはぢくのです。

よく Con Sordino（コン・ソルディノ）と書いてありますが此の言葉がある時には弱音器を駒へつけるのであります。

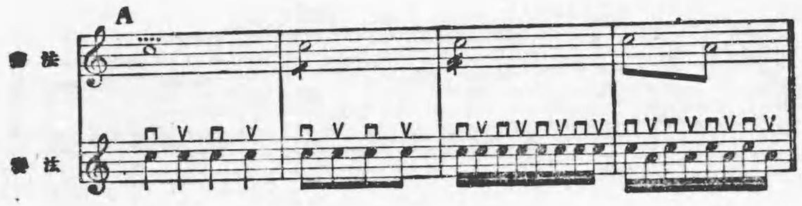
### 四、マンドリン樂譜

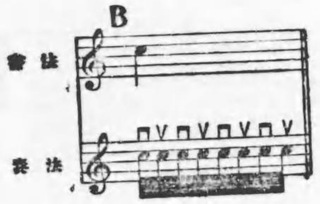
マンドリンの譜は殆んどヴアイオリンと同じであります。調子の合せ方もヴアイオリンと同じで、唯マンドリンは絃が

二本宛になつてゐるだけのものであります。それにマンドリンでは指板の所が仕切りをしてありますからヴアイオリンよりも早く勘所をおぼへ易いものであります。全體の勘所も、又指使ひに關した事もヴアイオリンと同じであります。

ただ違ふのはヴアイオリンが弓で奏くのに對してマンドリンはピックと云ふ撥ではぢいて彈く點にあります。

マンドリン樂譜にあります ⊓ や ∨ は矢張り撥の動かし方を云つてゐるものでありまして、⊓ は撥を上から下に打ちおろす奏き方、∨ は撥を下から上へ掬ひ上げる奏き方であります。例圖によつて書法と奏法とを對照させて見ますと A の樣になります。



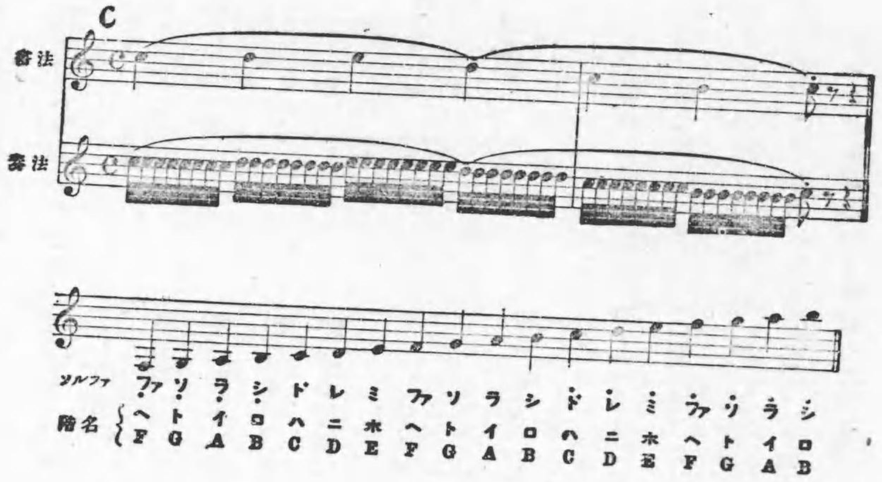




マンドリンは唯バチンとはぢくだけでありますからヴアイオリンのように長く音を續けて置くことが出來ません。それで、マンドリンには顫音（トレモロ）と云ふのがありまして、その奏き方によつて音を續けてゐるように聞かせます。

普通の速度でしたら四分音符ですと撥を上下すること圖例Bの如く八回位のトレモロが適當であります。

スラアの懸つてゐる所はトレモロを續けて奏しますが、上






圖の最後の音の如くスタッカートの點が附いてゐますと其の時は唯一打だけでトレモロはしません。又スラアが懸つてゐて音符にVの記號が附いてゐましたら其の時はトレモロで奏しながら、音と音との間は少し區切つて奏くのであります。

## 五、聲樂樂譜

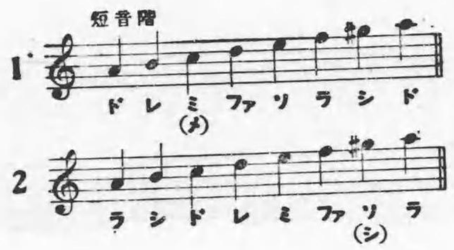
聲樂樂譜の上に書かれてゐる樂譜上の約束は今まで述べた色々の樂器の譜と大した違ひがありません。たゞ、樂器によつて樂譜を奏する時はその音を樂器の上で押すか叩きさへすれば出て來ます。それが聲樂ですと聲を出して歌はなければなりません。

聲樂の樂譜を讀むのはトニック・ソルフア卽はち視唱法と云ふのが用ひられて居ります。此の視唱法と云ふのは樂譜を見て直ぐ**ド・レ・ミ**で歌ふことでありまして、音の名のハ、ニ、ホで歌ふのではありません。

次圖のようにドレミで歌ふのは**ハ**調長音階ばかりではありません。どの音階でも**ド・レ・ミ**・と歌ふのであります。色

々の音階で何處がドの音になるかは音階の説明を御覽んなさい。

以上は長音階の時でありますが、短音階の時ですと其の歌ひ方に二通りあります。



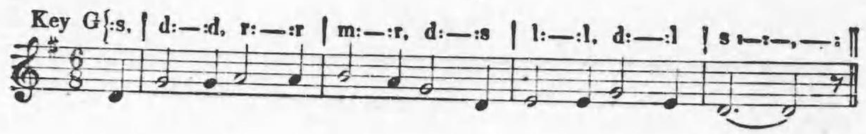

1の場合はイの音から出發しますから出發點をドとしたのであります。此の時第三音のミとなるべき所をメとしましたのは、♭ミは♭メと呼ぶからであります。即ち、短音階のドレミの三度は短三度でありまして長音階よりは半音少いからミが半音下つてゐるわけであります。此處でドレミに嬰や變のついた時の呼び方を述べましよう。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | ディ | リ | フィ | シ | リ |
| ♯ | ド | —— | —— | —— | —— | —— | テ |
| ♯ | レ | —— | —— | —— | —— | —— | レ |
| ♯ | ファ | —— | —— | —— | —— | —— | サ |
| ♯ | ソ | —— | —— | —— | —— | —— | メ |
| ♯ | ♭ | ♭ | ♭ | ♭ | ♭ | ♭ | ラ |
| ♯ | ♭ | ♭ | ♭ | ♭ | ♭ | ♭ | |
| | | | | | | | |

2の場合には長音階の時と同じように歌ふのであります。第七音のソと云ふべき所がシとなつてゐますのは、第七音が半音上つて居りますからソと云ふよりもシと云ふ方が歌ひ易ひからであります。一般には此の第二の歌ひ方で居ります。又普通にはファが半音上つてもフィと嚴格に言葉を代へて歌つて居りません。音だけ半音あげて矢張りファと云つて居ります。

ドレミは外國語から來たものでありまして



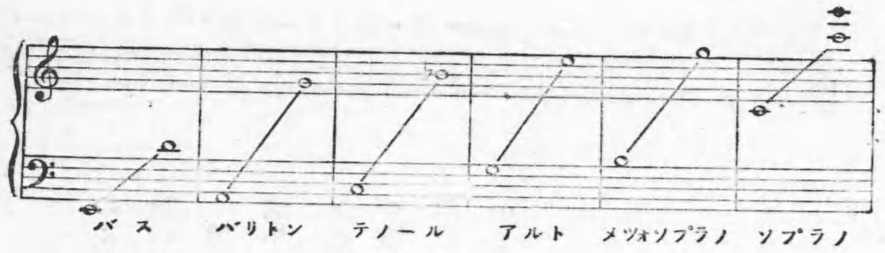



| ド | レ | ミ | ファ | ソ | ラ | シ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Do | Re | Mi | Fa | Sol | La | Si |

のようになります。此のド・レ・ミで書いた譜もあります。讃美歌などは本譜の上に此の讀み方で譜が書いてあります。(上圖の樣に)

聲にはソプラノとかアルト、テノール、バリトンなどの區別があります。此れは聲の區域から分けたものでありましてソプラノが女の一番高い聲。アルトは女の低い聲、テノールは男の高い聲、バリトンは男の中位の低さの聲であります。ですからソプラノの聲の人が歌ふ譜ではバリトンの人には余り高過ぎて歌へません。ですから歌をうたふ人は自分の聲がどの位出るかを知つて其の聲に合ふ譜を撰ぶのであります。今日では人間の聲を次ぎのように區別して居ります。

ソプラノ　(女聲高音)
メッオソプラノ　(女聲次中音)
アルト　(女聲中音)
テノール　(男聲次中音)
バリトーン　(男聲上低音)
バス　(男聲低音)



此の色々の種類の聲が一體どの位の高さでどの位の間の音を出すことが出來るかは上圖の表をお分りになりましよう。

此の音域は相當聲樂の練習をした人を標準としたものでありますから普通の人はもつと強くてまあ一オクタアヴ半位のものでしよう。ソプラノやテノールは練習によつてもつと高い聲を出す事が出來ます。

ソプラノにはリリック（抒情的）コロラチュア（色彩的）、ドラマテイック（劇的）の三種類があります。リリック・ソプラノは流暢な旋律に向いてゐますし、コロラチュアはリゴレットの中のカロ・ノメと云ふ歌のような華やかな、トレモロの多い歌に適してゐますし、ドラマテイック・ソプラノは表現が自由なものですから心理狀態をよく出すものに向いて居ります。

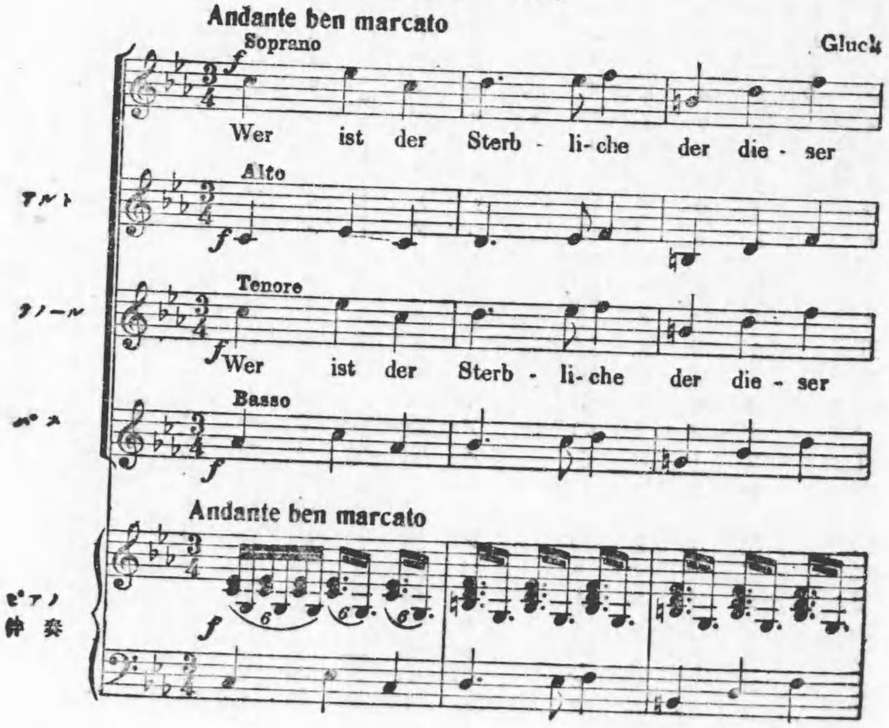
テノールもリリックとドラマテイックとの二種あります。

上の例のようにスラアが懸つてゐる時があります。此の時はトからホへ直ぐと移るのではなく、ヴアイオリンでしたらトを押へてゐた指でホの所までずらして上つて行くように中間の音を歌ひながら昇つて行くのであります。此れをポルタメントの歌ひ方と云ひます。



# Chor

（歌劇オルフォイス）




Humming —— の如く譜に指定してある事があります。此のハムミングと書いてある時には口を結んで聲を鼻へ響かせて歌ふのであります。

コーラス（合唱）にはソプラノとアルト、テノールとバス、など二部宛のもありますし、ソプラノからバスまで集まつたのもあります。女の聲の時には女聲合唱、男聲の時は男聲合唱と云ひます。混聲合唱と云ひますとソプラノ、アルト、テノール、バスの四種が集まつております。圖例は混聲合唱の樂譜です。

## 六、各種樂譜共通の記號

以上で大體色々の樂器に特有な譜の約束の事を話しました。此れ以上に尙ほ色々どの樂器や聲樂の樂譜に共通なものがありますから述べましよう。

Unison（ユニゾン）——日本では齊唱、或ひは齊奏と譯してゐます。齊唱と云ひますと同じ聲のもの、ソプラノならソプラノだけが多勢集つて一つの旋律を歌ふのであります。齊奏とは樂器の齊唱でありまして、ヴアイオリンならヴアイオリンだけで一つの旋律を奏くのであります。

Duetto（デュエット）——二重奏或は二重唱と譯します。二重唱ですと聲の性質の違ふ人が二人で唱ふ事です。例へばソプラノとテノールとの二重唱。二重奏は一個の樂器でも違つた旋律を奏く時にはかふ云ひます。例へばヴアイオリン二重奏。又ピアノとヴアイオリンの合奏も一個宛の時にはピアノ、ヴアイオリン二重奏と云ひます。

Trio（トリオ）——三重唱或は三重奏のことであります。ピアノ・トリオと云ひますとピアノが三つで彈くのではありませんで、ピアノとヴアイオリンとチエロとの三部合奏の事であります。

Quartetto（クワルテット、英語ではクオーテット）——四重唱、四重奏。絃樂四重奏（ストリング・クオーテット）と云ひますと、第一ヴアイオリン、第二ヴアイオリン、ヴイオラ、チエロと四つで合奏する事であります。

Quintetto（クインテット）——五重唱、五重奏の事であります。室樂五重奏と云ひますと絃樂四重奏に



クラリネットが加はつたもの、ピアノ・クインテットは絃樂四重奏にピアノが加はつたものです。

Double Quartetto（ダブル・クオーテット）——はクオーテットが二つ集まつたものであります。聲樂ですとソプラノ二人、アルト二人、テノール二人、バス二人都合八名、絃樂ですと第一ヴアイオリン二名、第二ヴアイオリン二名、ヴイオラ二名、チエロ二名で八名で、夫々自分の旋律を唱ひ、或ひは奏します。云ひかへると八重唱奏の形になります。

Solo（ソロ）——獨唱或ひは獨奏であります。

Accomp（Accompaniment）アツコムパニメント——伴奏の事であります。獨逸語では Begleitung（ベグライトウング）と云つて居ります。

Obb（Obbligato）オブリガート——助奏と譯して居ります。大抵聲樂に附けられるもので、歌つてゐる傍らでヴアイオリンかフリユートがそれを助けます。

Arr（Arrangement）アレンヂメント——編作或は改作と譯してゐます。原曲を直して彈きよくしたり歌よくした樂譜には此の言葉が附けてあります。

Op. ×（Opus ×）オープス何々——此れは作品番號の事であります。例へば Op. 81 Beethoven とありますと、ベートーヴエンの作品第八十一番のものだと云ふ事になります。

Intro（Introduction）英語、イントロダクション、Einleitung 獨逸語、アインライトウング、Introduzione 伊語、イントロドウチオーネ、共に導入部とか前奏部とか序とか序曲とか譯して居ります。云はゞ本文に

入いらない「はしがき」のようなものであります。

Coda（コーダ）——終曲部と云ひます。樂曲の終りの部分の事を云ひまして大尾とか大團圓と云ふ事と同じであります。

Trio（トリオ）——此れは三重奏のトリオと違ひまして、メニュエットとか行進曲の中央部の事を云ひます。

# 第十二章　音樂用語の解說

皆樣が音樂會にいらつしつたり、音樂の雜誌などを御覽んになる時に音樂だけしか使はない色々の言葉が出て來ますね。その言葉の意味がハッキリとわからないと音樂を聞いても其の面白さが半分にもなつてしまひます。で此處で音樂のプログラムなどに載つてゐる色々の言葉を解說しましよう。順序はイロハ順であります。

## イ

インテルメッツォ Intermezzo——間奏曲と云つてゐるもので歌劇の幕と幕との間に奏されるものであります。主として次の幕に現はれる氣分を表して居ります。

## ロ

ロンド Rondo——回旋曲と譯して居ります。音樂形式の一つでありましてソナタ（後で說明する）の



前身と見ることが出來ます。その組立の形を申しますと、主題の樂章→中間曲→主題の樂章→中間曲→主題樂章と云ふ樣になつて居りまして普通のロンドにありましては此の組合せが都合五つの樂章から出來て居ります。

ロマンス Romance——華想曲と譯して居ります。放浪樂人によつて歌はれた抒情的な物語歌の事を云つて居りましたが、今日では抒情的な、自由な樂曲に對して器樂曲に對しても此の名を附けて居ります。

## ハ

バラード Ballade——譚詩曲と譯して居ります。ロマンスと同じものであります。

バンカローレ Barrarolle——船歌であります。八分の六拍子のなだらかな曲でゴンドラを漕ぐ人々の民謠から起つて來たものであります。

## ホ

ホタ Jota——西班牙の舞踏曲の一つで、$\frac{3}{8}$拍子、或は$\frac{3}{4}$拍子の速ひ情熱的なものであります。

ポルカ Polka——ボヘミアの舞踏曲の一つで$\frac{2}{4}$拍子の歯切れのよいものであります。

ボレロ Bolero——西班牙の舞踏曲でありまして緩りした四分の三拍子のものであります。

## リ

リード Lied——日本語の歌曲であります。此の言葉はシューバートが澤山歌曲を作つてから一般的になつて來ました。藝術的な歌をリードと云ふのが普通になつて居ります。

リサイタル Recital ——獨奏會或は獨唱會のことであります。

## オ

オーケストラ Orchestra ——管絃樂の事であります。今日管絃樂で使はれて居ります樂器を申しますと

一、絃樂器——ヴアイオリン、ヴイオラ、チエロ、コントラバス、ハープ、ギタア、マンドリン

二、木管絃器——ピッコロ、フリュート、オーボエ、オーボエダモーレ、イングリッシュホルン、クラリネット、バセットホルン、ファゴット（バスーン）、サキソフォン

三、金屬管樂器——ホルン、トラムペット、バストラムペット、コルネット、トロムボーン、トウバ

四、打樂器——ティムパニ、トライアングル、大太鼓、小太鼓、カスタニエット、タムブーラン、シムバル、タムタム、ザイロフオーン、グロッケンシピール、チェレスタ等

絃樂器は管樂器に比べますと、音の量と云ふものは少ないのですが、管絃樂全體を案内して行く役目は大抵絃樂器であります。木管樂器は管絃樂に色と香とをたゞよはせるものでありますし、金屬管樂器は管絃樂に力を增し、その歩調をしつかりと定めさせて行くものであります。

オーヴアチューア Ouverture ——序曲とか序樂とか譯して居ります。始めはオペラの開幕音樂でありましたが、此頃になりまして序曲だけの獨立した作曲も出來て來ました。此れを演奏會用序曲と云つて居ります。此れは管絃樂で演奏するものであります。

オペラ Opera ——歌劇のことであります。管絃樂の伴奏で俳優が舞臺の上で歌をうたつて芝居をするのであります。大きく分けますとグランド・オペラ（大歌劇）コミック・オペラ（喜歌劇）とライト・オペラ（輕歌劇）とになります。又ドイツ歌劇、イタリイ歌劇、フランス歌劇とも分けることがあります。



オラトリオ Oratorio ——聖譚曲と譯して居ります。歌劇と似寄つたものでありますが背景や衣裳はつけません。歌が主となつて大抵管絃樂伴奏で筋は聖書中の基督の事跡を取扱つたものであります。

## ワ

ワンステップ One-step ——近頃のダンスの踊り方でありまして、それからダンスの曲の形式にもなりました。二分の二拍子のものであります。

ワルツ Waltz ——儀密に云ふとウオルツと發音します。フランスではヴアルス、ドイツではワルツアーと云つてゐます。日本では圓舞曲と云つて居ります。昔からあるもので四分の三拍子の舞踏曲でありますヨハン・シユトラウス作曲のウイーン・ワルツは代表的なものであります。今日社交舞踏に使はれてゐるのはワルツ・ボストンと云つてゐますもので、全く氣持のよい輕やかな感じを持たせてゐます。

## カ

カチュカ Cachucha ——西班牙の舞踏曲であつて三拍子のボレロに似たものであります。

カデンツア Cadenza ——樂曲の靜止法、樂曲の終りの二つの和絃等色々の意味がありますが、普通カデンツアと云ひますと樂曲の終りに附け加へられた華麗な曲の事を申します。主としてヴアイオリンやピアノの協奏曲（後で申します）の第一樂章の終りに出て來る華麗な奏部でピアニストやヴアイオリニストが

伴奏樂器から離れて腕を振ふ所であります。

カノン Canon ——曲則曲と譯して居ります。作曲形式の一つでありまして一つの旋律が出て來ますと其れに似た旋律が後から追ひかけてくる樣に現はれて來るものを云ひます。

カンタータ Cantata ——交聲曲。昔は器樂曲に對して聲樂曲をカンタータと云ひました。今日では管絃樂伴奏を有する獨唱、重唱、合唱より成りたつ大規模の聲樂曲ですが、オラトリオやオペラの樣に劇的なものはなく抒情的なものであります。

カンツオーネ Canzone —— 伊太利の古い歌の形式でありまして、その後は器樂曲にも用ひられてゐます。此の小さいものをカンツオネッタと云つてゐます。

ガヴォット Gavottoe —— フランスの舞踏曲で二分の二拍子、或ひは四分の二拍子の中位に速いものであります。バッハ時代には組曲の中の一つとなつてゐたものであります。

## タ

對位法——Kontrapunkt コントラプンクト或ひは Counterpoint カウンタアポイントの日本語譯でありまして、作曲上の方法でありまして二つ或はそれ以上の旋律を同時に組合せる事であります。

タランテラ Tarantella ——ナポリの舞踏曲の一つであつて八分の六拍子の情熱的な音樂であります。

タムブーラン Tambourin —— 大鼓に鈴の附いた西班牙の樂器の名でありますが、此の樂器を持つて踊る曲をもタムブーランと云ひます。二分の二拍子の輕快なものであります。



タンゴ Tango —— 現代の舞踏曲の一つでありまして緩りした四分の二拍子のものであります。所謂スパニッシュ・タンゴは三拍子のものでホタと同じものであります。

## ソ

ソナタ Sonata ——奏鳴曲と譯してゐます。ソナタ形式と云ふキチンと定まつた形の下に作曲されるものでありまして普通三樂章か四樂章に分れて居ります。大抵の場合、第一樂章と第四樂章とは速いもので第二樂章は緩りしたもの、第三樂章はスケルツォかミニュエット風の明るい舞踏曲風のものであります。ソナタと云ふ名は第一樂章がソナタ形式で作曲されてゐるからで、第四樂章もソナタ形式で作曲される事が多いのです。

ソナタ形式は示現部、展開部、再現部と此の三段に分ける事が出來ます。示現部と云ひますのは所謂主題の現はれる所でありまして此所で第一主題と第二主題とが現はれて來ます。展開部は示現部で出て來た主題を色々と取扱かつて姿を變へます。此所が作曲者の腕の見せ場です。再現部になりましてまた主題が出て來ます。示現部の時と同じ場合もあり多少變へられてゐる事もあります。

ソナタは器樂の爲めに作曲され、管絃樂の爲めに使はれるソナタを交響曲と云ひます。

即興曲 Impromptu（アムプロムプチュ）——始めは此の字のように即興的に作曲したものを云ひましたが後に至つては大三部形式と云ふように形式が定まつてきました。主としてピアノに向つて作られて居る卽興的で拍子の速いものであります。

**ラ**

ラプソディー Rhapsodie ——史詩とか狂詩曲とか譯して居ります。ラプソディーとは昔ギリシャで琴を鳴らしながら詩を吟じる事を云ふのでしたが今日では民謠をいくつも集めた器樂曲を云ふようになりました。リスト（作曲家）のピアノ曲ハンガリアン・ラプソディーは有名なものです。

**ノ**

ノクタアン No turne ——ノクチエルヌ或はノットウルノとも云ひ日本では夜曲と云つてゐます。昔は絃樂器か吹奏樂器の爲めに書かれた組曲の事を云ひ、夕暮に町の廣場で演奏したので此の名が出來ましたが今日では自由な形式で夢見る如き感情を盛つた器樂曲になりました。

**ウ**

ヴォードヴィル Vaudvill ——歌が中心となつた寄席の事であります。或は又流行歌やダンスを取り交せた一幕のことを云ふこともあります。此れと似たものにレビユウ Revue と云ふものがあります。

**ク**

組曲 Suite（スイト）——バッハ（作曲家）の頃にはジークだとかアルマンド等の舞踏曲を集めたものを組曲と云ひましたが今日ではビゼー（作曲家）のアルルの女の組曲やチャイコフスキーの胡桃割人形組曲のように色々の性質を持つた曲を組合せたものを組曲と云ふようになりました。

**マ**



マドリガル Madrigal ——牧歌と云つてゐます。三部か四部の合唱曲、或は器樂の獨奏曲に使はれてゐます。

マズルカ Mazurka ——ポーランドの舞踏曲で四分の三拍子の元氣の好いものです。

**フ**

ファンダンゴ Fandango ——スペインの舞踏曲で八分の三拍子の中位の速さのものであります。伴奏はギタアとカスタニエットを使ふのが特色であります。

ファンタヂア Fantasia ——幻想曲の事であります。形式にはかまわず自由に作曲したもので作者の幻想に依つて曲を作り上げ飽迄夢幻的な追憶空想と云つた樣なものであります。

フーグ Fugue ——遁走曲と譯してゐます。對位法を用ひたものゝ中で最も進歩したもので、その形式は一つの主題が幾回も出て來て恰も前のを追かけるようになる複雜なものであります。

・フォックストロット Fox-trot ——現今流行の舞踏曲でありまして四分の四拍子か二分の二拍子かであります。

プレリュード Prelude ——前奏曲のことでありましてオーヴアチユーアと同じ意味のものであります。

プリマドンナ Prima-donna ——歌劇俳優のうち最高の女優即ちスターの事です。

ブーレ Bourree ——フランスの昔の舞踏曲で四分の四拍子の愉快な曲であります。

**ロ**

交響曲 Symphony（シンフォニイ）——云はゞ管絃樂の爲めのソナタであります。交響曲の形式はソナタと少しの變りもありません。唯それが管絃樂で演奏するように作曲されたものであります。

コンチエルト Concerto ——協奏曲と譯して居ります。此の曲は矢張りソナタ形式で書かれて居りまして大抵三樂章から出來てゐる器樂獨奏曲であります。正式に演奏しますには管絃樂の伴奏でするのですがピアノの伴奏でされる事もよくあります。

コンサートマスタア Concertmaster ——第一ヴアイオリンの第一番目の奏者を云ひます。指揮者についで管絃樂の責任者でありまして管絃樂の全奏者は指揮者と共にコンサアトマスタアの演奏にもよく注意をして全體をこわさないように心懸けるのであります。

子守歌——外國語では Berceuse（ベルシューズ）或は Wiegenlied（ウイーゲンリード）と云つてゐます形式も拍子も一定してはゐません。唯子守の歌であります。然しショパン（作曲家）の子守唄などは子守をする母の心を描いたものと云ふ可きであります。

## ア

アルマンド Allemande ——獨逸舞踏曲の一つでありまして四分の三拍子の速いものであります。

アリア Aria ——エーアとも云つてゐます。歌謠と云ふ意味でありますが、主として歌劇の中の奇麗な獨立した曲のことを云ひます。

## サ



サラバンド Saradando ——三拍子の緩りした舞踏曲の一つでありまして四分の三か二分の三拍子であります。

## ミ

ミニユエツト Minuetto ——メニユエツトとも云ふ。古代フランスの舞踏曲の形式で四分の三拍子であります。此れにはトリオ（中間部）が附いて居ります。

ミリタリイバンド Military Band ——軍樂隊の事でありましてフランスではファンファアール Fanfar とも云つて居ります。普通軍樂隊と云ひますと吹奏樂器のみの意味にとります。

ミサ Missa ——メッセ Messe とも云ひます。ミサとはカソリック教會の儀式の事でありまして其の時の祈禱の文句に作曲したものをミサ曲と云つてゐます。

## シ

シャコンヌ Chaconne ——緩るやかな四分の三拍子の舞踏曲で大抵變奏曲が附いて居ります。

ショッティッシュ Schottsch ——ポルカに似た舞曲でありまして二拍子のものであります。

ジャズ Jazz ——今日流行の舞踏曲の事であります。南米印度人から起つて來ましたもので今では世界中を征服しようとする程流行してゐます。

曲はタンゴ、ワルツ、フオックストロット、ワンステツプ等の形で書かれて、リズムは強く、特色としてはシンコペーション（切分音）が澤山用ひられてゐることであります。今や在來の和聲學を蹴飛ばして

ジャズの和聲學を建てようとまでなりました。樂器はサキソフォーンが主となつて其れにバンジョウ、ウクレレ、ヴアイオリン、打樂器、ピアノ等が用ひられて居ります。此の中でサキソフォーンはジャズの生命とも云ふべき樂器であります。ジャズのオーケストラとしましてはアメリカのポール・ホワイトマン（音樂家）のが有名であります。

シチリアナ Siciliana ―― パストラールと似たものでありまして速さは中位の八分の六拍子で媚びるが如き曲であります。

## エ

エチユード Etude ―― 練習曲の事であります。演奏會用練習曲と云ひますのは主として演奏家の手腕を見せる爲めのものであります。

## ヒ

標題樂――Programme Music プログラムミユージックの譯語であります。絶對音樂に對するものでありまして、標題の附いてゐる音樂、即ち音樂によつて、何かの筋書き、順序、物語などを表はそうとする音樂の事を云ふのであります。リスト（作曲家）は此の標題樂の創作者と云はれて居ります。

描寫音樂――此れは標題音樂とは違ひます。描寫音樂は鶯を音樂的に表はそうとすれば直ぐ鶯の鳴聲を眞似した音を使ひます。森の鍛冶屋なぞは描寫音樂であります。

## セ



セギディラ Seguidilla ―― 西班牙の舞踏曲で火花を散らすような華々しい三拍子のものでカスタニエットを伴奏としてゐます。

セレナーデ Serenade ―― セレナーデ、シランドヘンとも云ひます。始めはノクタアンと同じように吹奏樂器の組曲でありましたが此頃ではヴアイオリンか歌の獨奏曲となり、その內容も小夜曲の名にふさはしいものになりました。

レシタチーヴ Re itativ ―― 叙唱と譯して居ります。歌劇にあつてアリアと稱してゐるものであります

アリアは歌でありますが、レシタチーヴは談話か物語風のもので節らしい節のない旋律であります。

絶對音樂 Absolute-music（アブソリユート・ミユージック）―― 絶對音樂と云ひますのは音樂そのものを目的とした音樂のことを云ふのであります。即ち音樂で何かを表はしたり いたりすることがなく唯音を目的としたものであります。ソナタやロンドは絶對音樂と云へます。

## ス

スコーア Score ―― 獨逸語ではパルチイトウル Partitur 日本語では總譜と云つて居ります。大譜表以上の譜表が集まつた樂譜を云ひます。しかしスコーアと云ひますと大抵管絃譜の事になつて居ります。管絃樂の總譜には各種の樂器が皆書かれてゐまして其の配列は一番上から、木管樂器族、金屬管絃樂器族、打樂器族、一番下に管樂器族が置かれてあります。ですから馴れゝば一目瞭然でありますが、スコアを讀む事は一つの技巧でありまして普通の樂典を學んだゞけでは到底わかりません。此のオーケストラのスコ

アをピアノ曲に編曲したものをピアノ・スコアと申します。

スケルツオ Scherzo ——ミニュエットから出て來たものでありまして明るい、幾分滑稽味のあるものでロンドやソナタの中間樂章として用ひられて居ります。

## 樂譜の習ひ方

今まで述べました事で樂譜とはどんなものかがおわかりになつた事と思ひます。今まで述べました事は音樂上では殆んど常識位のものでありまして譜を讀んで歌をうたおう、とかヴァイオリンを奏かうとなさる方々にはどれ一つとして不必要なものはありませんし、又どれ一つでも知らなければ譜が讀めなくなるのであります。殊に音樂にありましては音の高さ、音の長さ、音の強さと云ふものは何れ一つでも欠くことは出來ないものでありまして、此れが一つでも不足しますと、もう其れは音樂では無くなつてしまひます。

樂譜を讀む爲めには以上述べましたことを充分頭の中に入れて色々の樂譜を讀む事が最上の策であります。何時も人の歌つてゐる歌を聞きおぼへるのでは面白くありません。樂譜を讀む事に馴れさへしますれば、始めての樂譜を見ましても直ぐと歌へるようになります。そうなると譜を讀むことが愉快な仕事になつて來ます。名曲とか難曲とか申しましても樂譜そのものは以上述べました音樂上の約束以外に出るものではありません。そう云ふおどかし氣味の言葉に驚かないでその樂譜を展げて御覽なさい。

讀む事に馴れて來ましたら今度はその樂譜の中に仕舞はれてゐる魂を摑み出すようになさい。そうして



魂が摑み出せた時はどんなに嬉しいでしょう。盲人の眼の開いた喜びにも比べる位の喜ばしさです。然し此れは中々難しい仕事なのであります。若し此の樂譜の讀み方だけで滿足なさらない方がありましたら、進んで和聲學や對位法や樂式論などをお讀みなさい。すると此の符號のような樂譜が皆言葉や文字となつて話しかけるでしょう。

又音樂を聞きに行く前に出來るだけ樂譜を買つて讀んで行つて御覽なさい。あなた方の讀譜力を非常に伸ばしてくれるでしょう。それにあなた方が讀んだ時の感じと聞いた時の感じとを比べて見ることも面白い事であります。

終りにもう一度、樂譜がよく讀める爲めには樂譜をよく讀むことである、と云ふ平凡な理屈を繰返して置きます。（完）

# 和聲法

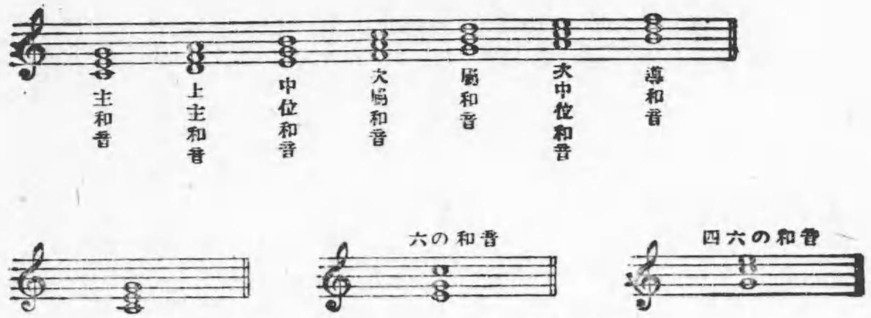
## 一、三和音

或る一つの音の上へ三度の間隔を隔てゝ三つの音が重ねられた時に三和音が出來ます。此の三和音には三つの種類があり、或る調の一度の上へ三度の間隔を隔てゝ二つの音を重ねた時のそのまゝの形態は三和音と云ひ、根音を轉回して三度の音即ち根音の上へ三度の音を重ねた音を低音としたのを六の和音と云つてゐます。第二轉回即ち五度が低音となつた時のものは四六の和音と云つてゐます。

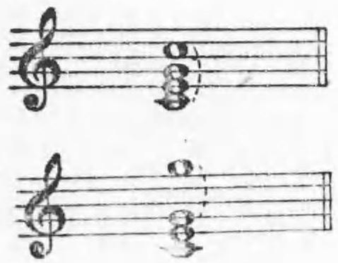
この三和音を四聲部に書かうとすると音が三つでは一つ足りなくなりますので何か一つ增さなければなりません。其の時は何をふやしたら良いかと云ふと、根音を轉回して重復するのが一番良いでせう。

根音を重復して都合の惡い時には第五音を重復

No.1

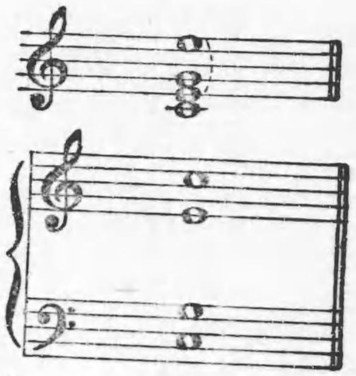



No.2

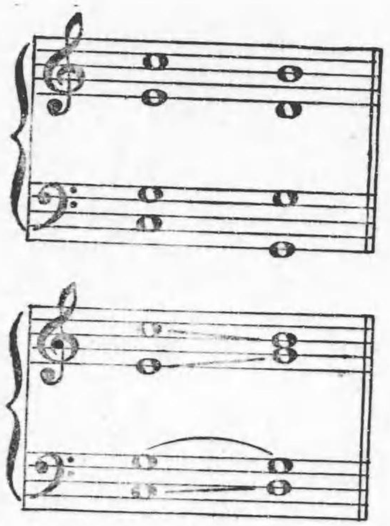




No.3



No.4



します。

これ等の根音又は三音がどうしても重復するのに都合の惡い時には第三音を重復します。しかし第三音を重復すると和音が非常に鋭くなりますので、なるべくさけた方が良いでせう。

## 二、並進行及反進行

合唱音樂では普通四聲部にしますが、書き方は高音部記號と低音部記號に分けて作られます。

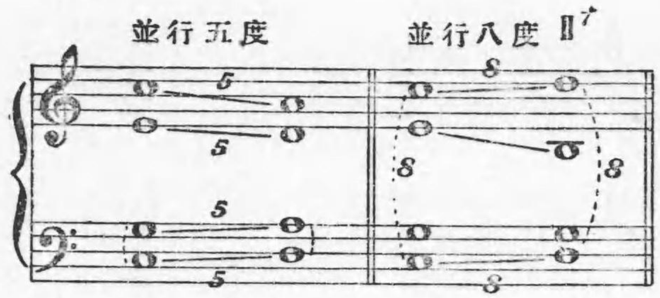
並行とは四つの聲音部が同じ方行即ち全部下行してゐるか、又は全部が上行してゐる時に並行と云ひます。

反行とは四聲音部のいくつかが或音は上行し、或る音は下行してゐるものを云ひます。

## 三、並行八度及並行五度

並行八度とは四聲音部の內或る聲部と或る聲部が八度の間隔で同方面に進んでゐる時の事を云ひ、和音では絕對に許されません。並行五度は前記と同じ樣な事ですが、八度が五度になるだけです。

No.5




四聲音部に書かれる時は、なるべく反進行させれば並行八度並行五度になる虞がありませんから、出來る事なら反進行させた方が良いでせう。

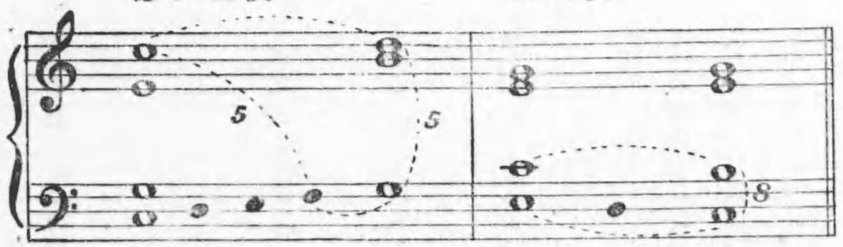
**四、隱伏八度及び隱伏五度**

隱伏八度とは表面に現はれてゐない並行八度の事です。隱伏五度も表面に現はれてゐない並行五度の事です。此の隱伏は外聲卽ちソプラノとバスの時は絶對に許されませんが、內聲卽ちアルトとテナーの時はかまひません。何故これ等の並行八度、並行五度又隱伏八度、隱伏五度が許されないかと云ひますと、これは實際に唄つたり奏いて見たりするとつまらないし、又とてもうつろな感じがするからであります。

**五、密集位置と開離位置**

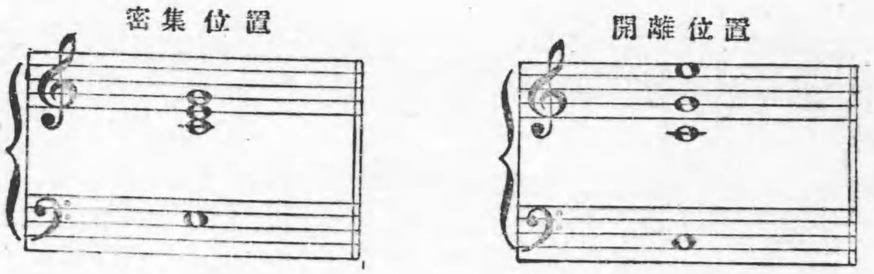
密集位置とは各聲音部がごちやゞ〳〵としてゐて、くつついてゐる四聲部の

No.6






No.7




事を云ひます。開離位置とは密集位置と正反對に各聲音部が非常に離れてゐるものの事を云ひます。

**六、六の和音**

六の和音は第一轉回の事だといふ事は前に述べましたが、其の使用法を述べて見ませう。

主三和音といふ和音は非常に堅い音がしますので仲に六の和音を加へて使用します。

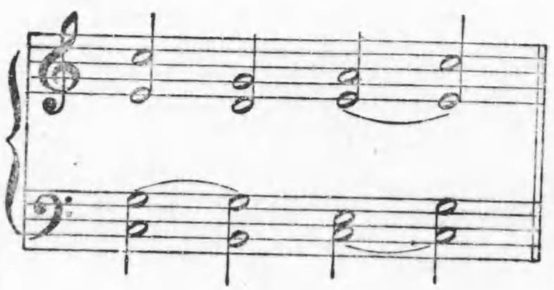
**七、六の和音の連續**

六の和音を連續して用ふる事がありますが、其の時は最初の六の和音が根音を重復したとすれば次の六つの和音は第五音を重復し、其の次の六の和音は又根音を重復する、そして次の六の和音は又五音を重復し、次には三度を重復するといつた樣に變へて重復して行きます。

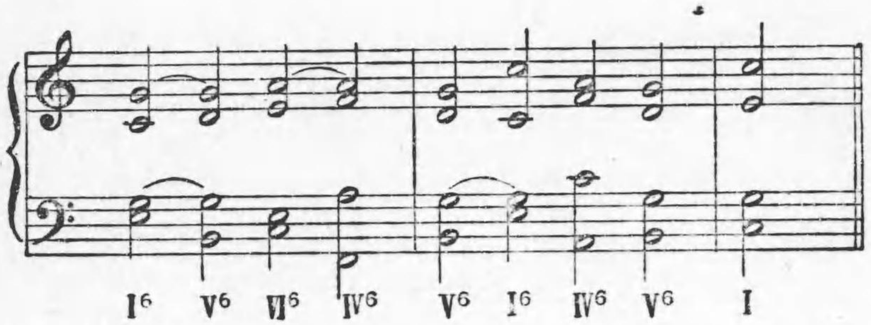
**八、四六の和音**

四六の和音は第二轉回である事は先程申上ましたが、この和音は非常に使用

No.8



No.9



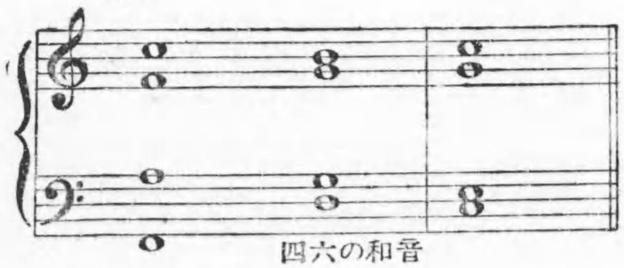

法がむづかしいのです。大低此の和音の使用される位置は曲の終りの前に使用されます。

さて此の邊で今迄に述べた三和音の内で、何が一番使用されるかを述べて見ませう。

先づ、主三和音で一番多く使用される和音は主和音、次屬和音、屬和音の三つで、其の次が二度上の和音（上主和音）及び六度上の和音（次中位和音）であり、導和音及び三度上の和音（中位和音）はあまり使用されません。此の場合導音に當る音は絶對に重復してしはいけません。導和音を使用する時でも根音たる導音は重復せずに第五音か第三音を重復して下さい。六の和音の場合はやつぱり主三和音の場合と同じです。四六の和音の場合もやはり同じですが、一番多く使用されるのは主和音の四六の和音ですから氣をつけて下さい。主和音の次に一番使用されるのは屬和音の四六の和音、次屬和音の四六の和音の樣な順序です。

増音程の進行といふのは樂典の章で述べましたが、この増音　を使つた進

No.10

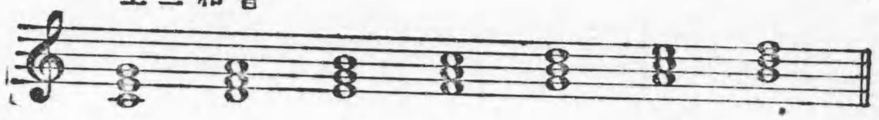


四六の和音

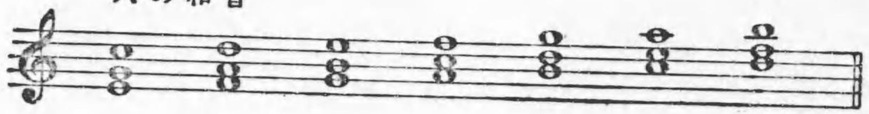


No.11

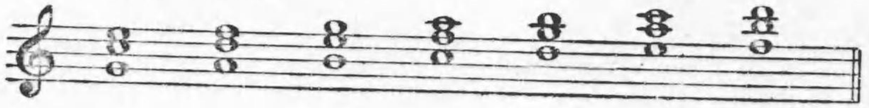
主三和音



六の和音



四六の和音



行はなるべくさける樣にして下さい。増音程は唄ひ惡いからです。

# 第十三章　七の和音の話

## 一、七の和音

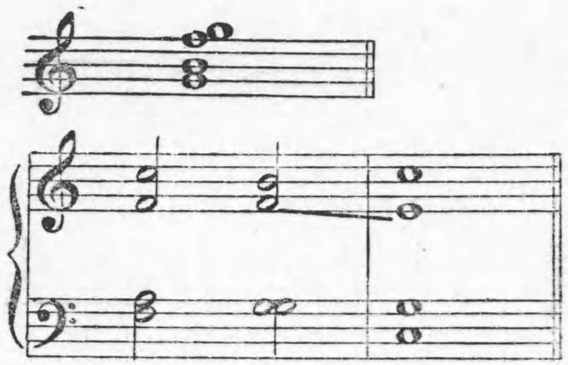
三和音の上に更に三度の音程を加へて四和音にすると七の和音が出來ます。七の和音は不協和音ですから獨立しては使用されません。七の和音の内で最も多く使用されるのは屬七の和音といつて五度上の七の和音であります。此の和音は終止の前か轉調の時に重に使用されます。

此の和音を使用する時には一音省略します

省略して一番良いのは第五音であります。次が第三音であります。一度と七度は絶對に省略してはいけません。省略したら根音を重復して使用します。尚此の和音を使用する時に

No.12

No.13



は前に七度の音の豫備音が必要ですが、屬七の此の場合はなくとも許されます。しかし使用された七度の音は二度下へ解決されます。

## 二、屬七の轉回

三和音にも轉回があつた樣に屬七の和音にも轉回があります。三和音の時には二つの轉回がありましたが、屬七の和音には三つの轉回があります。これは音が三和音の時より一つふえて四つになつたので當然三つの轉回が出來るわけです。第一轉回は五六の和音と云ひ、第二轉回は四三の和音、第三轉回は二の和音と云ひます。

第一轉回即ち五六の和音について例を上げて見ませう。

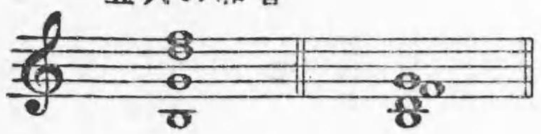
例を見ても分る樣に五六の和音は第三音が低音となつてゐます。第二轉回即ち四三の和音及四三の和音の時は……(下圖參照)

## 三、七の和音の解決

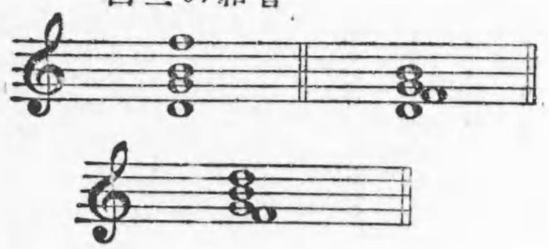
七の和音は不協和音でありますから必ず豫備がありそして解決

No.14

五六の和音

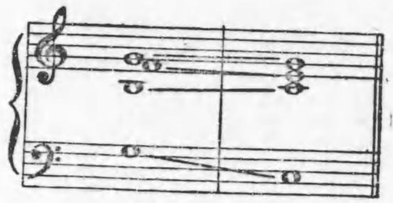


四三の和音





No.15



されます。何故解決されなければならないかといふに、此の和音は不協和音で中ぶらりんですから、何んとなく賴りのない和音です。それで一本立の和音即ち三和音へ解決されるわけです。此の解決方法は次の樣になります。

根音は四度上行又は五度下行又はそのまゝの音で解決されます。

第三音は一度上行して解決されます。

第五音は二度上行又は一度下行します。

第七音は二度下行して解決されます。

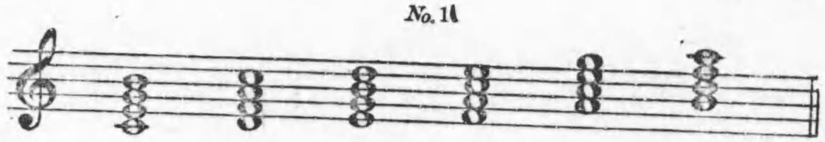
## 四、副七の和音

五度上の七の和音以外に出來る七の和音を副七の和音と云ひます。即ち一度上の七の和音、二度上の七の和音、三度上の七の和音、四度上の七の和音、六度上の七の和音、七度上の七の和音等です。

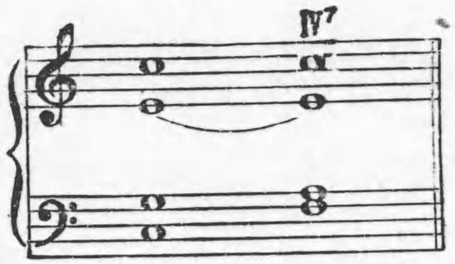
副七の和音は屬七の和音と違つてあまり使用されません。七の和音の内で屬七の和音が協和音とすれば副七の和音は全部不協和音です。副七の和音でも三度の副七はほとんど使用されません。

此の副七の和音は屬七の和音の樣に五音等は省略せずに使ひます。

No.16



No. 17

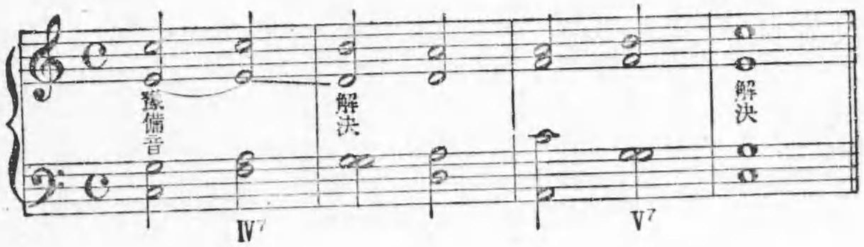


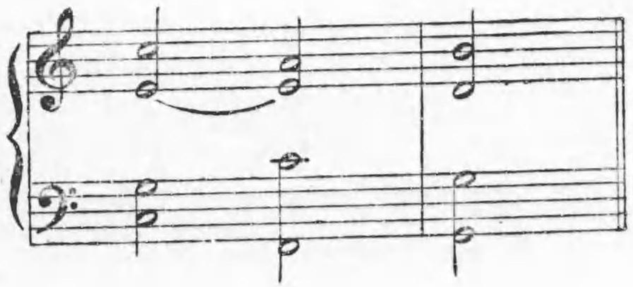

尙豫備音はやつぱり必要です。此の豫備音がないと、とてもきたなく聞えるからです。

尙こゝで云つて置きたい事は七の和音の不協和の音即ち第七度は二度下へ解決されます。豫備音を持つてゐてしかも二度下へ解決と云つた樣に仲々免倒な和音です。しかし使用するからにはこれは守つてもらはなければなりません。

前例(例十七)は副七の內の四度上の七の和音の使用法です。次に副七の和音の使用の實例を上げて見ます。

No. 18

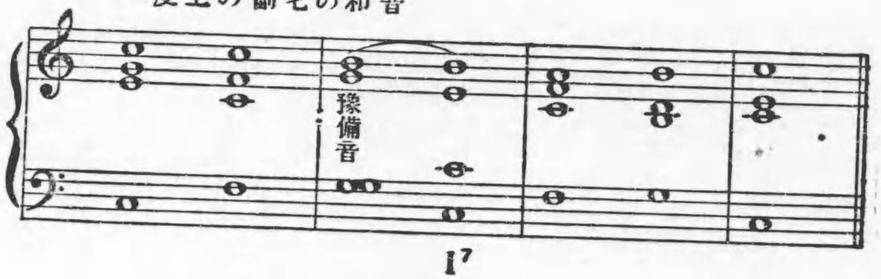


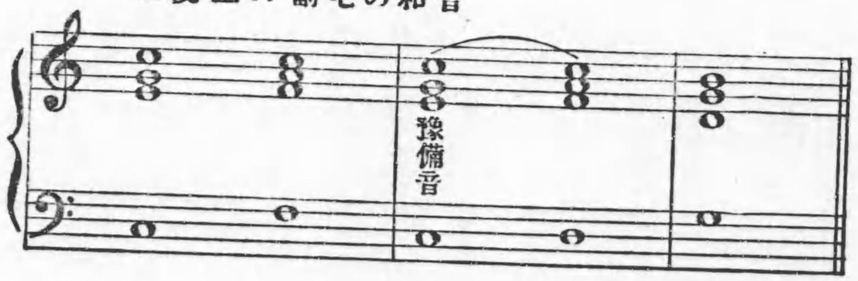


No. 19

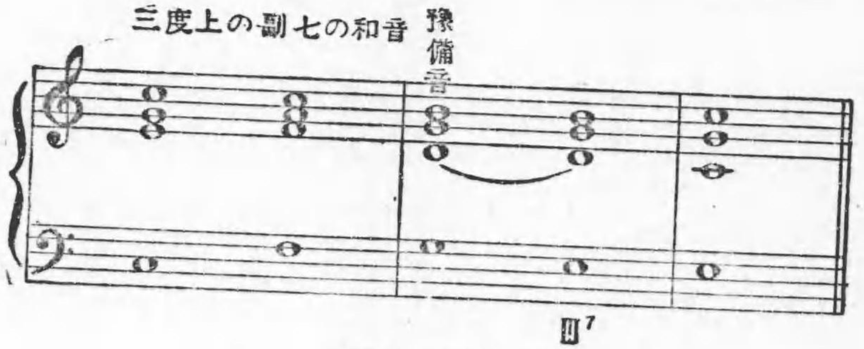
一度上の副七の和音



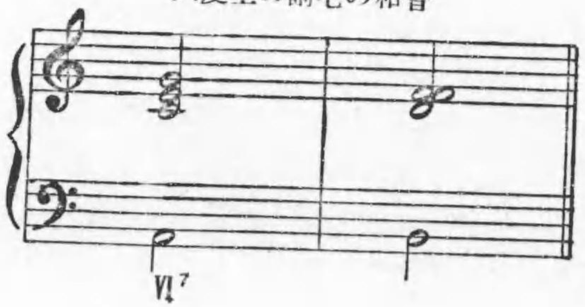

二度上の副七の和音




三度上の副七の和音

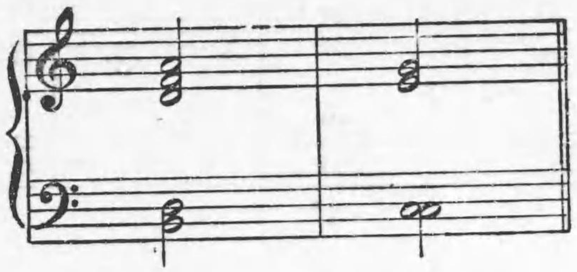



六度上の副七の和音



No.20

七度上の副七の和音



副七の和音は屬七の和音の樣に音は省略されません。副七の和音の内七度上の和音は三和音の時と同じで根音が導音ですから特に氣をつけて下さい。今此處に副七の和音をませた使用法の例を上げて見ませう。

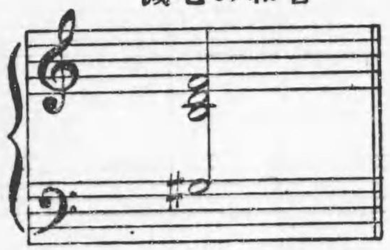
## 五、減七の和音

短音階の導音の上の七の和音の事を減七の和音と云ひます。何故減七の和音と云ふかと云ひますと、七度上の七の和音は短和音よりさらに半音縮まつてゐるからであります。例を上げて見ませう。

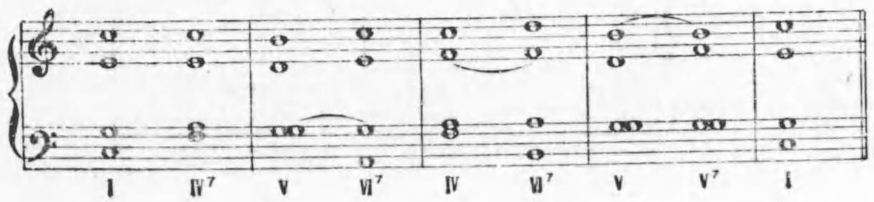
此の時もやつり根音の重復はさける樣にして下さい。根音が導音になるからです。

此の和音が使用される時には其の前に二度上の七の和音が非常に多く用ひられます。此の二度上の七の和音と減七の和音の

減七の和音

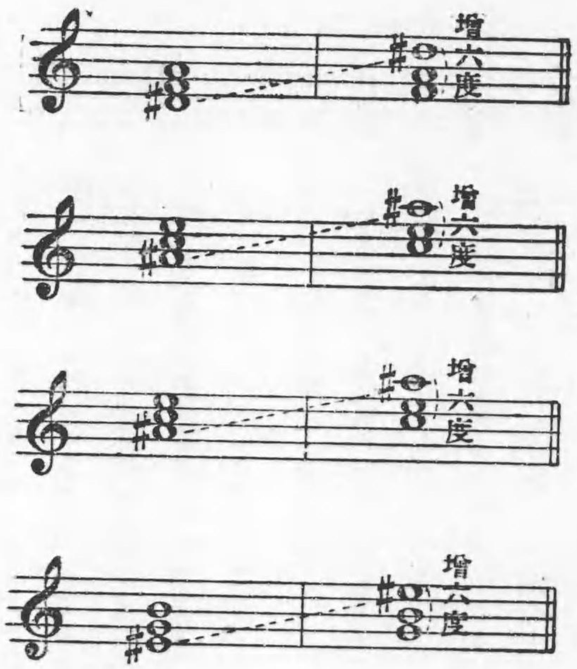


No.21






No.22




連續は長調の時でも非常にきれいですが、短調の時は特にきれいに聞えます。

## 六、増六の和音

長調の二度上の和音の根音を半音上げて第一轉回にすれば此の増六の和音が出來ます。又同じく六度上の三和音の根音を半音上げて第一轉回すれば増六の和音が出來ます。今例を上げて見ませう。

短調の場合でも第一度上と第四度上に出來ます。

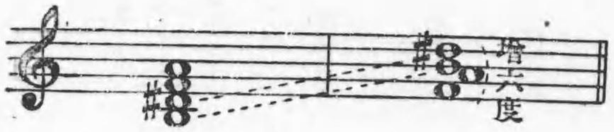
## 七、増四六の和音

長調の七度上の七和音の第三音を半音上げ第二轉回すると増四六の和音が出來ます。

## 八、九の和音

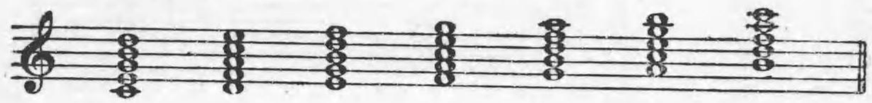
七の和音の上へ更に三度の音程を以て築いた和音を九の和音と云ひます。根音から最高

No.23



No.24

九の和音



まで九度の音程があるので九の和音と云はれて居ります。

此の九の和音は七の和音より更に不協和音になります。音が五つになりますので四聲部を作るには一つ音が多すぎますから何か省略しなければならない音が出て來ます。其の時は第五音を省くのが一番良いのです。其の次に省略して良いのは第七音です。第三音と第一音及び第九音は絶對に省略してはいけません。第五音を省略するには第七度と第九度に豫備音が必要です。第七音を省略する時でも九度の豫備音は必ず必要です。九の和音はやたらに使はずに經過的に使用します。

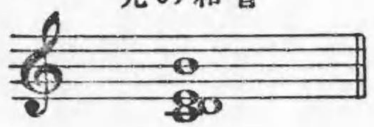
## 九、十一の和音

九の和音の上へ更に三度の音程を過て六つの音から成る和音を十一の和音と云ひます。

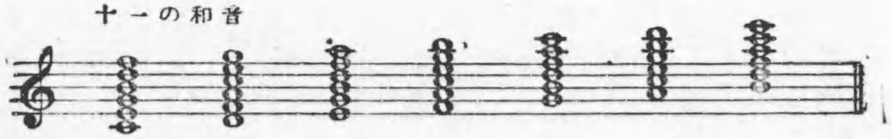
この和音を使用する時には二つの音を省略します。即ち第五音と第九音を省略して使用します。この和音も獨立しては使用せずに第七音以上は豫備をつけて使用して下さい。

No.25

九の和音

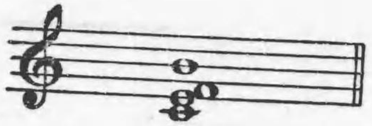


十一の和音





No.26



十三の和音

## 十、十三の和音

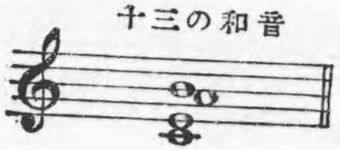
十一の和音の上へ更に三度の音をつけると十三の和音になります。この使用法も同じです。

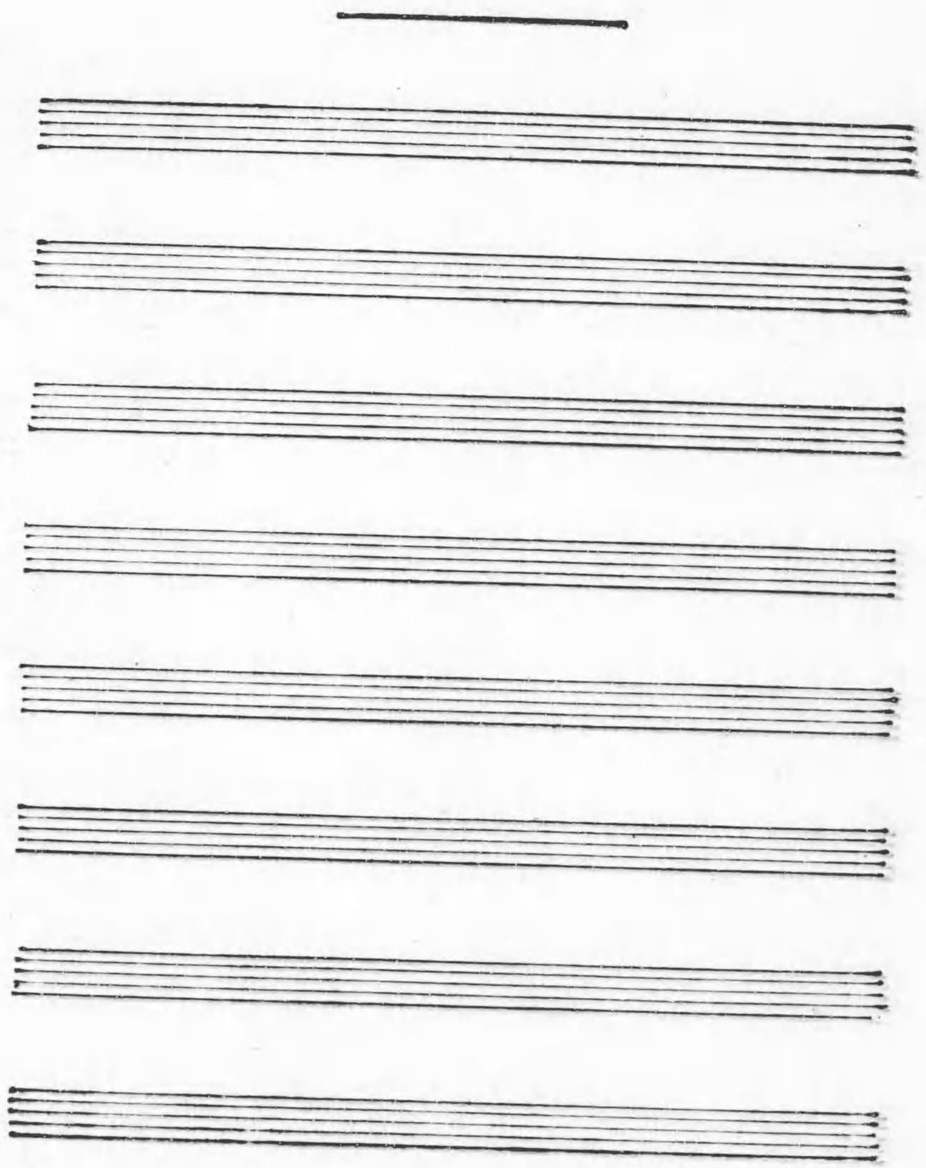
この和は音階の音全部が含まれてゐます。これを四聲部にするには三つの音を省略しなければなりませんので第五音と第九音及第十一音を省略します。

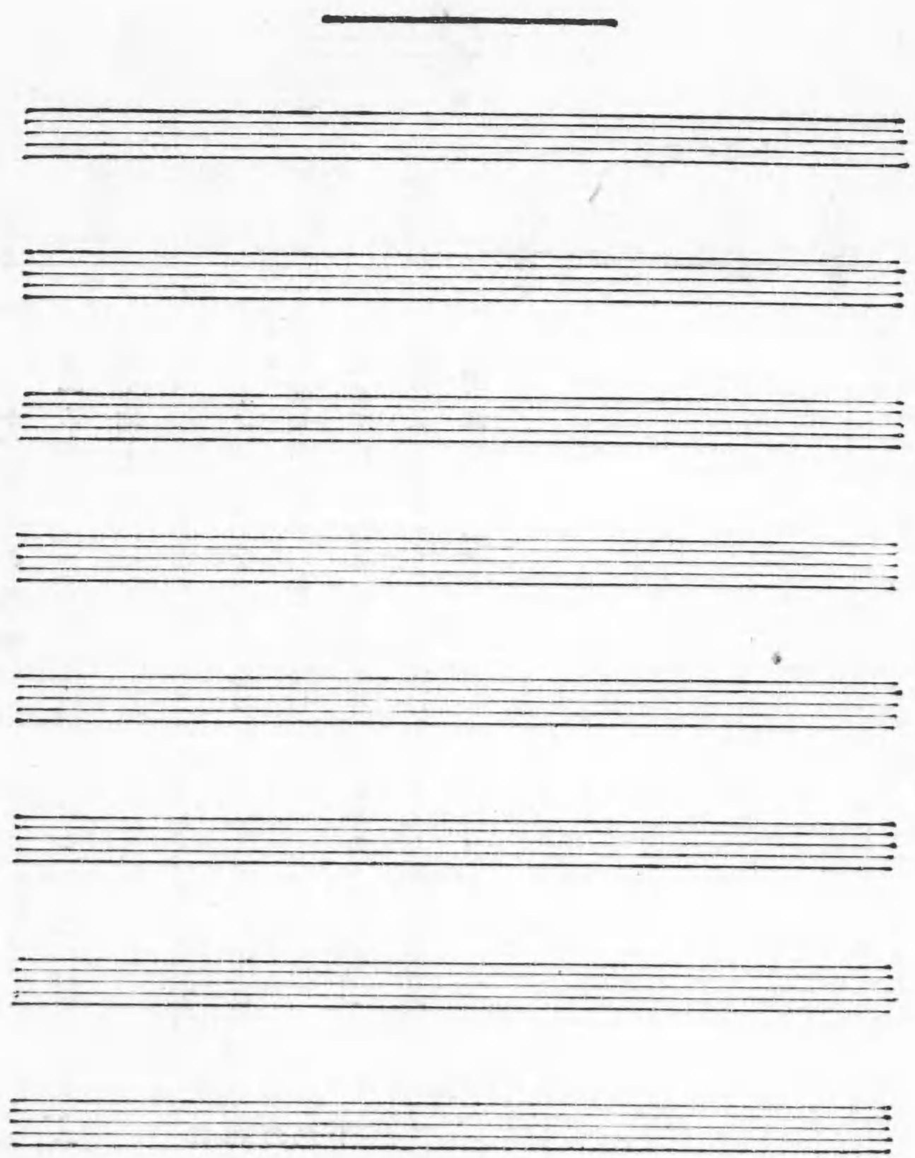
和音ではこれ以外には變和音だけしかありません。これは此の本の程度としては非常にむづかしくなるので和聲學の本で御覽下さい。

No.27

十三の和音







服部逸郎著

## 聲樂家になるには

定價 金壹圓
送料 六錢

第一講 誰でも聲樂家になれるか？
第二講 聲樂家になる爲の勉强法
第三講 獨學する人への注意
第四講 どうしたら認められるか
第五講 聲樂家の生活
吹込について・吹込の實況・實演と演奏旅行・流行歌手の將來性・終りに臨んで
附錄日本に於けるレコード會社とその陣容

上原 敏述

## レコード歌手入門

定價 金壹圓
送料 六錢

東海林太郎 デイック・ミネ
霧島昇 ミス・コロムビア
松島詩子 序文

## 歌手になる道

定價 金壹圓貳拾錢
送料 六錢

### こんな人々はぜひ共本書をお讀み下さい

一、自分は果して歌手としての資格があるだらうかと迷つてる人　二、歌手になりたくもレコード界についてを持たない人　三、あたら有望の村を持ちながら指導者のない人　四、レコード歌手として田舍で獨學せんとする人　五、吹込の要領、マイクの位置を知りたい人　六、レコードやラヂオの試驗を受けたき人　七、歌手はどの位收入があるかを知りたい人　八、現在第一線歌手はどうして勉强したか知りたい人　九、譜の讀み方を學びたい人　十、どうしても歌手で身を立てたき人

本書には歌手を志す人に對して問答式に、詳細記述したる外、奥屋熊郎・松坂直美・松村又一・大村能章・島田芳文・服部逸郎・高橋掬太郎・宮脇春夫・江口夜詩・西條八十・島田磬也・森義八郎・清水みのる・佐藤惣之助・細田義勝・明本京靜・佐伯孝夫・坂田義一・田村しげる・長津義司・宮田東峰・青柳道雄・鳴瀨純平・島口駒夫・近藤廣・東辰三・仮田景廣・山下五郎・藤田まさと・以上の諸先生方に皆さんへの希望や今後の歌手に對する注意を書いて頂きました東海林太郎・上原敏・兒玉好雄・鹽まさる・霧島昇・新田八郎・井田照夫・北原太郎・林伊佐緒・岡晴夫・松原操・松島詩子・渡邊はま子・二葉あき子・青葉笙子・鶴田六郎・デイック・ミネ・田端義夫・の方々の出世物語を實話讀物として記載致しました。

門馬直衛著

## 和聲の話

定價 金六十錢
送料 六錢

音樂を本當に理解するには和聲の知識が必要です。樂典を學んだだけで音樂が解つたと思ふのは大きな間違ひです。女學校も中學校でも樂典をやりますが、音樂がよく解るやうになりません。それは和聲を知らないからです、和聲は音樂の音の使ひ方、組み合せ方です。之を知ると、どんなに六ケしい曲でも底の底までよく解り、本當の面白さが感じられるやうになります。音樂をする人は何を犧牲にしても、まづ「和聲の話」を讀まなければなりません。

伊藤義雄著

## 和聲學自修問答

定價 金一圓五十錢
送料 十二錢

難解な和聲學の事を問答式にて誰にでも分る樣說明した本書音樂學校入學志望者必讀の書

佐和輝禧著

## ピアノ卽奏のための和聲法

定價 金一圓
送料 十二錢

ピアニストになりたい人、作曲家になりたい人、誰もが必要とする和聲學を、ピアノを奏き乍ら會得され、和聲學を會得し乍らピアニストになれる本がこれだ。今迄要求され乍ら出なかつた此の種の著書、歐洲に於ては一流の作曲家は皆此の種の著書に依つて勉强したのである。ピアニストになりたい人作曲家になりたい人には是非おすゝめする。

佐和輝禧著

## 音樂指揮法

定價 金一圓
送料 九錢

指導者の任務、パートン法、スタートの振り方、演奏上の要點、樂員の配置管絃樂の指揮、歌劇の指揮其他音樂指揮に關するあらゆる知識はことゝく本書に極め盡されて居ります。

門馬直衛著

## 聖樂の話

定價 金一圓五十錢
送料 九錢

世界著名の大音樂家のそれ〴〵傳記、逸話、寫眞入りにて詳細に面白く讀み物的に書いた二百數十頁の大册

門馬直衛校閲　森田綠著

## 音樂の聽き方

定價　金五十錢
送料　金六錢

ラヂオにレコードに音樂を聞く機會は毎日あります。たゞぼんやりと聞いてゐては面白さは半減されて仕まいます　甚だしい人は洋樂はつまらぬ等と言つて聞かぬ人さへあります。この本を讀んで音樂の聞き方が分れば忽ち大の音樂ファンになる事請合です。

田村しげる著

## 簡易作曲法

定價　金一圓八十錢
送料　十五錢

著者の言――此の著書は私が長年作曲に從事して來た體驗から得たもので最も分りよくそして詳細に書いてあります。例へば典から旋律法・和聲學・形式論・編曲法・流行歌・童謠等あらゆる部門に渡つてゐます。私の著書の内最も自信があり、これ一册で何でもわかると斷言致します。

島口駒夫著

## やさしい作曲の仕方

定價　金八十錢
送料　九錢

本書は音譜の讀み方から初めて此の本一册で完全に作曲が出來ます。詩の撰び方、アクセント、編曲の仕方、伴奏の附け方等詳細に記述してあります　それにレコード會社へ作曲のテストの受け方、著名作詩作曲家の住所錄も載錄致しました。

新興音樂文庫

## 流行歌の作曲法

定價　金三十錢
送料　三錢

近代人であるあなたは流行歌を聞く事も唄ふ事も好きであるに違ひありません、併し一つ作曲して見樣とお思ひになりませんか。一通りの作曲法を心得て置いてこそ歌曲に對する面白さも倍加されるものです。新興音樂文庫は奉仕的に出版して居るもので定價は安くとも内容は親切丁寧です。

## 古賀政男作曲問答

定價　金一圓五十錢
送料　九錢

流行歌作曲のオーソリテー古賀政男先生に作曲に關する知識を伺ひました作曲を志す人は先づ本書を、尚レコード界案内としてレコード界進出の緒口作詩家との關係、レコード關係者の住所錄等を附しました。

## 聲學教本

安倍盛著

### 伴奏付コールユーブンゲン

定價　金一圓五十錢
送料　十五錢

伴奏付コールユーブンゲンについて聲樂家原信子先生は次ぎの樣にお話しください。

私はじめ音樂を學ぶ誰にも必要なコールユーブンゲンは今迄音程の練習だけに用ひてゐましたが今度安倍盛氏が大變丁寧に伴奏を付けて下さつたので聲の方の練習音樂として非常に便利なものになりました。又教師用として急拵への伴奏に頭をなやます必要もなく又初歩の人が伴奏に早くなれるにも又ハーモニーの勉强にもなりますから重寶です。

聲樂家になるには必ず練習しなければならないコールユーブンゲン

聲樂家を志す人の第一番に持たされる教本コールユーブンゲン

聲樂社では伴奏付コールユーブンゲンを出版して各方面の愛用を賜り既に數十版を重ねて居りますがもつと普及を圖る爲解說付コールユーブンゲンを出版しました、他社よりも發行されて居りますがこんなに親切に教へこれ程親切的定價はありません、他社のより數十錢安い、僅かに定價八十錢　發料九錢

島口駒夫著

### 解說付コールユーブンゲン

定價　金八十錢
送料　九錢

### 歌の唄ひ方

定價　金八十錢
送料　九十錢

先に「作曲家になるには一部を發表して好評を博した著者が再び筆を執つたものです。

内容　發聲法から聲の養生法に至るまで親切丁寧に述べられてあります

發聲法・發音法・母音と子音・音域・音階・呼吸法・ボルタメント・スポカット・レガート・變聲期・大入の聲音・音聲・裝飾音の唄ひ方・練習時間・聲の養生法等附錄聲樂家住所錄・音程練習の爲の樂譜

松村又一著

### 流行歌の唄ひ方

定價　金十錢
送料　三錢

本書の内容　姿勢に就いて・呼吸練習するには、練習の効果、呼吸の種類練習の方法、發聲の仕方、發聲法の目的、發聲の要領、音階の練習、長音階の唄ひ方、短音階の唄ひ方、音程練習について、拍子のとり方、雜種記號、息の切り方、半音階の唄ひ方、發音法、母音、音の增減法、唄ひ方の實際　以上を親切丁寧に說明したつた十錢

### 流行歌の作り方

定價　金八十錢
送料　九錢

流行歌をたゞ單に唄ふばかりでなく、自分でも一つその歌詞を作つてみやうと志す諸君にとりて、これは又と得難い良い指南書です。虎の卷です。著者は民謠、流行歌壇で第一人者、その豐富なる學才と多年の經驗を充分傾倒して書かれただけに、一讀成程と合點のゆける良書で、說明が非常に親切で添削實例が豐かです。

志摩良輔著　四六倍判　伴奏原語付

世界國歌愛國歌集（詳細なる解說付き）

定價金五十錢　送料九錢

一、大日本帝國國歌「君ケ代」は軍隊喇叭譜
二、大日本帝國愛國歌「愛國行進曲」
三、獨逸國歌「獨逸は世界に冠たる國ぞ」
四、獨逸愛國歌「ナチスの歌」
五、伊太利國歌「國王行進曲」
六、伊太利愛國歌「黑シャツ黨の歌」
七、西班牙國歌「國王行進曲」
八、滿洲國國歌「天地內有了新滿洲」
九、中華民國、維新臨時兩政府國歌「鄉雲歌」
一〇、中華民國維新、臨時、兩政府愛國歌「五色旗之下」
一一、英國國歌「君がいのち永かれ」
一二、米國國歌「星條旗」
一三、佛蘭西國歌「ラ・マルセイユ」

新興樂譜總目錄四錢切手封入御申込次第無代進呈致します

昭和十六年五月十日印刷
昭和十六年五月十五日發行

編者　鹽入龜輔

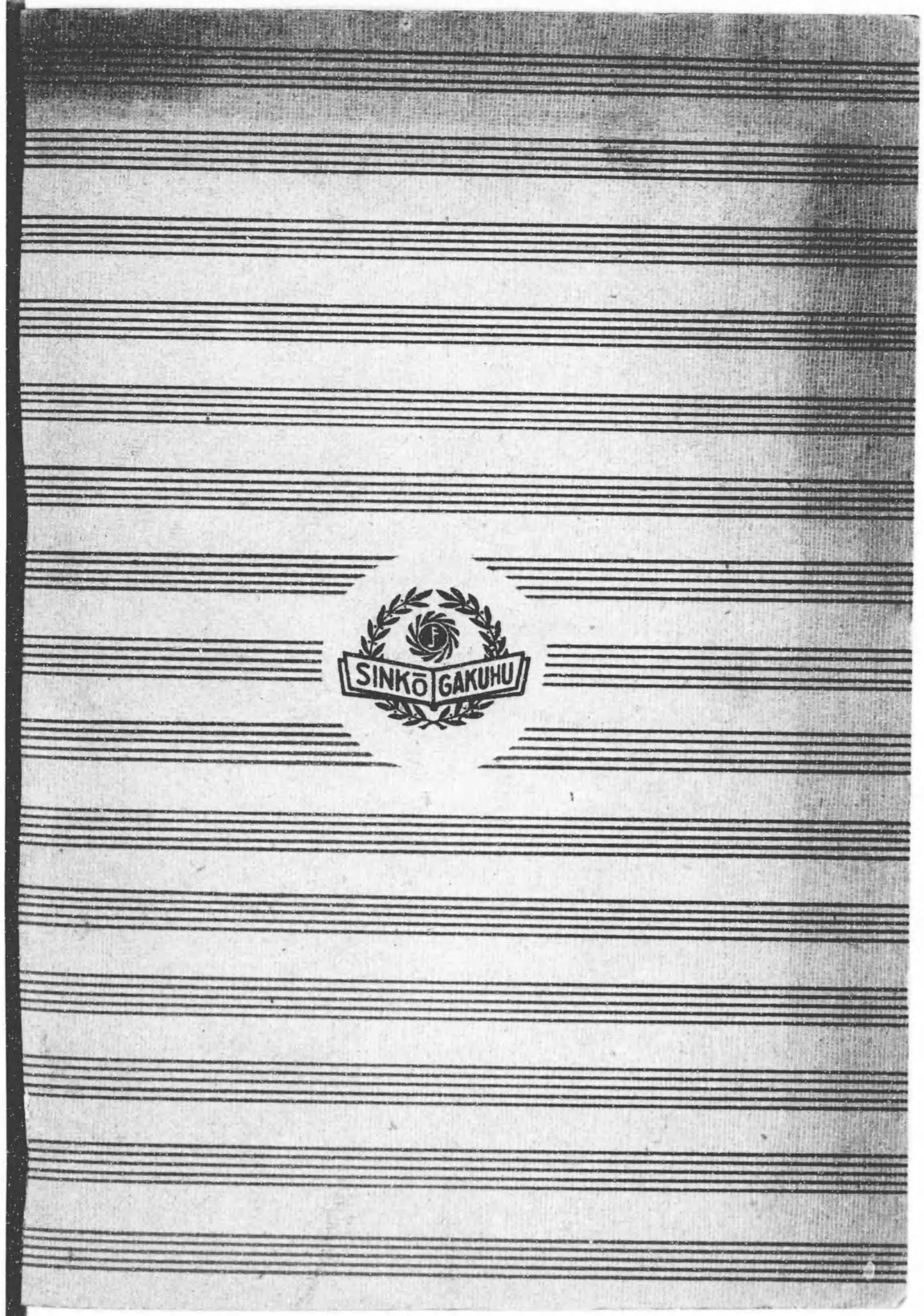
發行者　東京市淀橋區戸塚町四ノ五九〇　草野貞二

印刷者　東京市牛込區辨天町二　高田幸松

印刷所　東京市牛込區辨天町二　高田印刷所

發行所　東京市淀橋區戸塚町四ノ五九〇　新興音樂出版社
電話牛込二三二一番
振替東京四二九八一番

版權所有
不許複製

定價金六拾錢

終